

茨城県教育財団文化財調査報告第136集

北関東自動車道（友部～水戸）建設
工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

大 作 遺 跡

大 畑 遺 跡

平成 10 年 3 月

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 茨城県教育財団

2/0.2.3/
I II
113

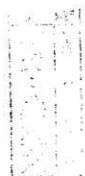
茨城県教育財団文化財調査報告第136集

北関東自動車道（友部～水戸）建設 工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

おお さく
大 作 遺 跡
おお ぼたけ
大 畑 遺 跡

平成 10 年 3 月

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 茨城県教育財団



98613003

大畑遺跡



大畑遺跡遠景(南から北方向を望む)



大畑遺跡出土弥生土器

大畑遺跡



旧石器 接合資料1



旧石器 接合資料2



第1号石器集中地点出土石器

序

北関東自動車道は、北関東3県の主要都市と常陸那珂港を結ぶ高速道路です。また、東京から放射状に延びる3本の高速道路を横断的に結ぶことにより、均衡のとれた交通体系の整備を図るとともに、太平洋側と日本海側を結ぶ高速道路として北関東地域における総合的な発展を推進する基盤施設であります。

北関東自動車道（友部～水戸）建設予定地内には、埋蔵文化財の包蔵地である大作遺跡、大畑遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から北関東自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業について委託を受け、平成8年4月から平成8年12月にかけて、上記2遺跡の調査を実施してまいりました。

本書は、大作遺跡及び大畑遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深めると共に、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である日本道路公団からいただきました多大な御協力に対し心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただきましたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成10年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

- 1 本書は、日本道路公園東京第一建設局の委託により財団法人茨城県教育財団が平成8年4月から12月まで発掘調査を実施した大作遺跡、大畑遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は、次のとおりである。

人作遺跡 茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡字大作818番地ほか
 大畑遺跡 茨城県東茨城郡茨城町大字人戸字穴戸道517番地ほか

- 2 人作遺跡、大畑遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事長	橋本 昌	平成7年4月～	
副理事長	中島 弘光	平成7年4月～	
常務理事	梅澤 秀夫	平成8年4月～平成9年3月	
	齋藤 紀彦	平成9年4月～	
事務局長	小林 隆郎	平成8年4月～平成9年3月	
	西村 敏一	平成9年4月～	
埋蔵文化財部長	沼田 文夫	平成8年4月～	
埋蔵文化財部長代理	河野 佑司	平成6年4月～	
企画管理課	課長	小嶋 弘明	平成8年4月～平成9年3月
	課長	河崎 孝典	平成9年4月～
	課長代理	根木 達夫	平成7年4月～
	課長代理	清水 薫	平成9年4月～（平成8年4月～平成9年3月係長）
	主任調査員	小高 五十二	平成8年4月～
経理課	課長	河崎 孝典	平成8年4月～平成9年3月
	課長	鈴木 三郎	平成9年4月～
	主任	田所 多佳男	平成8年4月～
	課長代理	大高 春夫	平成8年4月～平成9年3月
	主任	小池 孝	平成8年4月～
	主任	宮本 勉	平成9年4月～
	主任	柳澤 松雄	平成8年4月～平成9年3月
	主任	小西 孝典	平成9年4月～
調査課	課長(部長兼務)	沼田 文夫	平成8年4月～
	調査第二班長	根本 康弘	平成8年4月～平成9年3月
	主任調査員	池田 晃一	平成8年4月～平成8年12月調査
	副主任調査員	長谷川 聡	平成8年4月～平成8年12月調査
整理課	課長	小泉 光正	平成9年4月～
	副主任調査員	長谷川 雅	平成9年7月～平成10年3月整理・執筆・編集

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、窪田恵一氏にご指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指母、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概要

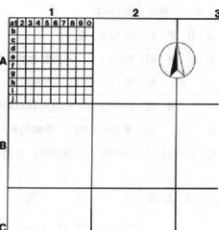
ふりがな	きたかんとうじどうしゃどう(ともべ〜みと)けんせつこうじちないどうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	北関東自動車道(友部〜水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告Ⅱ						
副書名	大作遺跡 大畑遺跡						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第136集						
編著者名	長谷川 聡						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 Tel 029-225-6587						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 Tel 029-225-6587						
発行年月日	1998年(平成10年)3月20日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大作遺跡	茨城県東茨城郡 茨城町大字勸慶 字入作818番地ほか	08302	36度 18分 10秒	140度 23分 57秒	19960401 ～ 19960531	2,380㎡	北関東自動車道建設工 事に伴う事前調査
大畑遺跡	茨城県東茨城郡 茨城町大字大戸字 矢戸道517番地ほか	08302- 078	36度 18分 27秒	140度 25分 26秒	19960601 ～ 19961231	10,879㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
大作遺跡	集落跡	旧石器時代			石器(尖頭器)		
		縄文時代	炉	穴 7 基	縄文土器片(早期)		縄文時代の炉穴
		古墳時代	竪穴住居跡 竪穴遺構	1 軒 1 基	土師器(埴, 甕) 土製品(球状土甕)		古墳時代の集落
大畑遺跡	生産跡 集落跡	旧石器時代	石器製作跡	1 か所	剥片, 敲石		メノク剥片101点出土
		縄文時代	竪穴住居跡 陥し穴	1 軒 3 基	縄文土器片		
		弥生時代	竪穴住居跡	10 軒	弥生土器(十丁台式, 二軒 屋式), 土製品(勾玉, 紡錘 車), 鉄製品(鉄鏝, 鎌)		弥生時代後期の集 落跡
		古墳時代	竪穴住居跡	1 軒	土師器(埴)		
		中・近世	道路跡 地下式城 井戸 炭焼き窯 墓	1 条 2 基 2 基 4 基 4 基	土師質土器片, 陶器片 陶器片 内耳竈 燻管, 古銭(寛永通宝)		中世の井戸から内 耳竈が多数出土

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ区座標を原点とし、大作遺跡は $X = +33,680\text{m}$ 、 $Y = +50,720\text{m}$ の交点を、大畑遺跡は $X = +34,040\text{m}$ 、 $Y = +52,960\text{m}$ の交点をそれぞれ基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、位置を表示する場合は、大調査区の名称を冠し、「A1a区」、「B2a区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称概念図

- 2 遺構、遺物及び土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 井戸-SE 溝-SD

道路跡-SF 不明遺構-SX

遺物 土器・陶器-P 土製品-DP 石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本土器-TP

土層 擾乱-K

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

炉
 焼土
 粘土
 硬化面

土器
 石器・石製品
 土製品
 金属製品
 拓本記録土器

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺跡の全体図は400分の1、住居跡や土坑は60分の1に縮尺し掲載した。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にスケールで表示した。

(3) 「主軸方向」は長径方向あるいは炉を通る軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E、N-10°-W）。

なお、[] を付したものは推定である。

(4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高 F-つまみ径

G-つまみ高 H-頸部最小径 I-胴部最大径とし、単位はcmである。

なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測（P）番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。
- 6 遺構番号については、調査の過程において遺構の種類ごとに調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは欠番とした。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 大伴遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構と遺物	9
2 古墳時代の遺構と遺物	17
3 遺構外山土遺物	20
第4節 まとめ	22
第4章 大畑遺跡	24
第1節 遺跡の概要	24
第2節 基本層序	24
第3節 遺構と遺物	25
1 住居跡	25
2 方形竪穴遺構	76
3 地下式墳	80
4 井戸	81
5 土坑	94
6 墓塚	112
7 溝	115
8 道路跡	122
9 炭焼窯跡	124
10 ビット群	130
11 不明遺構	133
12 旧石器時代の遺物	138
13 遺物包含層	151
14 遺構外出土遺物	156
第4節 まとめ	160
附 章 自然科学分析	

插图目次

第 1 区	调查区称呼概念图		第 30 图	第 5 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	47
第 2 区	大作・大畑遺跡周辺遺跡分布图	6	第 31 图	第 5 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	48
第 3 区	人作遺跡基本土層图	9	第 32 图	第 6 号住居跡実測图	51
第 4 区	大作遺跡調査区設定图	10	第 33 图	第 6 号住居跡出土遺物実測图(1)	52
第 5 区	第 9 号土坑実測・山土遺物拓影图	13	第 34 图	第 6 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	53
第 6 区	第 1・2・3・4・7 A・B 8・10・11・12 号土坑実測图	14	第 35 图	第 6 号住居跡出土遺物実測图(3)	54
第 7 区	第 1 号夹石遺構実測图	15	第 36 图	第 7 号住居跡実測图	57
第 8 区	第 1 号住居跡実測图	17	第 37 图	第 7 号住居跡出土遺物実測・拓影图	58
第 9 区	第 1 号住居跡出土遺物実測图	18	第 38 图	第 10 号住居跡実測图	60
第 10 区	第 1 号竪穴遺構・出土遺物実測图	20	第 39 图	第 10 号住居跡出土遺物実測・拓影图	61
第 11 区	遺構外山土遺物実測・拓影图	21	第 40 图	第 11 号住居跡実測图	63
第 12 区	人畑遺跡調査区設定图	23	第 41 图	第 11 号住居跡出土遺物実測图(1)	64
第 13 区	大畑遺跡基本土層图	24	第 42 图	第 11 号住居跡出土遺物実測图(2)	65
第 14 区	第 9 号住居跡出土遺物拓影图	25	第 43 图	第 11 号住居跡出土遺物実測・拓影图(3)	66
第 15 区	第 9 号住居跡実測图	29	第 44 图	第 11 号住居跡出土遺物実測图(4)	67
第 16 区	第 1 号住居跡実測图	29	第 45 图	第 12 号住居跡実測图	71
第 17 区	第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)	29	第 46 图	第 12 号住居跡出土遺物実測图(1)	72
第 18 区	第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	30	第 47 图	第 12 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	73
第 19 区	第 2 号住居跡実測图	31	第 48 图	第 8 号住居跡・山土遺物実測图	75
第 20 区	第 2 号住居跡出土遺物実測・拓影图	32	第 49 图	第 1 号方形竪穴遺構実測图	76
第 21 区	第 3 号住居跡実測图	34	第 50 图	第 2 号方形竪穴遺構実測图	77
第 22 区	第 3 号住居跡出土遺物実測图(1)	37	第 51 图	第 3・4 号方形竪穴遺構実測图	79
第 23 区	第 3 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	38	第 52 图	第 3・4 号方形竪穴遺構出土遺物拓影图	79
第 24 区	第 3 号住居跡出土遺物実測图(3)	39	第 53 图	第 1・2 号地下式墓・出土遺物実測图	82
第 25 区	第 4 号住居跡実測图(1)	40	第 54 图	第 1・2 号井実測图	83
第 26 区	第 4 号住居跡実測图(2)	41	第 55 图	第 1 号井戶出土遺物実測图(1)	84
第 27 区	第 4 号住居跡出土遺物実測图(1)	43	第 56 图	第 1 号井戶出土遺物実測图(2)	85
第 28 区	第 4 号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	44			
第 29 区	第 5 号住居跡実測图	46			

第57图	第1号井戸出土物実測図(3)	86	第85图	第2号不明遺構実測図	136
第58图	第1号井戸出土物実測図(4)	87	第86图	第12号不明遺構出土物実測図	137
第59图	第1号井戸出土物実測図(5)	88	第87图	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(1)	139
第60图	第1号井戸出土物実測図(6)	89	第88图	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(2)	140
第61图	第1号井戸出土物実測図(7)	90	第89图	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(3)	141
第62图	第1号井戸出土物実測図(8)	91	第90图	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(4)	142
第63图	第1号井戸出土物実測図(9)	92	第91图	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(5)	143
第64图	第9A・B号土坑実測拓影図	94	第92图	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(6)	144
第65图	第11・19・20A・B・23・24・25・26・27 28A・B・29・30・31号土坑実測図	100	第93图	第1号石器集中地点平面図(1)	145~146
第66图	第43・44・65・66号土坑実測図	103	第94图	第1号石器集中地点平面図(2)	147~148
第67图	第54・55・56・58号土坑実測図	103	第95图	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(7)	149
第68图	第63・64・68・69・70・71号土坑実測図	106	第96图	第1号遺物包含層出土遺物拓影図	152
第69图	第94・95・96号土坑実測図	108	第97图	第2号遺物包含層出土遺物実測・ 拓影図(1)	153
第70图	第1・2・3・4号竪穴実測図	114	第98图	第2号遺物包含層出土遺物実測・ 拓影図(2)	154
第71图	第1・2・4号竪穴出土遺物実測・ 拓影図	115	第99图	遺構外出土遺物実測・拓影図	157
第72图	第1・2・5・7・9・10・11号竪 出土遺物実測・拓影図	116	第100图	遺構外出土遺物実測・拓影図	158
第73图	第1・2・3・4・5・6・7・8・9・10 11・12号溝土層断面実測図	117	第101图	人畑遺跡出土弥生時代土器片類・ 実測図	163
第74图	第1号造路跡実測図(1)	121	第102图	大畑遺跡住居跡内弥生時代住居跡 類型	164
第75图	第1号造路跡実測図(2)	122	付図1	人作遺跡遺構全体図	
第76图	第1号炭焼窯跡・出土遺物実測図	125	付図2	人畑遺跡遺構全体図	
第77图	第2号炭焼窯跡・出土遺物実測図	127			
第78图	第3号炭焼窯跡実測図	128			
第79图	第3号炭焼窯跡出土遺物実測図	129			
第80图	第4号炭焼窯跡実測図	129			
第81图	第1号ピット群実測図	131			
第82图	第2号ピット群実測図	132			
第83图	第1号不明遺構炉・2実測図	134			
第84图	第1号不明遺構実測図	135			

表 目 次

表1	大作・大畑遺跡周辺遺跡一覧表	7	表4	大畑遺跡土坑一覧表	109
表2	人作遺跡土坑一覧表	16	表5	大畑遺跡溝一覧表	120
表3	大畑遺跡住居跡一覧表	76			

写真図版目次

- P L 1 大作遺跡調査終了風景, 第1号土坑完掘, 第9号土坑完掘, 第1号夹石遺構完掘, 第1号住居跡完掘, 第1号住居跡遺物出土状況(1)・(2), 第1号住居跡・第1号竈穴遺構完掘
- P L 2 大畑遺跡遠景, 大畑遺跡調査終了風景, 第9号住居跡完掘, 第96号土坑完掘, 第1号住居跡完掘, 第1号住居跡遺物出土状況, 第2号住居跡遺物出土状況(1)・(2)
- P L 3 第3号住居跡完掘, 第3号住居跡遺物出土状況, 第4号住居跡完掘, 第4号住居跡遺物出土状況(1)・(2)・(3), 第5号住居跡完掘, 第5号住居跡遺物出土状況
- P L 4 第5号住居跡遺物出土状況, 第6号住居跡完掘, 第6号住居跡遺物出土状況(1)・(2)・(3), 第7号住居跡完掘, 第7号住居跡遺物出土状況(1)・(2)
- P L 5 第10号住居跡完掘, 第10号住居跡遺物出土状況, 第11号住居跡完掘, 第11号住居跡遺物出土状況, 第12号住居跡完掘, 第8号住居跡完掘, 第1号方形竈穴遺構完掘, 第2号方形竈穴遺構完掘
- P L 6 第3・4号方形竈穴遺構完掘, 第4号方形竈穴遺構完掘, 第1号地下式竈完掘, 第1号井戸完掘, 第9A・B号土坑完掘, 第1号井戸遺物出土状況, 第9号土坑馬骨出土状況, 第44号土坑完掘
- P L 7 第54・55号土坑完掘, 第1・2・3号基礎完掘, 第1号石器集中地点遺物出土状況, 第1号炭燒窯跡完掘, 第2号炭燒窯跡完掘, 第3号炭燒窯跡完掘, 第4号炭燒窯跡完掘
- P L 8 大作遺跡 第1号住居跡・第1号堅穴遺構・第9号土坑・遺構外出土遺物
- P L 9 第1・2号住居跡出土遺物
- P L 10 第2・3号住居跡出土遺物
- P L 11 第3号住居跡出土遺物
- P L 12 第3・4号住居跡出土遺物
- P L 13 第4・5号住居跡出土遺物
- P L 14 第5号住居跡出土遺物
- P L 15 第5・6号住居跡出土遺物
- P L 16 第6号住居跡出土遺物
- P L 17 第6・7・8号住居跡出土遺物
- P L 18 第6・7・10号住居跡出土遺物
- P L 19 第11号住居跡出土遺物(1)
- P L 20 第11号住居跡出土遺物(2)
- P L 21 第11・12号住居跡出土遺物
- P L 22 第12号住居跡, 第1号地下式竈, 第1号井戸出土遺物
- P L 23 第1号井戸出土遺物
- P L 24 第1号井戸出土遺物
- P L 25 第1・7・9・10・11号溝, 第1・2・3号炭燒窯跡, 第1・2号不明遺構出土遺物
- P L 26 第2号遺物包含層, 遺構外出土遺物
- P L 27 第1・3・5・6・7・8・11号住居跡, 第9号土坑, 遺構外出土遺物(主製品)
- P L 28 第1号石器集中地点出土遺物(1)
- P L 29 第1号石器集中地点出土遺物(2)
- P L 30 第1号石器集中地点出土遺物(3)
- P L 31 第1・3・4号住居跡出土遺物(石器)
- P L 32 第4・5・6・7・10・11号住居跡出土遺物(石器)
- P L 33 第11・12号住居跡, 第7・10号溝出土遺物
- P L 34 第2号遺物包含層, 遺構外出土遺物(石器)
- P L 35 第6・11号住居跡, 第1・2・4号竈跡, 第9号溝, 遺構外出土遺物(金屬製品)
- P L 36 第3・4号住居跡出土土器片
- P L 37 第6・9号住居跡出土土器片
- P L 38 第1・2号遺物包含層出土土器片
- P L 39 第2号遺物包含層出土土器片
- P L 40 第2号遺物包含層出土土器片
- P L 41 遺構外出土土器片
- P L 42 第1号井戸出土耳鉤集合

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県中央部と近隣都県を結ぶ主要幹線道路は、現在、国道6号線と常磐自動車である。建設省と日本道路公団は、近年の物流の増加や常陸那珂港開発に伴い、首都圏の均衡ある高速交通ネットワークを形成するため、北関東3県を結ぶ北関東自動車道の工事を進めている。茨城県は、県央地区において常陸那珂地区開発や高速交通体系の整備によって活性化する交流を活用し、北関東の発展を牽引する中核都市地域づくりを目指しており、その一翼を担う産業の高度化を図るため、高度化する物流ニーズに対応した流通拠点や研究開発生産拠地の形成を目指している。

工事に先立ち、平成6年2月10日、日本道路公団東京第一建設局は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は、平成7年5月23日より、野普・大戸地区の試掘調査を実施し、工事予定地内に大作遺跡、大畑遺跡が所在する旨を日本道路公団東京第一建設局に回答した。日本道路公団東京第一建設局は、平成7年12月27日、茨城県教育委員会にその取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は、日本道路公団東京第一建設局と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であることから、平成8年1月25日、日本道路公団東京第一建設局に対し、大作遺跡、大畑遺跡を記録保存とする旨の回答を行い、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

日本道路公団東京第一建設局と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成8年4月1日から同年12月28日にかけて、大作遺跡、大畑遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

大作遺跡の発掘調査は、平成8年4月1日から5月30日までの2か月、大畑遺跡の発掘調査は、平成8年6月1日から平成8年12月31日までの9か月にわたって実施された。以下、人作遺跡、大畑遺跡の調査の経過について月ごとに略述する。

大作遺跡

- 4月 発掘調査開始にあたっての諸準備を行った。5日に現地踏査を行った。15日から補助員を雇用し、調査機材の搬入、大作遺跡の試掘調査を開始した。その結果、調査区の南部は表土が20cm前後であったため、人力による表土除去を実施することとした。人力による表土除去範囲をA区、重機による表土除去範囲をB区とした。24日からA区の遺構確認作業を開始し、住居跡と思われる遺構が2軒、土坑が12基確認された。26日には、旧石器試掘調査を開始した。
- 5月 7日から、重機による表土除去作業を開始した。8日には、B区の遺構確認作業を開始した。10日から遺構調査を開始した。14日に基準杭打ちを行い、実測作業を進めた。22日から事務所移転準備に取りかかり、23日に大畑遺跡調査に関して道路公団の担当者と打ち合わせを行った。27日、第1号住居跡の実測作業が終わり、遺構の埋め戻し作業を行って人作遺跡の調査を終了した。

大畑遺跡

- 6月 1日から、大畑遺跡の調査準備に取りかかった。5日、調査区内の伐開作業を始める。7日から試

掘調査を開始した。調査区を3区に分け河岸段丘の下部部を1区、上部部を2区、上段と下段間の傾斜部を3区とした。トレンチ試掘により、2区から住居跡7軒及び土坑数基が確認された。

- 7 月 1日から、重機による表土除去作業を開始した。1区の遺構確認作業の結果、住居跡2軒、方形の土坑数基、井戸2基の他、遺物包含層2か所が確認された。18日には、1区の遺構確認状況の写真撮影を行った。1区の第1号遺物包含層の遺構調査を開始した。
- 8 月 2日から、1区の遺構調査を開始した。6日に、基準杭打ちを行った。8日には、第9号土坑から馬の頭骨が出土した。第2号遺物包含層のトレンチ調査を開始した。第1号井戸から大量の遺物が出土し、写真撮影及び遺物平面図の実測を行った。1区南部の第2号遺物包含層から弥生時代の住居跡1軒が検出された。
- 9 月 1区の調査を進める。11日、1号炭焼窯の確認状況の写真撮影を行い、調査にはいった。17日には、第8号溝の平面実測を行い、1区北東部分の調査を終了した。25日には、1区の航空写真撮影を実施し、26日に1区の遺構完形状況の写真撮影を行った。
- 10 月 2日から、遺構確認により弥生時代の住居跡7軒、土坑数基、溝4条、炭焼窯3基を確認し、2区の遺構調査を開始した。15日には、調査区北東隅の第2号住居跡の調査が終わり、完掘状況写真を撮影した。18日には、3区の斜面部のトレンチ試掘調査を開始した。28日には、第6号住居跡の実測が終わり、2区の遺構調査が終了した。
- 11 月 3区のトレンチ試掘により、住居跡1軒、土坑数基、道路跡2条が確認された。6日から、3区の斜面部にある平坦部分の調査を行った。11日には、第1号道路跡の上層セクション実測を行った。13日から、第1号道路跡の範囲を確認するため、さらにトレンチを設定し、掘り込みを開始した。トレンチより確認された第12号住居跡の人力表土除去を行い、26日から遺構調査を開始した。
- 12 月 9日から、第2～4号炭焼窯の調査を開始した。14日には、これまでの調査の成果をもとに現地説明会を実施し、多くの見学者が来訪した。16日から、旧石器試掘調査と補足調査を開始した。25日、航空写真撮影を行い、大畑遺跡の遺構調査を終了した。27日には、安全対策を含めた撤収作業を完了し、現場事務所を閉鎖して全ての現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大作遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡字大作818番地ほかに、人知遺跡は、東茨城郡茨城町大字大戸字六戸道517番地ほかに、それぞれ所在している。

茨城町は、茨城県の中央部よりやや東に位置し、北部は水戸市に、東部は酒沼を隔てて東茨城郡大洗町、鹿島郡旭村に、南部は東茨城郡美野里町、小川町、鹿島郡神出町に、西部は東茨城郡内原町、西茨城郡友部町、同岩州町に隣接している。町域は、東西約17km、南北約14km、面積約121㎢で、人口は36,021人、世帯数は10,088戸（平成9年3月現在）である。町の中央を南北に国道6号が通じ、それと並行するように常磐自動車道が西に隣接する友部町を通っている。町の北部では東西に通じる北関東自動車道の建設が進められている。

茨城町の地形は、町のほぼ中央部を東流する酒沼川と、その東に展開する酒沼（面積約9.35㎢）によって、台地を南北に二分されている。北部の台地は、標高25～30mの東茨城北部台地の先端部を形成し、北西から酒沼前川を含む大小の支谷が酒沼に南面して開口している。南部に発達する台地は、東から大谷川、寛政川が酒沼に流入し、その間に大小無数の支谷が台地深くまで侵入し、北部台地に比べて起伏も多く一層複雑な地勢を成している。これらの河川流域の沖積低地は水田として、台地は畑地・樹園地として利用されている。

町の基幹産業である農業は、稲作に施設野菜・果樹栽培・養豚・酪農などを取り入れた複合経営が行われている。県東水戸市に接する地の利から、県立の工業・食品等の各試験場や警察・消防などの各学校施設が設置され、県央の中核田園都市としての役割を果たしている。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代、第三紀の地層で、岩質は泥岩で水戸層と呼ばれている。水戸層の上に第四紀の地層が不整合に堆積している。粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の宮城粘土層、関東ローム層の順に堆積しており、これらの地層はいずれもほぼ水平層である。

大作遺跡は、北側を流れる酒沼前川と南側を流れる酒沼川とに挟まれた馬の背状の河岸段丘上（標高約27m）にあり、酒沼川左岸の小支谷西側に面した台地上に位置し、現況は畑地・山林である。大畑遺跡は、茨城町の北西部の大戸地区にあり、大作遺跡の西南西2.5kmほど離れた酒沼前川右岸の2段の河岸段丘上（標高22～29m）に位置し、現況は畑地・山林である。

参考文献

- ・蜂須紀夫 『茨城県 地学ガイド』 1986年11月
- ・角川書店 『日本地名大辞典 8 茨城県』 1983年3月
- ・茨城町史編さん委員会 『茨城町権現峯遺跡』 1988年3月
- ・茨城町教育委員会 『小橋北山壇輪製作遺跡』 1989年2月
- ・茨城町史編さん委員会 『茨城町上ノ山古墳』 1994年3月
- ・茨城町史編さん委員会 『茨城町史 通史編』 1995年2月
- ・茨城町史編さん委員会 『茨城町史 地誌編』 1995年2月

第2節 歴史的環境

茨城町には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。当時周辺は、瀬沼をはじめ、瀬沼川、瀬沼前川など水運に恵まれ、古代から人々が生活を営む場としては絶好の舞台となってきた。ここでは、大作・大畑遺跡周辺の主な遺跡について時代を辿って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、東山遺跡〈7〉と向地等遺跡で、打製石斧や槍先形尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は、町内全域に113か所がみられる。早期の遺跡は、沈線文土器（三戸式、田戸式）が出土している中落遺跡がある。前期になると遺跡数が増加する。瀬沼前川流域には、大戸下郷遺跡〈5〉、宮後遺跡、シッペイ沢遺跡、東郷遺跡〈6〉、奥山遺跡が、神谷遺跡、神谷東遺跡、西台遺跡が、瀬沼周辺は最も多く、権現峯遺跡、前野遺跡、金子立遺跡、金子立西遺跡、小川遺跡など10数遺跡が存在している。瀬沼川流域には、今回調査した人作遺跡をはじめ、奥谷遺跡〈18〉、赤坂南坪遺跡〈20〉、宮上山遺跡〈19〉、小山台遺跡〈26〉、台畑遺跡、権現堂遺跡、離川遺跡が存在している。南小羽遺跡は人作遺跡から西西に約1kmほど離れたところに位置している。また、縄文海進にともなって権現峯遺跡、シッペイ沢遺跡、越安貝塚〈13〉など8か所に貝塚が形成されている。南小羽遺跡の貝塚（縄文時代前期）は、瀬沼川流域では最も奥部に位置している。中期になると、大古崎遺跡や大道西遺跡など前期よりさらに遺跡数が増し、町内全域にみられるようになる。後期に入ると遺跡数は減少しはじめる。この頃小堤貝塚〈17〉が形成される。晚期になるとさらに遺跡数は減少し、下土師遺跡〈24〉、小堤貝塚、神谷遺跡など10か所を数えるほどである。晩期の遺跡はほとんどが後期から続く遺跡である。

弥生時代の遺跡は、現在41か所確認されており、中期後半半ばのものと思われる土器片が神谷東遺跡、柴崎遺跡古墳（中石岡）、西台遺跡などで採集されている。後期前半の遺物としては、東中根式並行の上器片が大畑遺跡から採集されている。後期後半には、標式土器となった長円式土器が、長岡遺跡〈9〉と昭和61年度に当教育財団が発掘調査した奥谷遺跡、小鶴遺跡〈11〉の3遺跡から出土している。今回調査した大畑遺跡からは、これらの時期に続く十王台期（後期後半）の集落が確認され、他に平成7年度に調査された矢倉遺跡〈3〉、大戸下郷遺跡、台畑遺跡などからも、十王台式上器片が出土している。

古墳時代になると遺跡数が増加する。奥谷遺跡からは、古墳時代前期の豪族居館跡の溝や住居跡が確認され、瀬沼周辺の神谷遺跡、神谷東遺跡、大塚遺跡、西行遺跡、権現峯遺跡などからも、前期の上器器や住居跡が確認されている。昭和60年に周濠の調査を行い、茨城町地方では最も古い時期に位置づけられた前方後方墳（4世紀末から5世紀初頭）である芋塚古墳をはじめ、中期から後期にかけての古墳が61基ほど確認されている。神谷古墳群からは、2基の竪立式古墳が確認され、茨城町で唯一の前方後円墳である上ノ止古墳からは、南へ4kmほど離れた位置にある八幡北山墳輪製作遺跡で造られたものと思われる埴輪（6世紀後半頃）が出土している。

律令制下の奈良・平安時代の茨城町は、那賀郡八部郷、茨城郡島田・安保・白川郷、鹿島郡宮前郷に所属していた。この時期の遺跡は、町内全域に確認され、今回発掘調査を行った大作・大畑遺跡を含め98遺跡を数える。奥谷遺跡からは、百数点の墨書土器のほか円面硯や刀子が出土している。特に、墨書の「曹司」は、宮中・官衛などの庁舎・宿直所・局・部所などの意味があり、当時の奥谷遺跡が官衙的あるいは公共的な施設を含む集落であったことを示している。西台遺跡〈28〉からは、「土師神主」と書かれた墨書土器が、大塚遺跡からは、墨書土器や円面硯が、宮後遺跡からは、円面硯や蔵骨器がそれぞれ出土している。

中世の遺跡は、主に城館跡である。すでに消滅したものであっても、その数は12か所に及んでいる。

現存する町内の城館の中では小幡城跡が最大規模であるが、築城者については現時点では不明である。他に、宮ヶ崎城跡、海老沢館跡、鳥羽山城跡、飯沼城跡などが所在している。奥谷遺跡からは、地下式墳、土坑、井戸、堀が確認され、土師質土器や陶器が出土している。前田地区の万東山からは、13世紀前半と思われる「青白磁蓮牡丹文梅瓶」が出土している。

近世になると、町の中心部を南北に走る水戸街道に沿って、長岡、小幡は宿駅として発展した。海老沢、紙掛は水上交通の要所としても栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩など奥州藩藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継として極めて重要な役割を果たしていた。

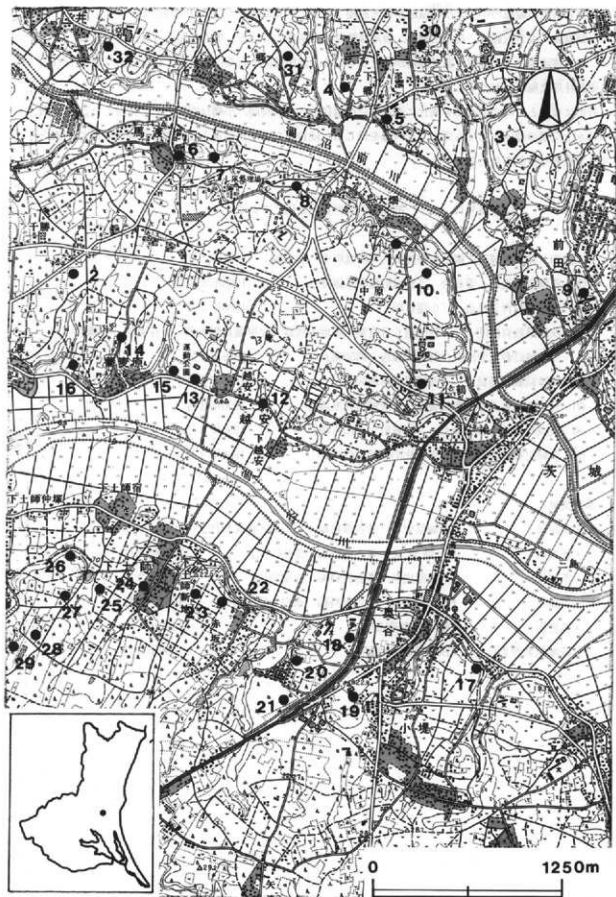
※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第2図の該当番号と同じである。

注

- | | | | | |
|-----|-----|----|---|---------|
| (1) | (6) | 00 | 茨城町史編さん委員会 「茨城町史 通史編」 | 1996年2月 |
| (2) | | | 茨城町史編さん委員会 「茨城町権現峯遺跡」 | 1988年3月 |
| (3) | | | 茨城町教育委員会 「小堤日塚」 | 1986年3月 |
| (4) | | | 茨城県教育財団 「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡 小幡遺跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告 第50集』 | 1989年3月 |
| (5) | | | 茨城県教育委員会 「茨城県遺跡地図」 | 1990年3月 |
| (7) | | | 茨城町大峯遺跡発掘調査会 「茨城町大峯遺跡」 | 1990年3月 |
| (8) | | | 茨城町史編さん委員会 「茨城町上ノ山古墳」 | 1994年3月 |
| (9) | | | 茨城町教育委員会 「小幡北山埴輪製作遺跡」 | 1989年2月 |

参考文献

- | | | |
|-----------|------------------------|---------|
| ・茨城県 | 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 | 1979年3月 |
| ・茨城県 | 『茨城県史 考古資料編 弥生時代』 | 1991年3月 |
| ・茨城県 | 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 | 1991年3月 |
| ・茨城県 | 『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 | 1995年3月 |
| ・尚古房 | 『新編常陸国誌』 | 1997年 |
| ・茨城県教育委員会 | 『茨城県遺跡地図』 | 1990年3月 |



第2図 大坂・大畑遺跡周辺遺跡分布図

表1 大作・大畑遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	県 遺 跡 番 号	時 代					番 号	遺 跡 名	県 遺 跡 番 号	時 代				
			旧	縄	弥	古	余				中	旧	縄	弥	古
			文	生	墳	平	近				文	生	墳	平	近
①	大畑遺跡	4295	○	○	○	○	○	17	小堤只塚	4284	○	○	○		
②	大作遺跡		○		○			18	奥谷遺跡	4338	○	○	○	○	○
3	欠倉遺跡	4324	○	○	○			19	富士山遺跡	193	○		○	○	
4	羽黒山古墳群	4314				○		20	赤坂南坪遺跡	192	○		○		
5	大戸下郷遺跡	4294	○	○	○			21	坊前古墳	4348				○	
6	東畑遺跡	4306	○	○	○	○		22	高山古墳	4335				○	
7	東山遺跡	4307	○		○	○		23	下上師東遺跡	4337	○		○		
8	上の前遺跡	4333	○	○	○	○		24	下上師遺跡	191	○		○	○	
9	長岡遺跡	227		○	○			25	富士山古墳	174				○	
10	大畑古墳	4343			○			26	小山台遺跡	4336	○			○	○
11	小鶴遺跡	4349	○					27	小山台古墳群	175				○	
12	中畑遺跡	194	○		○			28	面山遺跡	201	○		○	○	
13	越安只塚	4283	○					29	高山遺跡	4335	○		○	○	
14	宮上遺跡	4334	○	○	○			30	大戸神宮寺前遺跡	4323	○				
15	大塚古墳群	178			○			31	稲荷宮遺跡	4309			○	○	○
16	西山古墳	4299			○			32	清峯古墳群	4345			○		

第3章 大作遺跡

第1節 遺跡の概要

大作遺跡は、瀬沼前川と瀬沼川とに挟まれた馬の背状の河岸段丘上（標高約27m）にあり、瀬沼川左岸の小支谷西側に面した台地上に立地する。旧石器・縄文時代には狩猟・採集活動が行われ、古墳時代には小集落が形成された、旧石器時代・縄文時代・古墳時代の複合遺跡である。今回の調査区は、南北約44m、東西約58m、面積 2,380㎡、現況は畑地・山林である。

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代の炉穴7基、集石遺構1基、古墳時代の竪穴住居跡1軒、竪穴遺構1基である。

出土遺物は、縄文土器片1点、及び石鏃1点。古墳時代前期の土師器1点、球状土鏃5点等が出土している。旧石器時代の遺物は遺構外遺物として尖頭器1点が出土している。

第2節 基本層序

大作遺跡の南西側平坦部（B1a区）にテストピットを設け、深さ約2mまで掘り下げて、土層の堆積状況を確認した。

第1層は、10～25cm程の厚さで、褐色をしたソフトローム層。

第2層は、20～40cm程の厚さで、褐色をしたソフトローム層。スコリア粒子を微量含む。

第3層は、30cm前後の厚さで、褐色をしたハードローム層。スコリア粒子を中量含む。

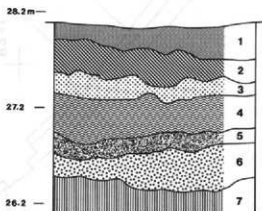
第4層は、40～60cm程の厚さで、褐色をしたハードローム層。スコリア粒子・鹿沼粒子を中量含む。

第5層は、15cm前後の厚さの鹿沼漸移層。スコリア粒子を少量、鹿沼粒子を多量に含む。

第6層は、20～50cm程の厚さで、明黄褐色をした鹿沼層。

第7層は、黄褐色をしたハードローム層。スコリア粒子を少量、鹿沼粒子を多量に含む。

竪穴住居跡等の遺構は、第3層上面で確認した。

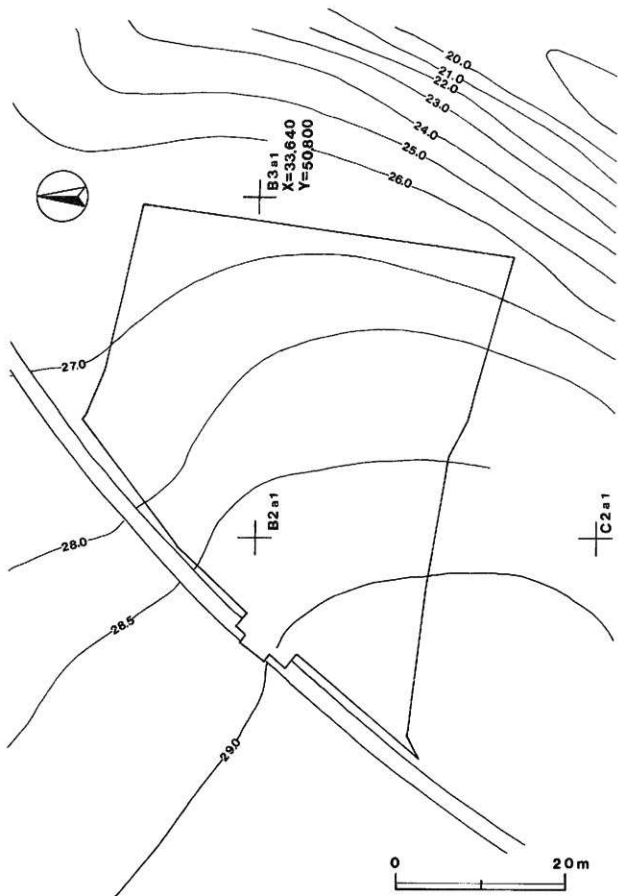


第3図 大作遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当遺跡からは、土坑が12基検出されている。ここでは縄文時代の炉穴と推定できるものや、特徴的なものについて記述し、他は一覧表に掲載する。



第4図 大作遺跡調査区設定図

第1号土坑（第6図）

位置 調査区西側，A1a区。

規模と平面形 長軸約1.74m，短軸約1.66mの不定形である。

主軸方向 N-49°-E

壁面 壁高は約28cmで，外傾して立ち上がる。

底面 皿状を呈する。

覆土 3層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 樹 色 ローム粒子少量，暗褐色1粒下層量
- 2 樹 色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 樹 色 ローム粒子多量

所見 本跡は，出土遺物はないが，底面にロームが焼けて硬化した面が認められ，遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや顕微鏡から，縄文時代の炉穴と思われる。

第7-A号土坑（第6図）

位置 調査区北東隅，A2a区。

重複関係 本跡は，第7-B号土坑と重複している。第7-B号土坑が本跡を掘り込んでおり，本跡が古い。

規模と平面形 内部に攪乱された部分があり，東部を第7-B号土坑が掘り込んでいるため，正確な規模と平面形は不明であるが，長径約1.8m，短径約1.53mの楕円形であると思われる。

主軸方向 N-74°-W

壁面 壁高は約29cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状を呈する。

覆土 3層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 樹 色 ローム粒の中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 2 樹 色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，炭化粒多量，炭をかけたロームを含む
- 3 樹 色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック少量，炭化粒子・樹土粒子多量

所見 本跡は，出土遺物はないが，底面から焼けて硬化したロームブロックが検出され，遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや顕微鏡から，縄文時代の炉穴と思われる。

第7-B号土坑（第6図）

位置 調査区北東隅，A2a区。

重複関係 本跡は，第7-A号土坑と重複している。本跡が第7-A号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 北部と南部が攪乱されているため，正確な規模と平面形は不明であるが，長径約2.68m，短径約1.62mの楕円形と思われる。

主軸方向 N-74°-W

壁面 壁高は約28cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状を呈する。

覆土 6層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック・焼上小ブロック・炭化物少量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼上粒子多量、焼上小ブロック中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量、焼上粒子・炭化粒子微量
- 8 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 明褐色 ローム大・ローム中ブロック・ローム小ブロック・粒多量、焼上粒子微量

所見 本跡は、出土遺物はないが、底面から焼けて硬化したロームブロックが検出され、遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや類例から、縄文時代の炉穴と思われる。焼土や火を受けた痕跡が少ないため、短期間の使用と考えられる。

第8号土坑（第6図）

位置 調査区東側、B2a区。

規模と平面形 長径約2.25m、短径約1.59mの楕円形である。

主軸方向 N-65°-E

壁面 壁高は約25cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦で、中央部に2か所の木の根痕と思われるビット状のくぼみがある。

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒中量、ローム中ブロック少量

所見 本跡は、出土遺物はないが、底面にロームが焼けて硬化した面が認められ、遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや類例から、縄文時代の炉穴と思われる。

第9号土坑（第5図）

位置 調査区東側、B2a区。

規模と平面形 長径約2.06m、短径約1.66mの楕円形である。

主軸方向 N-19°-W

壁面 壁高は約23cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦で、北部に赤色硬化面があり、その周囲に焼けて硬化したロームが認められた。

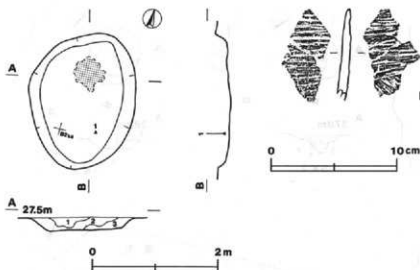
覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック微量

出土遺物 南東部の覆土中層から、第5図1の縄文時代早期末葉の条痕文系土器片1点が出土している。

所見 本跡は、覆土の状況、遺構の形状、類例等から縄文時代早期の炉穴と思われる。



第5図 第9号土坑実測・出土遺物拓影図

第10号土坑 (第6図)

位置 調査区北東側, A2a区。

規模と平面形 北部が調査区外であるため, 正確な規模と平面形は不明であるが, 長径約 [2.04] m, 短径約 1.73mの楕円形であると思われる。

主軸方向 N-4°-W

壁面 壁高は約23cmで, 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦で, 南北部に皿状のくぼみがある。

覆土 6層からなり, 自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化材微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量

所見 本跡は, 形状や覆土の状況が第7号土坑と近似する。出土遺物はないが, 覆土中に焼土, 炭化物を含むことや類例などから, 縄文時代の炉穴と思われる。

第11号土坑 (第6図)

位置 調査区東側, A2a区。

規模と平面形 長径約2.25m, 短径約1.15mの楕円形であると思われる。

主軸方向 N-4°-W

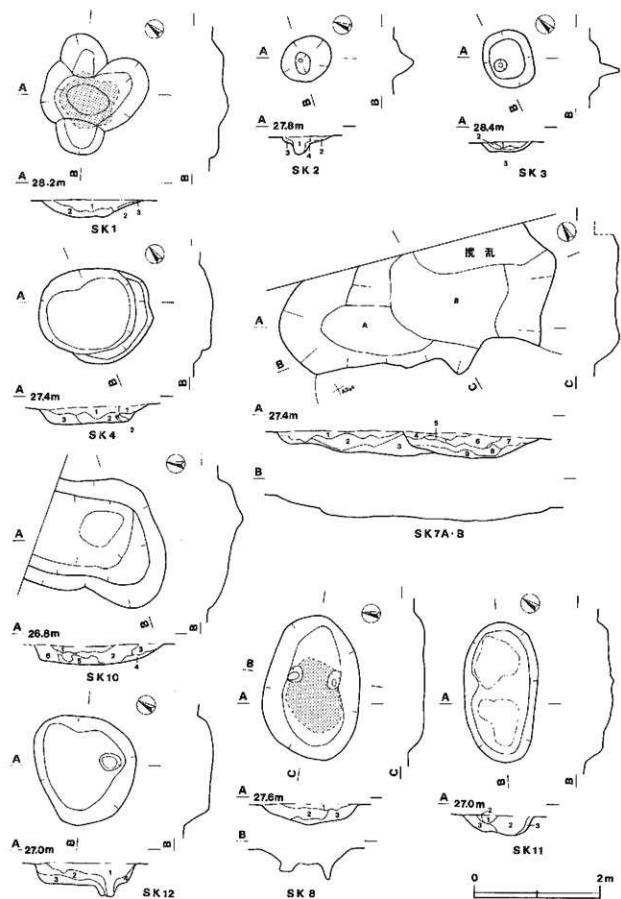
壁面 壁高は約36cmで, 外傾して立ち上がる。

底面 凹凸があり, 北東部と南西部に硬化面がある。

覆土 3層からなり, 自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭沼ベニス粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量



第6图 第1·2·3·4·7A·B·8·10·11·12号土坑实测图

所見 本跡は、出土遺物はないが、底面からロームが焼けて硬化した面が認められ、遺構の形状や覆土の状況が他の炉穴に類似していることや類例などから、縄文時代の炉穴と思われる。

第2号土坑土層解説 (第6図)

- 1 褐色 ローム粒子少量, 暗褐色土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム小ブロック・粒子少量

第3号土坑土層解説 (第6図)

- 1 褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 2 褐色 ローム中ブロック微量, ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子多量

第4号土坑土層解説 (第6図)

- 1 褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量

第1号集石遺構 (第7図)

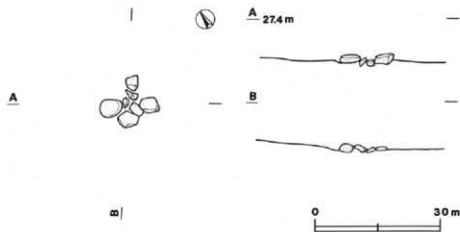
位置 調査区東側 B2a区。

規模と平面 南北方向13cm, 東西方向15cmの範囲に焼けた礫や礫片が並んだ状態で確認された。

確認土層 ソフトローム上面の遺構確認面で確認した。

遺物 集石の間から縄文土器片1点が出土している。細片であることから器種等は不明であるが、胎土に繊維を多量に含むことから、縄文時代前期の土器と思われる。長さ4~5cm, 幅3~4cm, 厚さ約2cm程の礫が2点, 礫片が4点出土し, いずれも焼けて変色している。

所見 周囲の表土中から, 焼けた礫が多数出土していることや, 出土遺物から, 縄文時代前期の遺構と思われる。



第7図 第1号集石遺構実測図

表2 大作遺跡土坑一覽表

土坑 番号	位置	方位方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	A1s	N-49°-E	不整形	1.74×1.66	28	外傾	皿状	自然		竈穴
2	A2a	N-37°-E	橢円形	0.83×0.69	32	外傾	皿状	人為		
3	B1s	N-32°-E	橢円形	0.91×0.79	48	外傾	皿状	自然		
4	A2t	N-45°-W	不整形	1.80×1.52	26	緩傾	皿状	人為		
5	A2a		円形	0.86×0.8	24	外傾	凹凸	自然		
6	A2a		円形	0.74×0.66	43	外傾	凹凸	自然		
7-A	A2s	N-74°-W	不整形	(1.80)×(1.63)	29	緩傾	皿状	自然		竈穴
7-B	A2s	N-74°-W	不整形	(2.68)×(1.62)	28	緩傾	皿状	自然		竈穴
8	B2s	N-66°-E	橢円形	2.25×1.59	25	緩傾	平坦	自然		竈穴
9	B2a	N-9°-W	楕円形	2.96×1.66	23	緩傾	平坦	自然	縄文土陶片 (14種集積文)	竈穴
10	A2g	N-4°-W	橢円形	[2.04]×1.73	46	緩傾	平坦	自然		竈穴
11	A2a	N-35°-W	橢円形	2.25×1.15	36	外傾	凹凸	自然		竈穴
12	A2g	N-42°-E	橢円形	1.79×1.56	36	外傾	平坦	自然		

2 古墳時代の遺構と遺物

当遺跡からは、住居跡1軒、竪穴遺構1基が検出された。いずれも調査区の西側に位置している。以下、検出した遺構について記載する。

第1号住居跡（第8図）

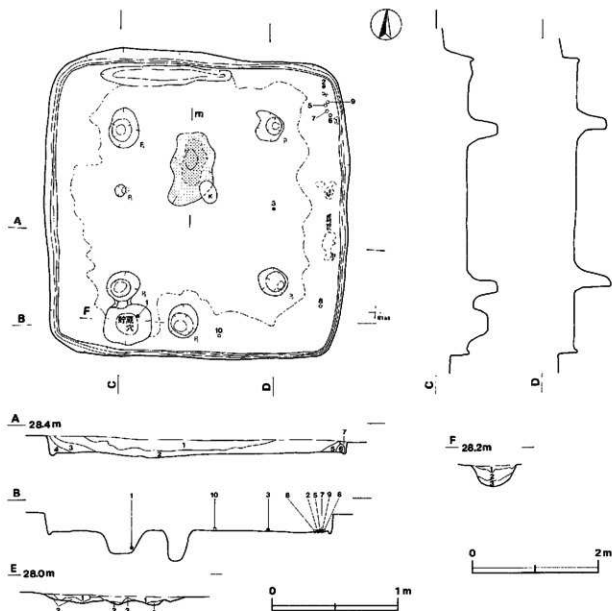
位置 調査区西部，B1a区。

規模と平面形 長軸4.85m，短軸7.82mの隅丸方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は22～42cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが，小さな凹凸があり，中央部分は軟弱なロームで周囲は粘床で硬い。出入りロビットの周囲がやや高い。



第8図 第1号住居跡実測図

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁は長径55cm, 短径45cmの不整楕円形, P₂は長径50cm, 短径45cmの楕円形, P₃は長径55cm, 短径47cmの楕円形, P₄は長径62cm, 短径47cmの楕円形である。P₁~P₄は、深さが50cm前後の主柱穴と思われる。P₅は径50cm程の円形で、深さ50cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P₆は、貼床の下で確認され性格は不明である。

貯蔵穴 1か所。長軸75cm, 短軸65cmの隅丸長方形で、深さ50cm。P₂の南側に設置され、底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土・炭化粒子中量, ローム粒子少量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土・炭化粒子少量, ローム大ブロック微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量

炉 中央部から北寄りにあり,長径118cm, 短径60cmの不整楕円形で、床面を5~10cm程掘り窪めている。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 3 赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量

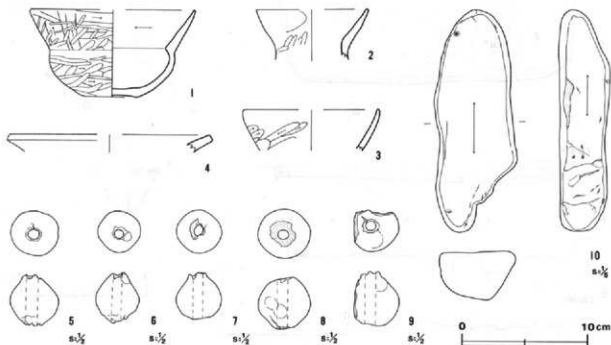
覆土 7層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子微量

遺物 図版に掲げた遺物の他に土師器壺片を中心に数片出土しているが、いずれも細片である。第9図1土師器埴は、貯蔵穴の覆土下層から4辺に分かれて、つぶれた状態で出土している。また、第9図5~7・9の球状土師が北東隅の床面直上から、8が南東の壁際の床面直上から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形状や出土遺物から古墳時代前期と思われる。



第9図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

区画番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色変・肌感	備考
第9区 1	土師器 土師釜	A 13.8	体部及び口縁部一帯欠損。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部・口縁部外面へう磨き。口縁部内面横ナデ。	灰石・砂粒に多い普通	P1 P L 8 70% 貯蔵穴底面
		B 5.6				
		C 3.5				
2	土師器 土師釜	A [9.0]	輪郭から口縁部ナ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面へう磨き。	灰石・石英・雲母に多い普通	P 2 P L 8 5% 北東部底面直上
		B (4.1)				
3	土師器 土師釜	A、10.8、 B(5.3)	口縁部ナ。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部は内側ぎみに立ち上がる。	口縁部外面へう磨き。	灰石・石英・雲母に多い普通	P 3 P L 8 5% 東部底面直上
		A [16.4] B (1.4)				
4	土師器 土師釜	A [16.4] B (1.4)	口縁部ナ。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面へう磨き。	灰石・石英・シリカ・雲母に多い普通	P 5 P L 8 3% 底土中

区画番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	残存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	孔径				
第9区 5	球状土師	2.7	2.5	0.6	12.6	100	北東部壁際床面直上	D P 1 P L 8
6	球状土師	2.7	2.3	0.5	9.4	100	北東部壁際床面直上	D P 2 P L 8
7	球状土師	2.5	2.4	0.5	11.8	100	北東部壁際床面直上	D P 3 P L 8
8	球状土師	2.8	2.8	0.6	19.2	100	西東部壁際床面直上	D P 4 P L 8
9	球状土師	2.9	(2.4)	0.6	(13.4)	60	北東部壁際床面直上	D P 5 P L 8

区画番号	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	残存率 (%)	胎土	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最小厚					
第9区 10	磁石	29.8	10.9	0.5	2,928.8	100	灰灰質	南東部壁際床面直上	G、P L 8

第1号竪穴遺構 (第10図)

位置 調査区西部、B2a区。

規模と平面形 長軸3.98m、短軸3.80mの方形である。

主軸方向 N-87°-W

壁 壁高は6～15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、軟弱なロームである。

覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 暗褐色 ローム粒子中層、炭化材少量
- 褐色 ローム小ブロック中層、ローム粒少量
- 暗褐色 ローム中ブロック少量、ローム小ブロック・ローム粒子多量

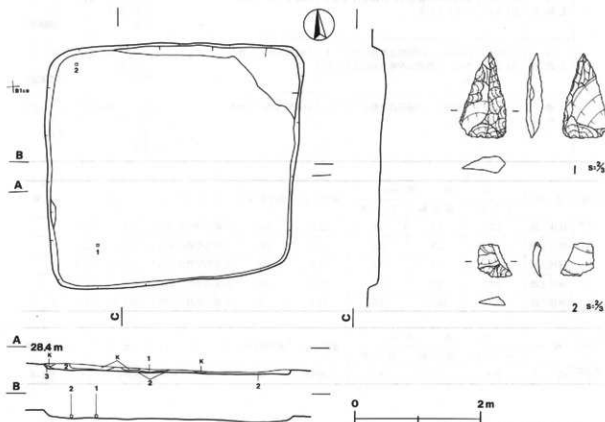
遺物 土師器破片を中心に数片出土しているが、いずれも細片である。南西部の覆土上層から第10区1の石鏃、

2の剥片が出土しているが、流れ込みと考えられる。

所見 本跡は、遺構の形状や主軸方向が第1号住居跡と同じことから、第1号住居跡に伴う施設であると考えられるが、時期・性格は不明である。

第1号竪穴遺構出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第10図 1	石器	3.4	1.9	0.7	3.4	100	チャート	南西部覆土中	Q2 PL8
2	刮片	1.3	1.4	0.3	0.4	100	チャート	北西部覆土中	Q3 PL8



第10図 第1号竪穴遺構・出土遺物実測図

3 遺構外出土遺物

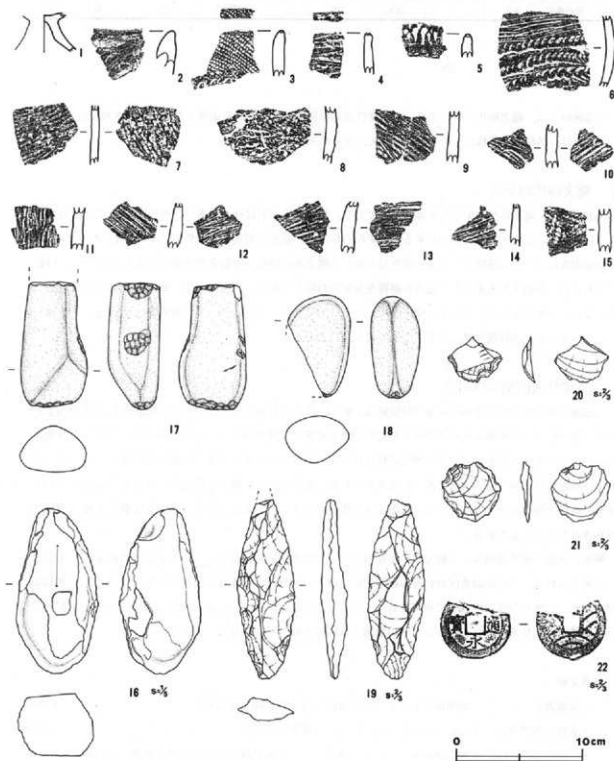
当遺跡の遺構外からは、おもに縄文時代の遺物が出土している。ここでは主な遺物を記載する。(第11図)

第11図2～15は、当遺跡から出土した遺構外出土遺物の拓影図で、いずれも縄文土器片である。2～5は口縁部片で、3には単節縄文RLが施されている。6～15は胴部片で、7・9～14は平行沈線が施されている。6には横方向の平行沈線の下に、半截竹管による刻みが施されている。15には単節縄文LRが施されている。

大作遺跡遺構外出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	器台 土師器	B(3.2)	胴部片。胴部は「ハ」の字状に開く。	胴部外面へラ磨き。	長石・パミス・雲母 におい煙 普通	P9 10% 覆土下層

編號	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第11圖 16	礫石	22.0	10.8	8.4	(2,782.2)	80	凝灰岩	A2 _α 区	Q 4
17	礫石	10.0	5.5	4.2	(317.3)	—	凝灰岩	表探	Q 5
18	礫石	8.0	5.0	4.0	(176.2)	—	凝灰岩	A2 _α 区	Q 6
19	尖頭器	(7.2)	2.3	1.0	(14.1)	90	安山岩	表探	Q 7



第11圖 遺構外出土遺物実測・拓影圖

調査番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第1190号	煎片	1.8	2.1	0.5	1.1	100	チャート	雲根	Q8 F1.8
	煎片	2.4	2.4	0.5	2.6	100	チャート	132a区	Q9 P1.8

調査番号	器種	計測値			現存率 (%)	紀年		出土地点	備考
		径 (cm)	厚さ (mm)	深さ (g)		時代	層		
第1190号	煎穴遺構	2.8	-	(2.9)	60	江戸	1867年	表炎	M1 P1.8

第4節 まとめ

当遺跡からは、縄文時代のか穴7基、古墳時代前期の住居跡1軒、竈穴遺構1基等の遺構が検出されている。ここでは、各時代の遺構について説明を加え、まとめたい。

1 縄文時代のか穴

当遺跡では、縄文時代のか穴を7基検出している。炉穴の平面形は様々であり、楕円形が主で、そのほかに花びらの形のような不定形のものもある。いずれのか穴も、底面の赤色硬化面や熱により硬化したロームブロックが確認されている。遺物としては、第9号上坑から縄文前期後葉の条紋文系土器片が出土している。口縁部片であるが、条紋文が表裏ともに施され臍部を少量含む胎土である。炉穴の他に、矢石遺構が1か所確認されているが、上面が削平されている。礫・礫片が7点と少量であったが、周辺から熱を受けたと思われる裂が出土しているため、調理場遺構になる可能性も考えられる。

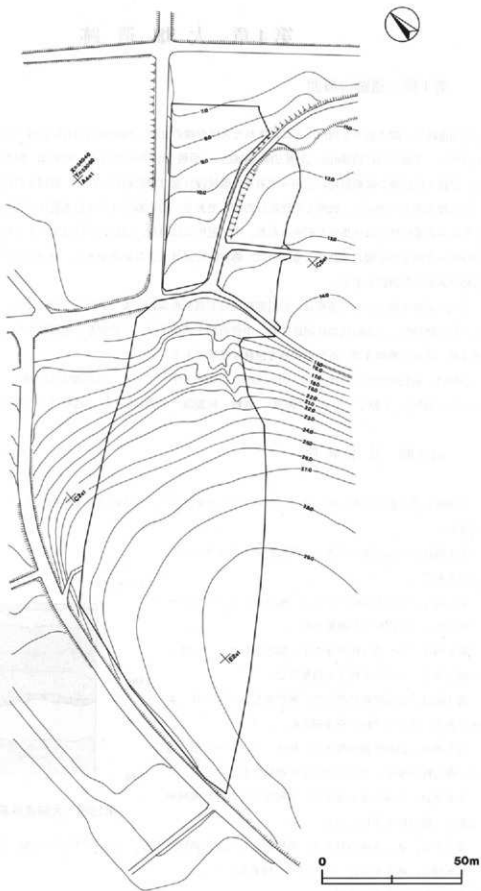
2 古墳時代前期の住居跡

当遺跡で検出された古墳時代前期の竈穴住居跡は1軒で、それに付随すると思われる竈穴遺構が1基検出されている。住居跡は、中央部よりやや北西よりに炉をもち壁溝がほぼ全周している。貯蔵穴は、土柱穴の外側、出入り口ヒットよりに位置している。竈穴遺構は柱穴・炉が検出できず、表面でも硬化面が認められなかったため、住居跡に伴う何らかの施設であったと考えられる。遺物は、住居跡の貯蔵穴から土が1点出土している。また、漆状土粒が5点出土している。床面より炭化材が出土していることから、住居を放棄した後に意図的に焼却されたものと思われる。

竈穴住居跡と竈穴遺構は、主軸方向や縦横の点から見て同時期に存在し、それぞれの機能を持っていたものと考えられる。今回の調査区が台地の縁辺部に位置し、沼沼川の小支谷に面していることから、自然環境に恵まれたこの区が居住空間として利用されたものと考えられる。また、南西に約1km離れたところに同時期の南小瀬遺跡の大集落があることから、その集落との関連も検討材料となるであろう。

参考文献

- ・ 慶應義塾 「湘南磯沢キャンパス内遺跡」第3巻 縄文時代Ⅱ部 1992年
- ・ 茨城県教育財団 「研究ノート」3号「貯蔵穴の移動について」 1994年
- ・ 茨城県教育財団 「寄居遺跡・うぐいす平遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第84集』 1994年



第12図 大畑遺跡調査区設定図

第4章 大畑遺跡

第1節 遺跡の概要

大畑遺跡は、瀬沼前川と瀬沼川とに挟まれた舌状台地の北側、瀬沼前川の右岸の段丘状に立地する。今回の調査区は、北東方向に約250m、北西方向に約60m、面積 10,879㎡である。現況は、畑地・山林である。遺跡は、2段の段丘面の緩傾斜地に広がっており、低位段丘面は標高約10～15m、低地との比高は約5m、高位段丘面は標高約22～29mで、低地との比高は約20mである。旧石器時代には石器製作の場として利用され、縄文時代から古墳時代には小集落が形成された。中・近世には墓域、道路、近代は炭の生産場所となっていた旧石器時代～近代までの複合遺跡である。特に、弥生時代には大きな集落があり、瀬沼前川の対岸にも同時期の集落跡である矢倉遺跡がある。

今回の調査で検出された遺構は、旧石器時代の石器製作場跡、縄文時代の住居跡1軒、随し穴3基、弥生時代の住居跡10軒、古墳時代の住居跡1軒、中世の地下式墳2基、土坑97基、道路跡1条、溝12条、方形竪穴遺構4基、近世の墓塚4基、近代の炭焼き窯跡4基等である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に48箱出土している。旧石器時代の刮片、縄文土器片、弥生土器（甕、高坏）、土製品（勾玉、紡錘車）、鉄鏝、鉄製鎌、不明鉄製品、古墳時代の土師器片等が出土している。

第2節 基本層序

当遺跡の南東側平坦部（E2a区）にテストピットを設定し、深さ約2mまで掘り下げて、土層の堆積状況を確認した。

第1層は、10cm前後の厚さで、暗褐色をしたソフトローム層である。

第2層は、10～20cm程の厚さで、褐色をしたソフトローム層である。白色粒子を微量含む。

第3層は、25～35cm程の厚さで、褐色をしたハードローム層である。スコリア粒子を微量含む。

第4層は、20cm前後の厚さで、褐色をしたハードローム層である。スコリア粒子を少量含む。

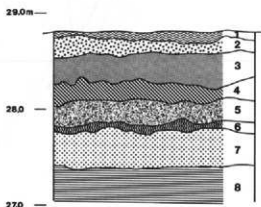
第5層は、25cm前後の厚さで、褐色ハードローム層である。鹿沼粒子少量、スコリア粒子を微量含む。

第6層は、10cm前後の厚さで、黄褐色をした鹿沼漸移層である。鹿沼粒子中量を含む。

第7層は、40cm前後の厚さで、黄褐色をした鹿沼純層である。スコリア粒子を少量、鹿沼粒子を多量に含む。

第8層は、褐色をしたハードローム層ある。

遺構は、第3層上面で確認した。



第13図 大畑遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

本跡からは、縄文時代の竪穴住居跡1軒（S I 9）、弥生時代の竪穴住居跡10軒（S I 1～7・10～12）、古墳時代の竪穴住居跡1軒（S I 8）が確認されている。以下、時代順に記載する。

第9号住居跡（第15図）

位置 調査区北東部、B4m区。

重複関係 第37・38・46土坑が本跡の床面を掘り込んでいて本跡より新しい。本跡のほぼ中央部を東西方向に第2号溝が掘り込んでいて、第33号土坑が壁溝を掘り込んでおり本跡より新しい。

規模と平面形 壁面はすでに削平され、壁溝のみ確認されたため、全容は不明であるが、長径 8.18m、短径（7.65）mの楕円形であると思われる。

主軸方向 N-15°-W

壁溝 重複する溝に掘り込まれ、ほぼ半周のみ確認されたが、全周していたものと思われる。上幅30cm前後、下幅15cm前後で、断面は緩やかな「U」字状である。

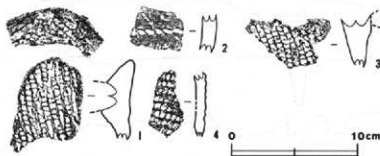
床 ほぼ平坦であり、南部の一部に黒色土の硬化面が認められた。

ピット 18か所（P₁～P₁₈）。P₁・P₃・P₇・P₈・P₁₁・P₁₄の6か所は、長径35～70cm、短径33～65cmの円形及び楕円形で、配置、規模等から柱穴と思われる。P₂・P₄・P₆は、長径40cm前後、短径43cm前後の楕円形で、壁際に沿うように配置されているが、その他のピットを含めて性格は不明である。

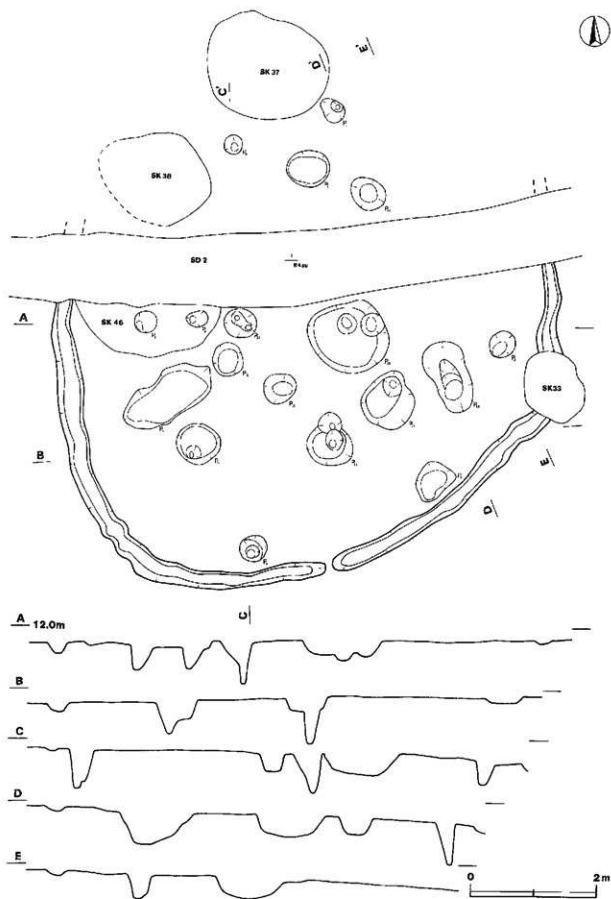
炉 確認されなかったが、隣接する溝から多量の焼土が検出されたことから溝によって破壊されたものと思われる。

遺物 図版に掲げた遺物の他に弥生土器片、土師器片数点が出土しているが、いずれも細片であり、確認面及び表土中からの出土であるため、本遺構に伴うものとは考えられない。第14図1～4は本跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は縄文時代後期から晩期の把手部で、壁溝覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形状や出土遺物から縄文時代後期から晩期と思われる。



第14図 第9号住居跡出土遺物拓影図



第15图 第9号住居跡実測図

第1号住居跡（第16図）

位置 調査区南西部の緩斜面部、C2区。

重複関係 本跡の北部は第1号溝に掘り込まれており、西部は第10号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.48m、短軸4.0mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-37°-W

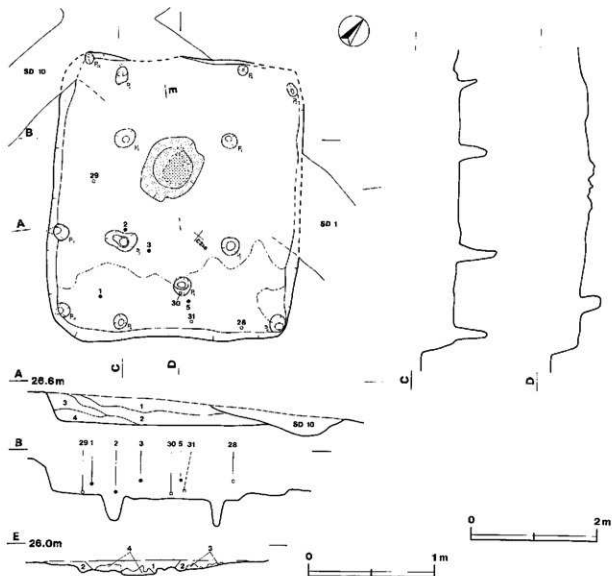
壁 壁高は6～54cmで、垂直に立ち上がる。

床 はほぼ平坦であるが、小さな凹凸があり、南東部の出入口付近が踏み固められ硬化している。

ピット 13か所（P₁～P₁₃）。P₁～P₄は長径27～49cm、短径26～29cmの楕円形で、深さが55cm前後である。

P₁～P₄は主柱穴と思われる。主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は直径25cmの円形で、深さ30cmの出入り口施設に伴うピットとされる。P₆～P₁₃は壁際のコーナー部に配置され、直径10～25cmの円形および楕円形で、壁柱穴と思われる。

炉 1か所。中央部からやや北寄りにあり、ほぼ方形は長径110cm、短径87cmの楕円形で、床面を5cm程掘り込んでい。炉床は、中央部が特に火熱を受け亦硬化し、長期間使用したと思われる。



第16図 第1号住居跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 炭土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック中量、ローム小ブロック・炭化材・炭化物・炭化粒了碎屑
- 2 黒褐色 ローム粒了中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化材・炭化物微塵
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微塵
- 4 暗赤褐色 ローム焼土小ブロック多量

覆土 上層に黒色土が堆積し、ローム・焼土を含む暗褐色土がレンズ状に堆積する4層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 炭土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒了少量、ローム中ブロック・スクリヤ粒子微塵
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子中量、ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土大ブロック・炭化物微塵
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒了多量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微塵
- 4 黒褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、ローム大ブロック少量、焼土粒了・炭化物・炭化粒子微塵

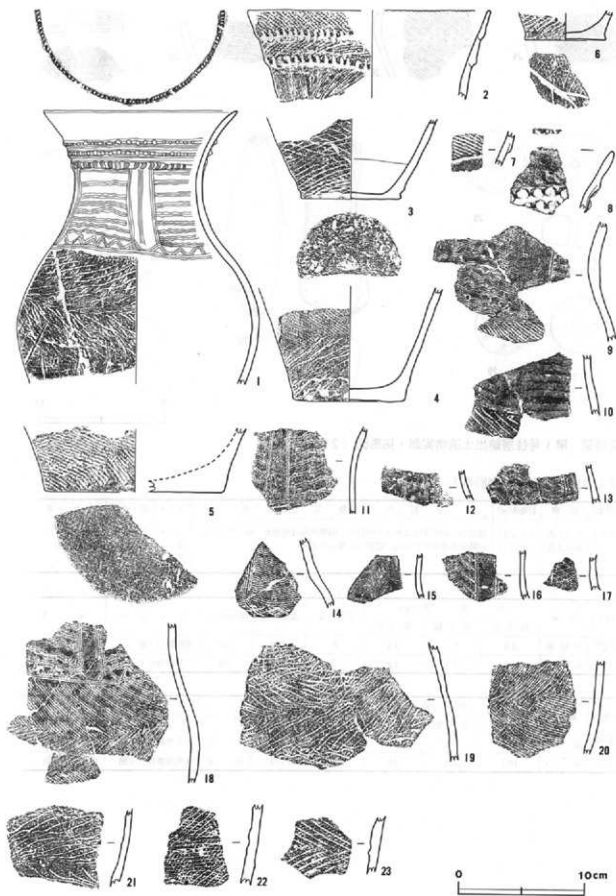
遺物 北部は溝に埋り込まれているため、南部を中心に弥生土器片約350点出土しているが、ほとんどが胴部片で、口縁部、底部は数量である。第17図1～6は弥生土器の壺で、1は広口壺の口縁部から胴部片で、南隅から横位の状態で出土している。2は、広口壺の口縁部から頸部片で、南部の覆土下層から出土している。3～6は底部から胴部にかけての破片で、5は、南東部覆土中層からつぶれた状態で出土している。第18図28・29は紡錘車で、29は西部の床面直上から出土している。

第17図7～23・第18図24～27は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。7は口縁部片で、複合口縁部には附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。9～17は頸部片である。9～14には櫛歯状工具による縦区画内に波状文が施されている。15・16は縦区画内に垂山形文が施されている。18は頸部から胴部片で、胴部外面には附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。19～26は胴部片で、19には附加条二種(附加1条)の縄文が施され、外面には炭化物が付着している。27は底部片で、底部には布目痕がある。

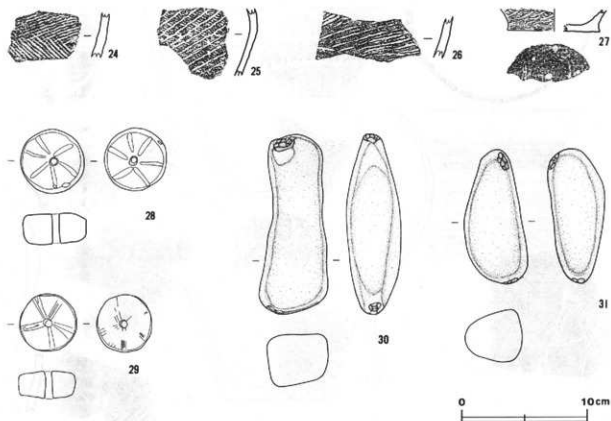
所見 木跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	寸法(cm)	器形の特徴及び文様	粘土・色澤・焼成	備考
第17図 1	広口壺 弥生土器	A 15.5	胴部下半欠損。口縁部には櫛歯状工具による刻みがある。口縁部は無文で、頸部との境に3条の隆帯が施されている。頸部は櫛歯状工具による3条を単位に4分割され、区画内には波状文が施されている。胴部19.3外周は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石・石英 におい黄緑 普通	P 1, 60% P1.9 南隅覆土下層 外面スス付着 外面一部割破
		H 10.3			
		I 19.3			
2	広口壺 弥生土器	A [19.5]	頸部から口縁部片。口唇部には、縄文が施されている。口縁部は3段の複合口縁で、附加条二種(附加2条)の縄文が施され、段の下端には縦区画内による押込がある。胴部外面には放射状文が施されている。	長石・石英・パミス におい橙 普通	P 2, 5% P1.9 南隅覆土下層
		B [7.0]			
3	広口壺 弥生土器	B [6.4]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部外面は附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。底部に布目痕がある。	長石・石英・雲母 におい橙 普通	P 3, 10% P1.9 南隅覆土中層 外面スス付着
		C 8.0			
4	広口壺 弥生土器	B [9.2]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部外面は附加条一種(附加2条)と附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部に布目痕がある。	長石・雲母・スクリヤ におい橙 普通	P 4, 15% P1.9 白蔵覆土中 外面スス付着
		C [8.9]			
5	広口壺 弥生土器	H [5.0]	底部から胴部下位にかけての破片。胴部外面は附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。底部に布目痕がある。	長石・石英・雲母 スクリヤ におい橙 普通	P 5, 5% P1.9 白蔵覆土中層 内面割破
		C [14.4]			



第17图 第1号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第18図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第18図 6	広口壺 弥生土器	B[2.4] C(6.4)	底部から胴部下端にかけての破片。胴部外面は附加糸一種(附加2条)の縄文が施されている。底部に木葉痕がある。	長石・石英・雲母 焼普通	P 6, 5% P L 9 南部覆土中

図録番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第18図 28	紡錘車	5.0	5.1	2.4	8	68.4	100	東部覆土上層	D P 1 P L 27
29	紡錘車	4.6	4.6	2.2	7	52.6	100	西部床面直上	D P 2 P L 27

図録番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第18図 30	敲石	14.2	5.5	4.4	466.9	100	砂岩	南東壁部覆土下層	Q 1 P L 31
31	敲石	10.7	5.1	4.6	299.1	100	砂岩	南東壁部覆土下層	Q 2 P L 31

第2号住居跡 (第19図)

位置 調査区南西部, D3aX。

規模と平面形 長軸5.60m, 短軸 (1.94)mであるが, 南東部が調査区外であるため, 正確な平面形は不明である。

主軸方向 [N-33°E]

壁 壁高は34~54cmで, 外傾して立ち上がる。

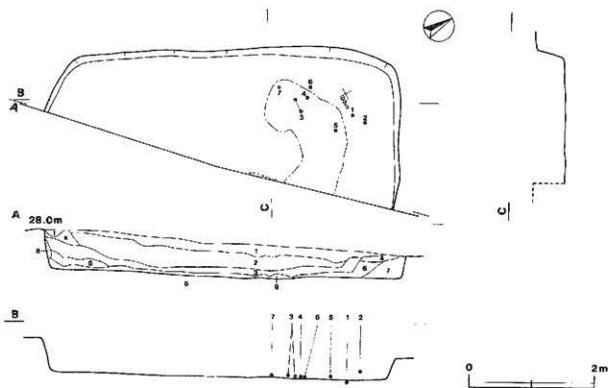
床 享用で軟弱なローム上。北部にやや硬化した面がある。

炉 調査した範囲では炉が確認されなかったが, 住居跡中央部から焼土が検出され, この付近に炉があったものと思われる。

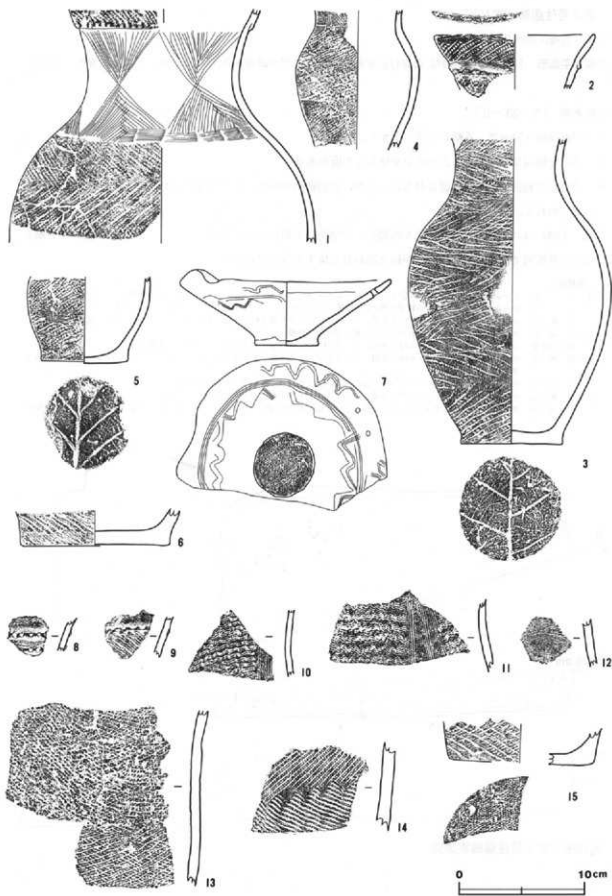
覆土 上層にはロームを含む黒色土が堆積し, 中層から下層にかけて黒褐色土がレンズ状に堆積する3層からなる自然堆積である。第9層は, 炉跡と思われる焼土を含んでいる。

土層解説

- | | | |
|---|------|---|
| 1 | 黒色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量, ローム大・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量 |
| 2 | 黒色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量, ローム中ブロック・焼土小ブロック少量, ローム大ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック・焼土粒子中量, 焼土中・小ブロック少量, 炭化物微量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 5 | 稀断褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック中量, 焼土小ブロック・炭化物微量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック・焼土粒子中量, ローム大ブロック・炭化粒子少量, 焼土小ブロック微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量, 焼土小ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 8 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量 |
| 9 | 暗褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量, ローム大ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量, 焼土大ブロック・炭化物微量 |



第19図 第2号住居跡実測図



第20图 第2号住居跡出土遺物実測・拓影图

遺物 北部を中心に弥生土器片が約90点出土している。ほとんどが胴部片で、口縁部、底部は少量である。第20図1～6は弥生土器で、2の広口壺の口縁部片は、北部復土下層から出土している。1の広口壺の口縁部片は、北部床面から横位の状態で出土している。4の頸部から胴部にかけての破片は、北部の床面直上からつづれた状態で出土している。7の鉢形土器は、北部床面直上から逆位でつづれた状態で出土している。

第20図8～15は第2号住居跡から出土した弥生土器片の拓影図である。8・9は隆帯のある口縁部片で、8は隆帯が2条ありその間に櫛歯状土具による横走文が施されている。10・11・12は頸部片で、10と11には縦区画内に櫛歯状土具による波状文が施されている。11は北東部、床面直上から出土している。12には逆弧文が施されている。13・14は胴部片で、13には附加条二種（附加1条）の縄文が施され羽状構成をとっている。14には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。15は底部片で、外面には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、底部には布目痕があり、朽と思われる汗痕が残っている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後葉後半と思われる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図号	器名	寸法(cm)	器形の科類及び文様	土色・色澤・焼成	備考
第20図 1	広口壺 弥生土器	B 18.6	口縁部、胴部下半欠損。複合口縁で附加条一種（附加2条）の縄文が施され、下加に縄文泥体による再打が施されている。胴部はへら状土具により6分割されている。胴部との間に櫛歯状文が施されている。胴部外面には、附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石・石英・砂粒・ パミス 小礫 にふい 黄緑 普通	P 8. 30% P L 9 北部床面直上
2	広口壺 弥生土器	A 13.0 B 4.3	口縁部片、口縁部には縄文泥体が同圧されている。口縁部には、附加条二種（附加2条）の縄文が施され、頸部との間には隆帯があり、隆帯上に矢印による押圧がある。	長石・石英 にふい 黄緑 普通	P 7. 5% P L 10 北部床面直上
3	壺 弥生土器	B (24.2) C 8.1	頸部から胴部片。胴部から胴部外面には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木炭痕がある。	長石・石英 にふい 褐色 普通	P 9. 40% P L 10 北部床面直上 外部外面に炭化土質 赤褐色のヤシの皮
4	小形壺 弥生土器	B (11.2)	胴部から頸部片。頸部は、櫛歯状土具により張文されている。胴部外面には、附加条一種（附加2条）と附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	長石・石英・雲母・ パミス にふい 黄緑 普通	P 10. 20% P L 9 北部床面直上
5	小形壺 弥生土器	3 (6.9) C 7.0	底部から胴部下半部片。胴部外面には、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。底部には木炭痕がある。	長石・石英 灰褐色 普通	P 11. 20% P L 10 北部床面直上
6	壺 弥生土器	B (4.6) C 7.2	底部から胴部半片。胴部外面には、附加条一種（附加1条）の縄文が施されている。	長石・石英・雲母・ 砂粒 にふい 黄緑 普通	P 13. 15% P L 10 北部床面直上
7	鉢形土器 弥生土器	A 16.8 B 5.3 C 4.9	胴部欠損。底部から胴部は大きく外傾して立ち上がり、口縁は片口が付く。口縁部に2か所の穿孔がある。外面には櫛歯状土具による波状文が施されている。底部には布目痕がある。	長石・石英・砂粒 にふい 黄緑 普通	P 14. 30% P L 10 北部床面直上

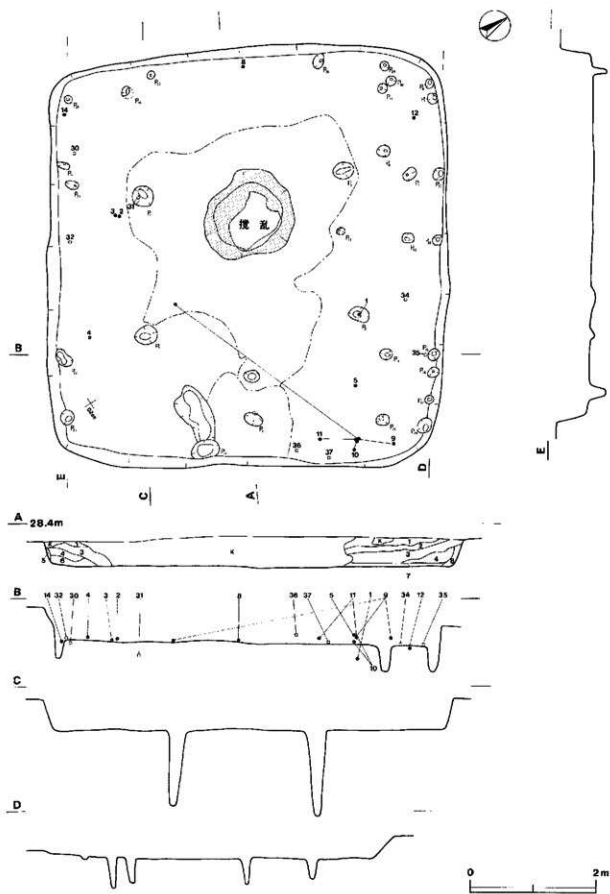
第3号住居跡（第21図）

位置 調査区南西部、D2a区。

規模と平面形 長軸6.68m、短軸6.38mの隅丸方形である。

主軸方向 N-55°E

壁 葦高は18～58cmで、わずかに外傾して立ち上がる。



第21图 第3号住居跡実測图

床 出入り口付近は硬化面が確認されている。中央部分は攪乱のため軟弱なロームで、壁際の方が硬い。
 ピット 31か所（P₁～P₃₀）。P₁～P₄は長径32～36cm、短径24～31cmの楕円形で、深さが120～145cmの深い掘り込みをもつ主柱穴と思われる。主柱穴を結ぶ直線は長方形となる。P₅は長径31cm、短径20cmの楕円形で、深さ45cmの出入り口施設に伴うピットと認められる。P₅～P₃₀の小ピットが壁際に検出された。特に、北東壁際には、集中して配置されている。

炉 中央部から北西寄りにあり、平面形は直径140cmの円形で、床面を8cm掘り込んである。炉床の赤変硬化面及び、覆土は攪乱のため確認できなかった。

覆土 8層からなる。壁際には焼土・炭化物を含む暗褐色土がレンズ状に堆積しているが、中央部から南西部にかけて大きな攪乱があり、炉床まで削り取られているため全体的な層の様相は正確には把握できない。

上層解説

- 1 黒色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭化粒子少量、ローム大ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒多量、ローム大ブロック・焼土粒・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒多量、ローム大ブロック微量
- 6 黒色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒少量、炭化物・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒・炭化物少量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・炭化物微量

遺物 中央部が攪乱されているため、周辺部から遺物が出土している。弥生土器片が約640点出土し、ほとんどが胴部細片である。第22図1～10、第23図11～15は弥生土器壺で、1の広口壺はP₂の覆土中から逆位で出土し、2・3の広口壺の頸部及び胴部から口縁部片は、西部床面直上からつぶれた状態で出土している。4～7は広口壺の口縁部片で、4は南部、5は東部の床面近くから出土している。9の広口壺の胴部から頸部片は、東部壁際の覆土下層から分かれて出土していることから、投棄されたものと思われる。8の小形壺は、北東壁際の床面直上から出土している。14の小形片口壺は、西側の床面直上から逆位で出土している。第23図30～32は紡錘車で、31はP₄の覆土中から出土している。第24図33～35は土製勾玉で、34は北東部、35は北東壁際の床面直上から出土している。

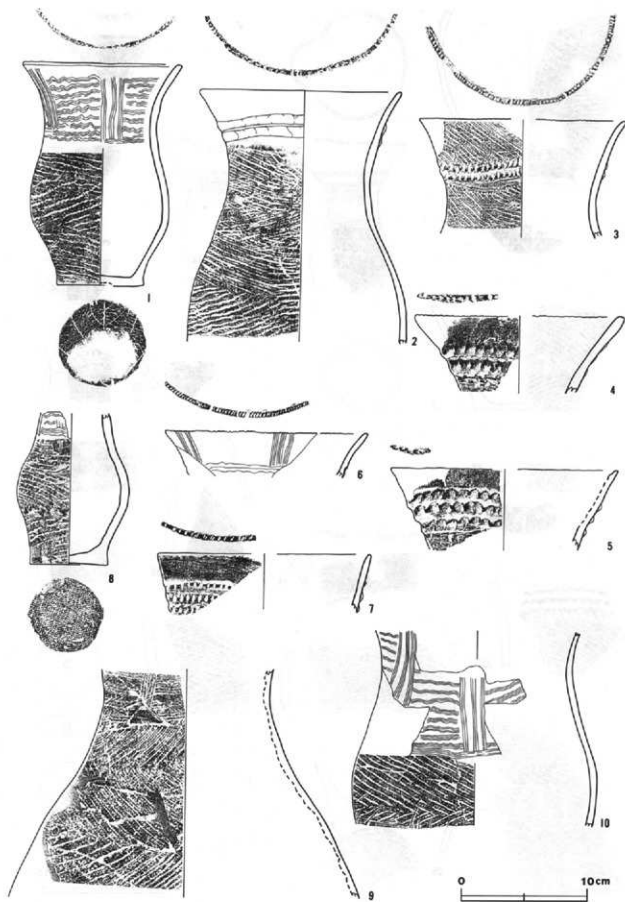
第23図16～29は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。16～18は広口壺の口縁部片で、口唇部に刻みが施され、口縁部は無文で、18には櫛歯状工具による縦区画が施されている。21～24は頸部片で、21・22には陞帯が通り降帯上に押圧がある。23・24には櫛歯状工具による縦区画内に波状文が施されている。25～28は胴部片で、26～27には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、28には附加条一種（附加2条）の縄文が施され均状構成をとっている。29は底部片で、外面には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、底部には右日痕があり、初と認められる片痕が残っている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

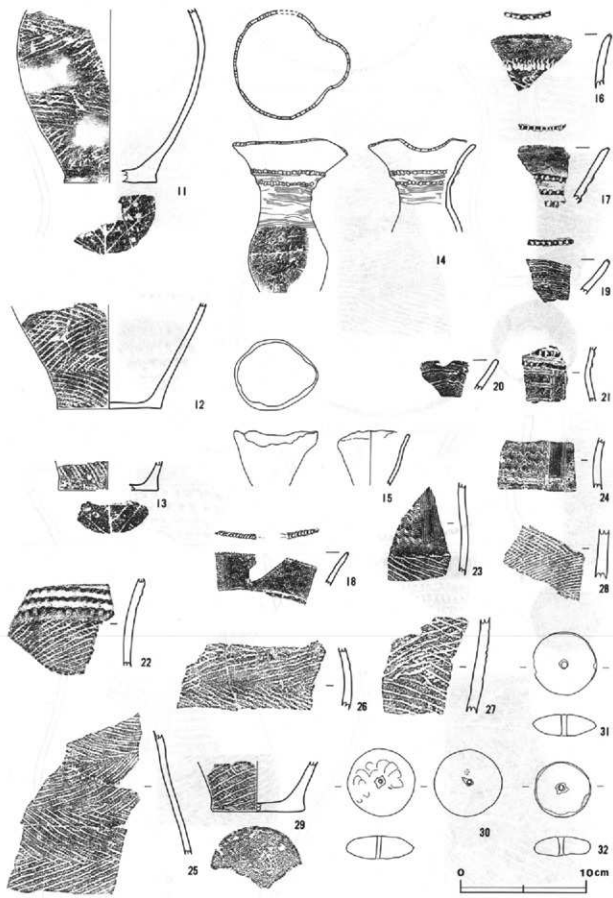
第3号住居跡出土遺物観察表

図番番号	器種	寸法値(cm)	容 形 の 特 徴 及 び 文 様	土質・色調・焼成	備 考
第22図 1	小形土器 弥生土器	A 12.7 B 17.8 C 7.0 H 8.9 I 10.9	胴部上半部から口縁欠損。口唇部には、縄文が施されている。口縁部から頸部の縦区画は、3条を単位に6分割されていると思われる。縦区画の内、1か所は2条である。区画内には櫛歯状工具による波状文が施されている。胴部外面には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、均状構成をとる。底部には右日痕がある。	灰丁、不発、雲母、スコリア、小礫 普通	P34, 70% PLD 外面スチ付着、内 面炭化物付着 P ₂ 覆土中

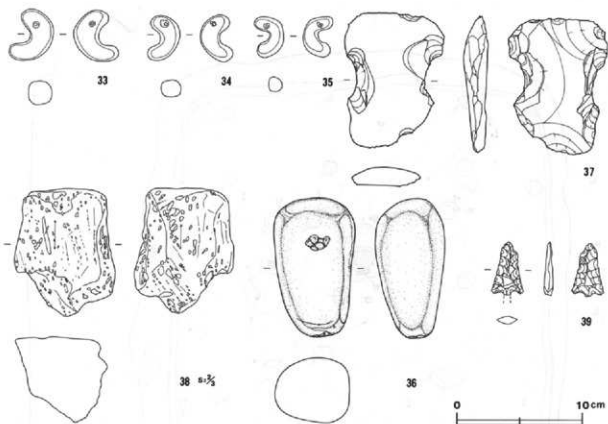
KC番号	器種	計測値(cm)	器形の概観及び文様	粘土・色調・焼成	備考
第2編 2	広口壺 弥生土器	A 16.0 D (30.0) I 17.4	口縁部から頸部片。口縁部には縄文全体が押圧されている。口縁部は黒文で、下端に隆帯が2条あり。頸部から腹部にかけての外面には約5条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒、 小礫 にふいかけ 普通	P15, 60% P.L11 内面漆黒 外面に黒文のシロ
3	広口壺 弥生土器	A116.1 D (9.4) H 11.8	頸部から口縁部片。口唇部には縄文が施されている。口縁部には約5条二種(附加1条)の縄文が施され、 λ 文には2条の隆帯が走り、隆帯上には縄文全体による強い押し印がある。頸部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとるものと思われる。	長石、石英、スクリヤ、砂粒 にふいかけ 普通	P18, 10% P.L10 内面漆黒直上
4	広口壺 弥生土器	A116.6 B (6.2)	口縁部片。口唇部には縄文が施されている。二種部は黒文で、頸部との境に低い隆帯が2条あり、隆帯上に頸部による押し印がある。頸部には、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。	長石、石英、スクリヤ 明赤褐色 普通	P17, 5% P.L11 内面漆黒下層
5	広口壺 弥生土器	A118.1 B (6.1)	口縁部片。口唇部には縄文が施されている。二種部は黒文で、頸部との境に低い隆帯が3条あり、隆帯上には本頸部による押し印がある。頸部上端に附加条一種(附加1条)の縄文とへら杖二枚による捺文がある。	長石、石英、砂粒、 小礫 パイス にふいかけ 普通	P18, 5% P.L11 内面漆黒下層
6	広口壺 弥生土器	A116.2 B (3.5)	口縁部片。口唇部には、へら杖工具による押し印がある。口唇部には、縦帯の隆帯文が施され、下端には隆帯が2条あり。	長石、石英、パイス 鈍い褐色 普通	P19, 5% P.L11 内面漆黒 外面にスチヤ
7	広口壺 弥生土器	A117.0 B (4.6)	口縁部片。口唇部には棒状工具による押し印がある。口唇部は黒文で、下端には隆帯が3条あり、棒状工具による強い押し印がある。隆帯の間に、隆帯状で具による捺文が施されている。	長石、石英、赤褐色、 砂粒 にふいかけ 普通	P20, 5% P.L11 内面漆黒
8	小形壺 弥生土器	(12.0) C 6.2	頸部上半部から口縁部欠片。頸部には隆帯状工具による棒状文が施され、 λ 文内にも約5条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。腹部には右に傾がある。	長石、石英、スクリヤ、砂粒 普通	P28, 60% P.L11 外面にスチヤ 北面漆黒内面直上
9	広口壺 弥生土器	(18.2) H113.3	頸部上半部から頸部片。頸部には、棒状工具による縦文と棒状文が施されている。腹部には、2種類の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、小礫、 砂粒 にふいかけ 普通	P22, 15% P.L11 内面漆黒 外面に下層
10	広口壺 弥生土器	(15.4) H115.2	頸部上半部から頸部下片。頸部には、棒状工具により3条を単位として縦文が施され、 λ 文内には縦文が施されている。外面には、附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、小礫、 砂粒、スクリヤ にふいかけ 普通	P21, 15% P.L2 外面漆黒直上
11	壺 弥生土器	(13.8) C1 7.4 I 15.0	底部から頸部下半部片。頸部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。表面には本頸部がある。	長石、石英、赤褐色、 スクリヤ にふいかけ 普通	P25, 20% P.L12 内面漆黒直上
12	壺 弥生土器	(9.3) C 8.2	頸部下半部から底縁片。平底で、胴部が外縁して立ち上がる。胴部外面には、附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒、 にふいかけ 普通	P23, 15% P.L12 北面漆黒直上
13	壺 弥生土器	(2.3) C1 8.2	底縁片。外面には附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。表面には本頸部がある。	長石、石英、赤褐色、 にふいかけ 普通	P28, 5% P.L11 内面漆黒
14	小形口壺 弥生土器	A 8.8 9.3 (12.1) H 4.0 I 6.3	頸部下半部から底縁欠片。口唇部には、へら杖工具による押し印がある。口唇部は黒文で、頸部との境には2条の隆帯が走り、隆帯上には棒状工具による押し印がある。頸部には、棒状工具による捺文が施される。胴部外面には、附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。	長石、石英、 普通	P30, 60% P.L11 内面漆黒直上
15	小形口壺 弥生土器	A 6.6 B (4.3)	口縁部片。外面は黒文で、捺文が施されている。	長石、赤褐色、スクリヤ にふいかけ 普通	P31 P.L12 内面漆黒



第22图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



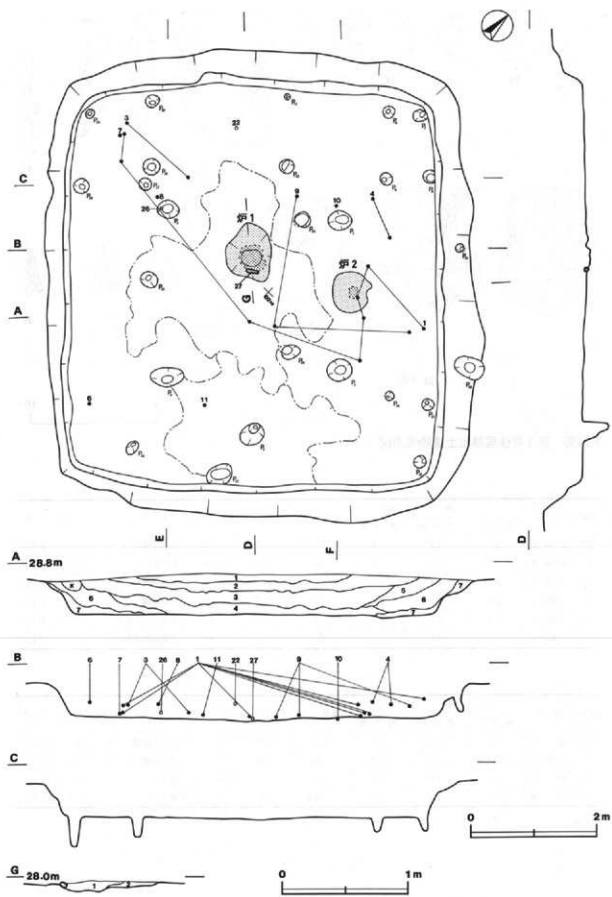
第23图 第3号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)



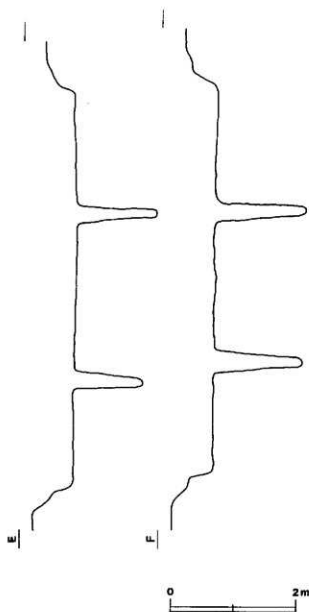
第24図 第3号住居跡出土遺物実測図(3)

図番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第2380 30	紡錘車	5.4	5.4	1.6	3.0	51.7	100	西部壁跡床面	D P 3 P L 27
31	紡錘車	5.1	4.9	1.7	5.0	41.9	100	P ₁ 覆土中	D P 4 P L 27
32	紡錘車	4.5	4.4	1.6	6.0	31.3	100	西部壁跡床面	D P 5 P L 27
33	土製勾玉	2.8	1.7	1.3	1.8	6.4	100	北東部覆土中	D P 6 P L 27
34	土製勾玉	2.4	1.1	0.9	2.0	3.3	100	北東部床面直上	D P 7 P L 27
35	土製勾玉	2.2	1.5	0.8	1.6	2.3	100	北東部壁跡床面直上	D P 8 P L 27

図番号	種別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第2480 36	敲石	11.1	6.5	5.6	566.7	100	砂岩	東部壁跡覆土中層	Q 4 P L 31
37	打製石斧	10.8	7.9	1.9	188.6	100	砂岩	東部壁跡床面直上	Q 5 P L 31
38	砥石	5.1	4.0	3.9	15.0	—	軽石	覆土中	Q 6 P L 31
39	石鏃	(2.1)	1.3	0.4	(0.8)	(90)	頁岩	覆土中	Q 7 P L 31



第25图 第4号住居跡实测图(1)



第26図 第4号住居跡実測図(2)

第4号住居跡(第25・26図)

位置 調査区南西部, D2a区。

規模と平面形 長軸6.72m, 短軸6.12mの隅丸方形である。

主軸方向 N-43°-W

壁 壁高は48~64cmで, 床面からは緩やかに外傾し, 中段から大きく外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが, 小さな凹凸があり, 中央部分は軟弱なロームでその周囲は硬化している。特に, 南東部の出入口の周囲がよく踏み固められて硬い。

ピット 26か所(P₁~P₂₆)。P₁~P₄は長径25~53cm, 短径30~36cmの楕円形で, 深さが130cm前後である。P₅~P₆は土柱穴と思われ, 土柱穴を結んだ線は方形となる。P₇は長径40cm, 短径30cmの楕円形で, 深さ45cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P₈~P₁₀は壁際に配置され, 直径10~25cmの円形および楕円形で, 壁柱穴と思われる。P₁₁~P₁₃に伴う補助柱穴と思われる。P₁₄~P₁₆は, 大きく外傾した壁から検出されたが, 性格は不明である。

炉 2か所。第1号炉は, 中央部からやや北西寄りであり, 平面形は長径95cm, 短径75cmの楕円形で, 床面を7cm程掘り込んでいる。炉床は, 中央部が火熱を受け赤変硬化している。南東寄りの炉床上には, 棒状の硬質砂岩が長径に直行的ように据えられており, 炉石として使われていたものと思われる。第2号炉は, 北東部のP₁・P₂のほぼ中間に位置し, 平面形は長径65cm, 短径55cmの楕円形で, 掘り込みはなく, 焼土が検出されただけである。

第1号炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒多・焼土小ブロック・焼土粒子多量, 焼土中ブロック中量, ローム中・小ブロック・焼土大ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒多・焼土粒子多量, ローム中ブロック・焼土小ブロック中量, ローム大ブロック・焼土大・中ブロック・炭化物・炭化粒少量

覆土 上層中央部に黒色土が堆積し, 中層から下層にかけてローム・焼土・炭化物を含む黒褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積する7層からなる自然堆積である。

土器解説

- 1 黒色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
 5 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
 6 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 7 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

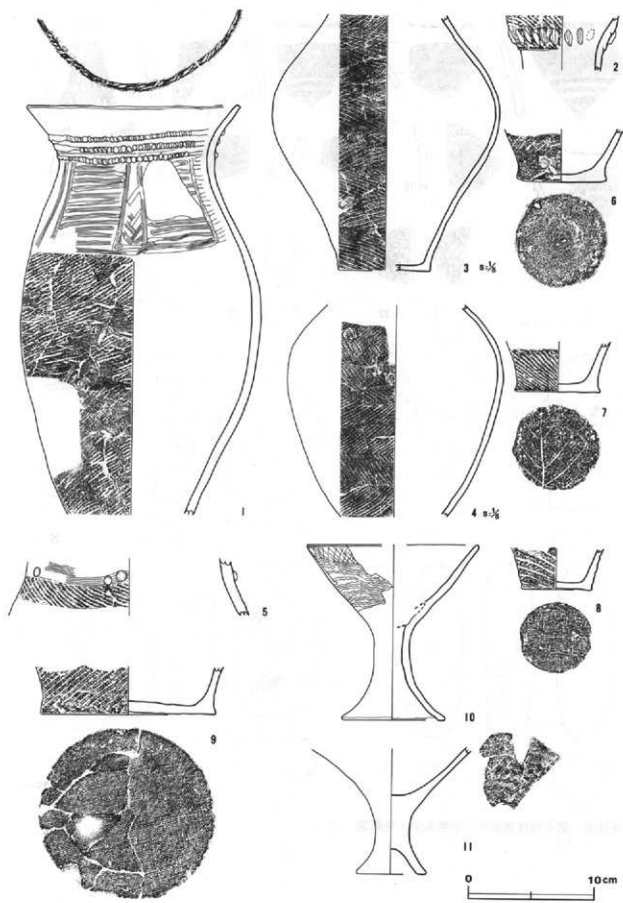
遺物 弥生土器片が約1500点出土しているが、ほとんどが細片である。ほぼ全域から出土しているが、南部は密度が薄い。第27図1～9は弥生土器壺で、1の広口壺は東部から西部にかけての覆土下層から広範囲に出土した破片が接合したものである。2・5の頸部から胴部片は、覆土中から出土している。3・4・6～9の胴部から底部片は、3が西部覆土下層から、4が北部覆土下層からつぶれた状態で出土し、6は南部、7は西側の覆土下層から出土している。8の胴部から底部片は、西部覆土中層から出土し、9は中央部から東部にかけての覆土下層から出土している。第27図10・11は弥生土器高杯で、10は北部床面直上、11の脚部は南部覆土下層から出土している。第28図22・23は紡錘車で、22は北西部覆土中層から出土している。

第28図12～21は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。12～17は口縁部片で、12・15は無文の下に陸帯が走る。13・14には櫛歯状上具による波状文が施されている。16・17は複合口縁で、16は附加条二種（附加1条）、17には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、17には1段目の下に粘着が付く。18～21は胴部片で、18・19には垂山形文が施され、20・21の胴部との境には離断文が施され、胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

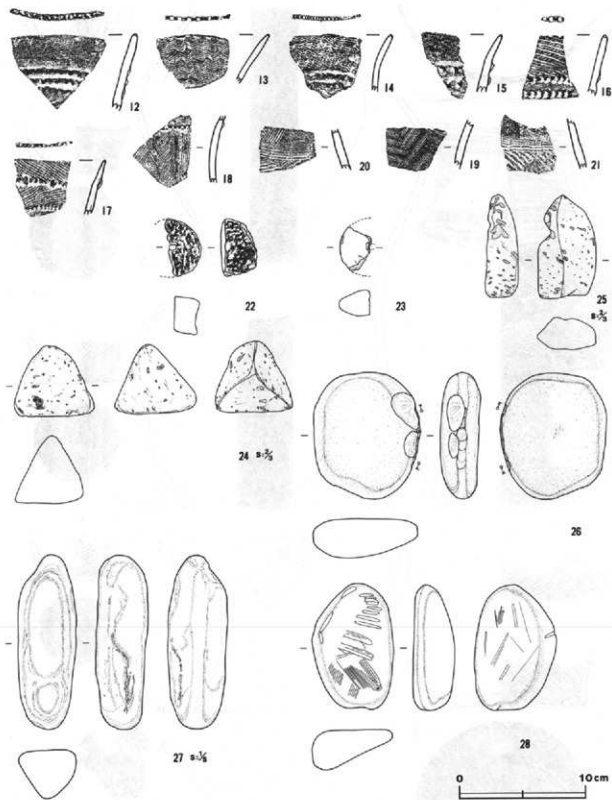
所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第4号住居跡出土遺物観象表

図影番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・地味	備考
第27図	広口壺 弥生土器	A 17.1 B (32.5) H 12.4 I 19.2	広口及び頸部一部欠損。口縁部には縄文が施されている。口縁部外面は無文で、胴部との境には、陸帯が3条走り、陸帯上にはへら状上具による取付がある。胴部外面は、櫛歯状上具による帯状文により7分劃され、区画内には、横断文が施されている。スリット部の1か所には、櫛歯状上具による「V」字状の彫文がある。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。	長石、石英、砂粒 灰黄褐色 普通	F32、70% 外由スズ付着 北側覆土下層
		B (4.5)	胴部から胴部片。口縁部は、2段の複合口縁で、附加条一種（附加2条）の縄文が施され、1段目の下縁には、最長の粘着が付く。胴部は無文である。	長石、石英 ぶい赤褐色 普通	F42、10% P1.12 覆土中
		B (34.1) C 12.21 I 30.2	胴部から胴部片。平底で、底部から胴部は小傾して立ち上がる。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、若狭偏成をとる。	長石、石英、砂粒 パミス ぶい褐色 普通	F35、60% P1.18 南部覆土下層
4	壺 弥生土器	D (28.4) I 28.6	胴部片。胴部は内傾して立ち上がる。胴部は、附加条一種（附加2条）の縄文が施され、若狭偏成をとる。	長石、石英、雲母、 砂粒、パミス ぶい赤褐色 普通	F35、70% P1.13 北部覆土下層 内由割線
		B (4.3)	胴部上から胴部片。胴部外面には、櫛歯状上具により、波状文が施されている。胴部と胴部との境には櫛歯状上具による横断文が施され、その上に、定次の取付がある。胴部外面には、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。	長石、石英、雲母、 砂粒、パミス ぶい褐色 普通	F38、5% P1.12 覆土中
6	壺 弥生土器	B (4.3) C 7.8	底部から胴部・胴片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。底部に粘着が施される。	長石、石英、砂粒、 スクリア ぶい黄褐色 普通	F40、10% P1.12 南部覆土下層



第27图 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第28图 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図説番号	器種	計測値(cm)	器形の特徵及び文様	胎土・色澤・紋様	備考
第29区 7	高 頸土器	B(4.0)	底部から胴部下端部。胴部には、肩筋条一様(附加1条)の縄文が施されている。底部には、大編織がある。	長石、石英、小礫に多い褐色 普通	P41, 10% P.L12 西部覆土下層
		C 5.9			
8	高 頸土器	H(3.8)	底部から胴部下端部。胴部には、肩筋条一様(附加1条)の縄文が施されている。底部には、大編織がある。	長石、石英、砂粒に多い黄緑 普通	P43, 10% P.L13 西部覆土下層
		C 5.6			
9	高 頸土器	B(3.8)	底部から胴部下端部。胴部には、肩筋条一様(附加2条)の縄文が施されている。底部には、大編織がある。	長石、石英、砂粒に多い褐色 普通	P37, 10% P.L12 中央部・東部覆土下層
		C 14.0			
10	高 頸土器	A(13.6)	胴部及び頸部片。胴部は「ハ」の字状にひらき、頸部は、大編織に外縋して立ち上がる。頸部外面の上端には磨砕状工具による磨子状文が施され、磨子状工具による縦走文で区切り、その下に波状文が施される。	長石、石英、砂粒 灰白色 普通	P44, 50% P.L13 中央部床面直上
		B 14.0			
		D 8.1			
		E 6.5			
11	高 頸土器	D(9.9)	頸部上半部欠損。胴部は「ハ」の字状にひらき、頸部は、外縋して立ち上がる。頸部外面には、磨砕状工具による波状文が施される。	長石、石英、雲母、砂粒に多い黄緑 普通	P45, 50% P.L13 西部床面直上
		C 5.5			

図説番号	器種	計 測 値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	残存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第29区 22	砂 罎 壺	4.6	(2.9)	5.0	5.0	(28.3)	20	北西部覆土中層	D P 9 P.L27
23	砂 罎 壺	2.5	3.5	2.1	5.0	(14.2)	20	覆土	D P 10 P.L27

図説番号	種別	計 測 値 (cm)			重量 (g)	残存率 (%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第29区 24	砥石	2.8	3.2	2.7	(2.3)	—	礫石	覆土中	Q 8 P.L31
25	砥石	4.1	2.3	1.3	(1.9)	—	礫石	覆土中	Q 9 P.L31
26	砥石	10.1	8.5	3.2	406.7	100	砂岩	西部覆土下層	Q11 P.L32
27	砥石	25.3	7.9	7.1	1783.9	100	硬質砂岩	北部内庭西面	Q12 P.L31
28	砥石	10.1	6.5	3.2	265.5	100	砂岩	覆土中	Q 3 P.L32

第5号住居跡(第29区)

位置 調査区南西部, D1a区。

規模と平面形 長軸5.19m, 短軸4.96mの隅丸方形である。

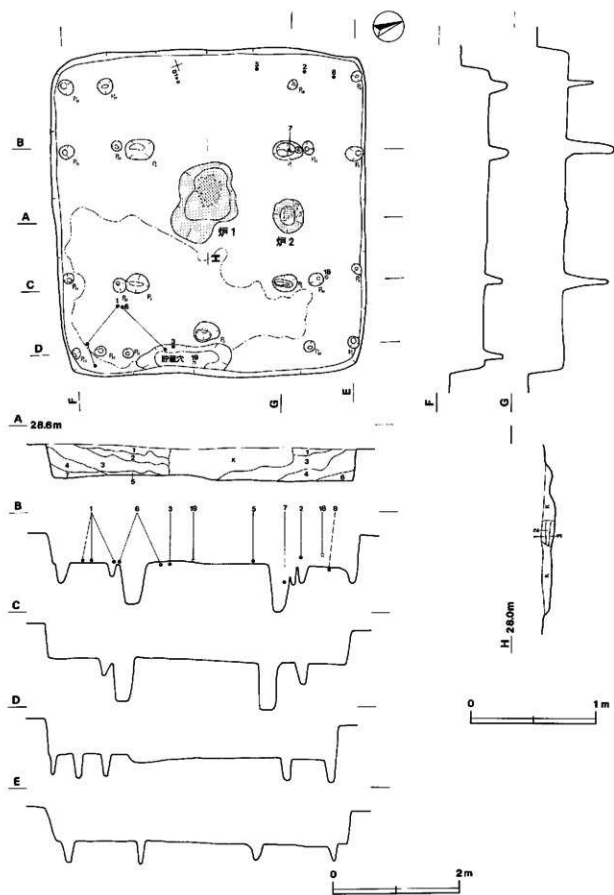
主軸方向 N-19°-E

壁 壁高は45~53cmで、外傾して立ち上がる。

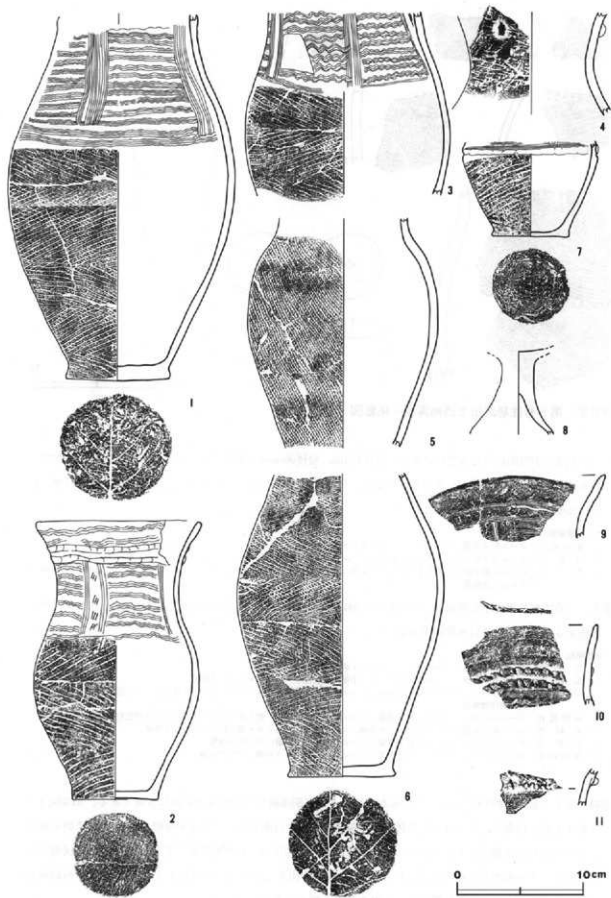
床 ほぼ平坦である。南東部及び出入口部の周囲が踏み固められ硬化している。

ピット 22か所(P₁~P₂₂)。P₁~P₄は長径37~45cm, 短径28~34cmの楕円形で、深さが65~77cmの支柱穴と思われる。P₅は長径41cm, 短径35cmの楕円形で、深さ37cmの出入り施設に伴うピットと思われる。P₆~P₁₁は直径15~30cmの円形で、深さ28~40cmの壁柱穴と思われる。P₁₂~P₂₂は、支柱穴の外側にあり、直径18~23cmの円形で、深さ20~32cmの補助柱穴と思われる。

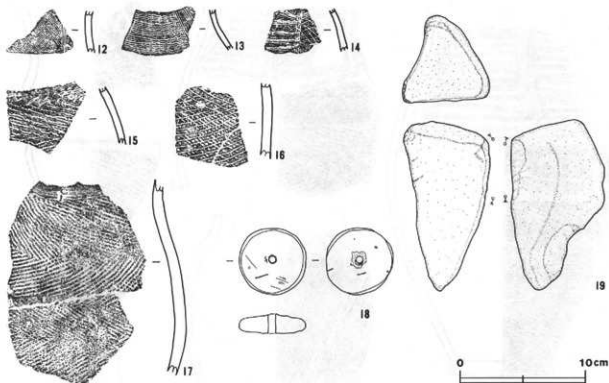
貯蔵穴 1か所。南東壁中央に付設されており、平面形は長径150cm, 短径40cmの長楕円形で床面を16cm程掘り込んでいる。底部は皿状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。



第29图 第5号住居跡实测图



第30图 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第31図 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

炉 炉1は、中央部から北西寄りにあり、長径135cm、短径90cmの不整楕円形で、床面を10cm程掘り窪めている。

炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉2は、P₁とP₂の間にあり、長径53cm、短径48cmの楕円形で、掘り込みは浅く、焼土のみを確認した。

炉1土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土・炭化粒子少量
- 3 黒色 ローム・焼土粒子・焼土小ブロック・多量、焼土中ブロック中量、ローム小ブロック・焼土大ブロック少量、ローム中ブロック・炭化物微量

覆土 上層中央に黒色土が堆積し、中層から下層にかけてローム・焼土・炭化物を含む黒褐色土がレンズ状に堆積する7層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・炭化物微量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量、炭化物微量

遺物 弥生土器片が約800点出土しているが、ほとんどが胴部細片で口縁部・頸部は少量である。第30図1～7は弥生土器広口壺で、1・3・5の頸部から胴部片は、1は南東隅、3は南東壁際、5は北西壁際の床面直上からつぶれた状態で出土している。2の口縁部から底部片は、北西壁際覆土下層からつぶれた状態で出土している。7の胴部から底部片は、P₁の覆土中層から出土している。8は弥生土器高坏で、北西隅床面直上から出土している。18は紡錘車で、北東部覆土下層から出土している。

第30図9～11・第31図12～17は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。9・10は口縁部片で、9

は頸部との境に櫛歯状工具による横走文が施され、頸部は縦区画内に波状文が施されている。10には輪襷があり、頸部との境に2条の隆帯が走り、頸部は櫛歯状工具により縦区画され、区画内には波状文が施されている。11～14は頸部片で、11には複合口縁の下端に貼帯が付く。12には垂山形文が施され、13・14には櫛歯状工具による波状文が施されている。15～17は胴部片で、15・16には附加条二種（附加1条）、17には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

所見 本跡の時期は、山土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第5号住居跡出土遺物観察表

器番号	器種	計測値(cm)	形状の特徴及び文様	粘土・色灰・焼成	備考
第3器 1	広口壺 弥生土器	H(29.1)	口縁部欠損。頸部外面は、4条を単位に5分割され、縦区画内には、櫛歯状工具による波状文が施されている。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状横紋をとる。底部には木炭粒がある。	長石、石英、砂粒、パミス にぶい黄褐色 普通	P47, 80% P.L14 北西端部表面土 外面スス付着 内面に黒褐色のシミ
		C 8.3			
2	広口壺 弥生土器	A 13.2	口縁部、胴部下平部、底部欠損。口縁部にはへら状工具による彫りがある。口縁部には、2条の櫛歯状工具による波状文が施り、頸部との境には、2条の隆帯が走り、隆帯上には、凸頭によると見られる印がある。胴部は、櫛歯状工具により4分割され、区画内には波状文が施されている。スリット内には、櫛歯状工具による縄文がある。胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状横紋をとる。底部には、布目痕がある。	長石、石英、パミス にぶい黄褐色 普通	P52, 90% P.L14 北西端部表面土 外面スス付着 外側一部厚皮 内面一部厚皮 内面に黒褐色のシミ
		B 22.1			
		C 6.7			
		H 9.7 I 13.1			
3	広口壺 弥生土器	B(14.5)	口縁部、胴部下平部、底部欠損。頸部は、縦区画により5分割され、区画内には櫛歯状工具による波状文が施されている。胴部には、附加条一種（附加1条）の縄文が施され、羽状横紋をとる。	長石、石英、砂粒、小粒 にぶい黄褐色 普通	P48, 90% P.L15 外面スス付着 表面部表面土
		I 16.3			
4	中 頸土器	B(7.5)	胴部片。外面には、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。胴部との境に張り帯が付く。	長石、石英 浅い黄褐色 普通	P49, 5% P.L16 4区覆土
5	広口壺 弥生土器	H(8.4)	胴部から胴部片。胴部は無文で、胴部外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施される。	長石、石英、雲母、砂粒 にぶい褐色 普通	P51, 90% P.L14 北西端部表面土 外面スス付着 外側一部厚皮 内面に黒褐色のシミ
		I 15.0			
6	広口壺 弥生土器	B(42.2)	頸部、口縁部欠損。胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状横紋をとる。底部には木炭粒がある。	長石、石英、雲母、砂粒 スコリア にぶい褐色 普通	P53, 80% P.L14 西端部表面土 外面スス付着
		C 8.5			
		I 24.2			
7	壺 弥生土器	B(7.5)	底部から胴部下平部、胴部下平部には、櫛歯状工具による横走文が施され、胴部との境は最大径となり、発着が2条ある。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状横紋をとる。底部には、布目痕がある。	長石、石英、雲母 にぶい黄褐色 普通	P53, 40% P.L13 北西端部表面土 P、腹上中層
		C 6.2			
8	高 弥生土器	B(6.8)	胴部片。胴部は「ハ」の字次に開く。胴部は、大きく外傾して立ち上がり、とらわれる。	長石、石英、雲母、砂粒 スコリア にぶい黄褐色 普通	P54, 40% P.L13 北西端部表面土

器番号	器種	計測値(cm)			口径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大径	最大厚					
053/04 18	紡錘車	5.3	5.3	1.6	6.0	42.2	100	北東部南側壁土下層	D P11 P.L27

図面番号	種別	計測値(cm)			重量(g)	保存率(%)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第331号 19	灰石	(22.6)	(12.5)	1.6	(2685.0)	-	砂岩	東部壁際床面直上	Q14 P.L32

第6号住居跡(第32区)

位置 調査区中央部, D16a区。

規模と平面形 長軸6.10m, 短軸5.32mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-66-W

壁 壁高は44~55cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほば平坦であるが、小さな凹凹があり、出入り口施設の周囲及びP₁・P₂の周囲が踏み固められ硬化している。

ピット 19か所(P₁~P₁₉)。P₁~P₇は長径50~55cm, 短径35~45cmの楕円形で、長径方向は住居跡の主軸方向に対して直角である。深さが70~80cmの土柱穴と思われる。P₈は直径30cmの円形で、深さ40cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P₉~P₁₃は直径15~30cmの円形で、深さ20~40cmの壁柱穴と思われる。P₁₄・P₁₅は、P₁・P₂の外側に位置し、長径26~32cm, 短径19~20cmの楕円形で、深さ30cm前後の補助柱穴と思われる。

貯蔵穴 1か所。南東壁南部に設置され、平面形は長径43cm, 短径38cmの楕円形で床面を19cm程掘り込んでいる。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

炉 中央部から北寄りにあり、長径120cm, 短径95cmの楕円形で、床面を10cm程掘り窪めている。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。

土層解説

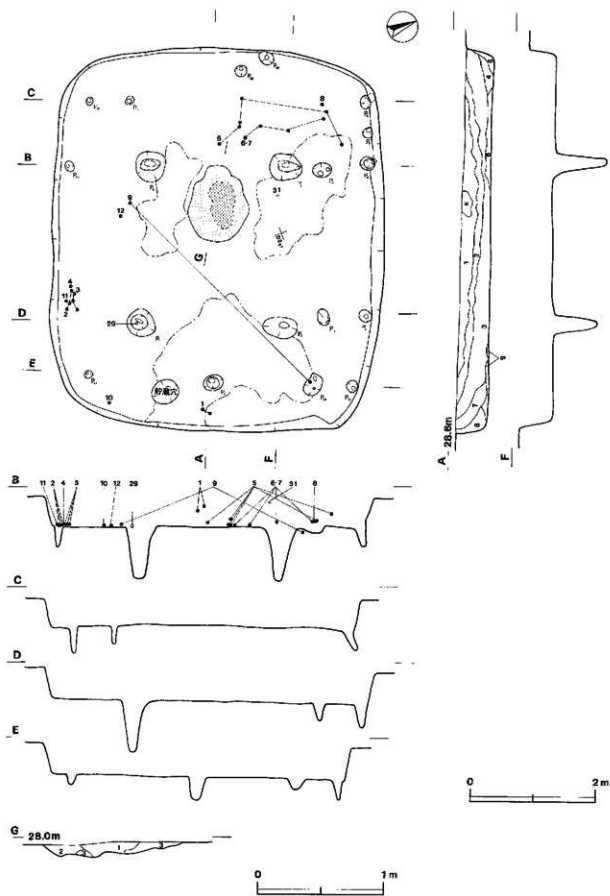
- 1 黒褐色 灰土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 灰土粒子多量、ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量

覆土 壁際にロームを多量に含む褐色土が堆積し、下層から中層にかけて、暗褐色と黒褐色がレンズ状に堆積し、上層中央部に黒色土が堆積する9層からなる自然堆積である。

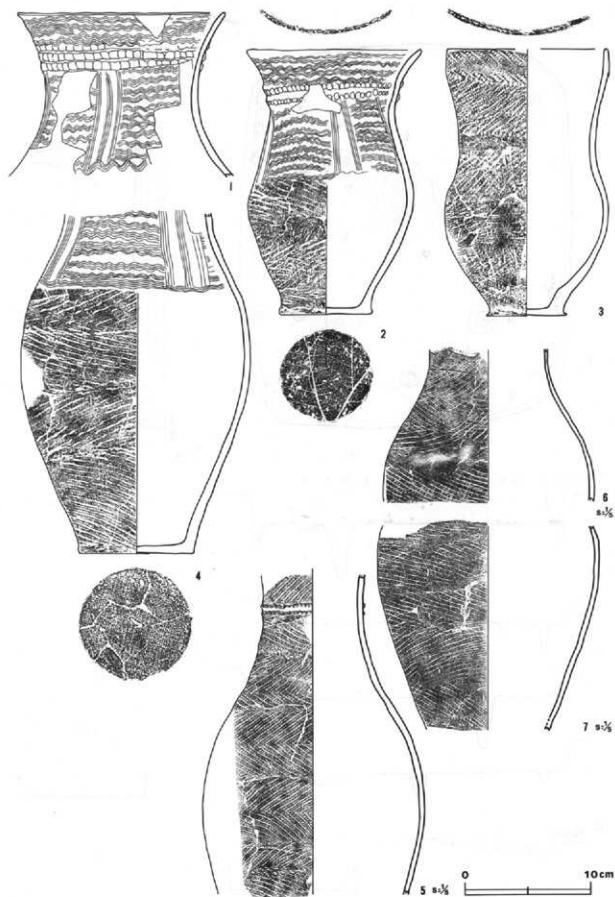
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・白色粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量、炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量、ローム中ブロック・焼土中ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・炭化物少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック少量、ローム大ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量、ローム大ブロック・焼土中ブロック・炭化物微量

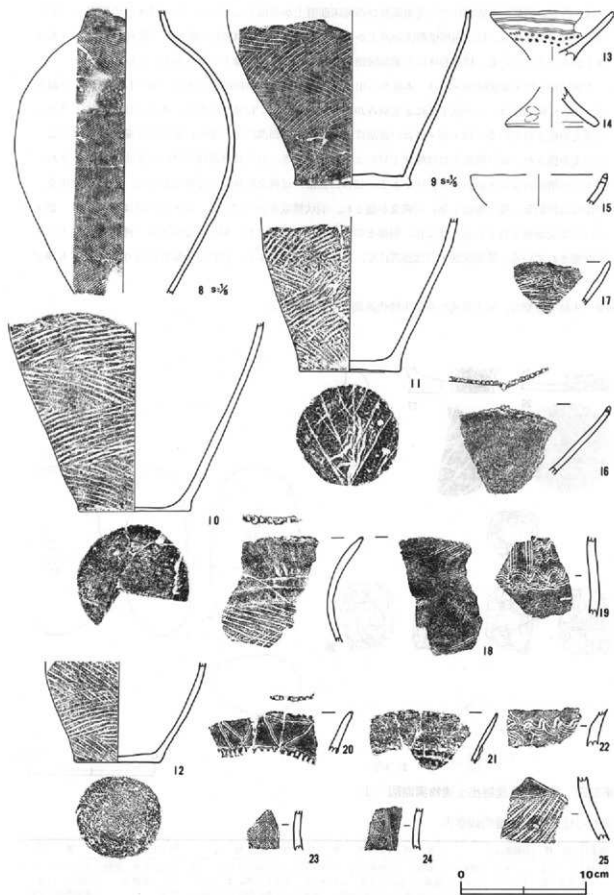
遺物 弥生土器片が約950点出土している。中央部は密度が低く、西部から多く出土している。第331号1~7・第341号8~12は弥生土器で、1・4は広口壺の口縁から底部片で、1は東部壁際覆土中層から、4は南部壁際床面直上から出土している。2・3の中形広口壺は、西部壁際床面直上から出土している。2~4は押しつぶされた状態で出土している。5~9は人形甕である。5~8は北部覆土下層から出土している。



第32图 第6号住居跡实测图



第33图 第6号住居跡出土遺物実測図(1)

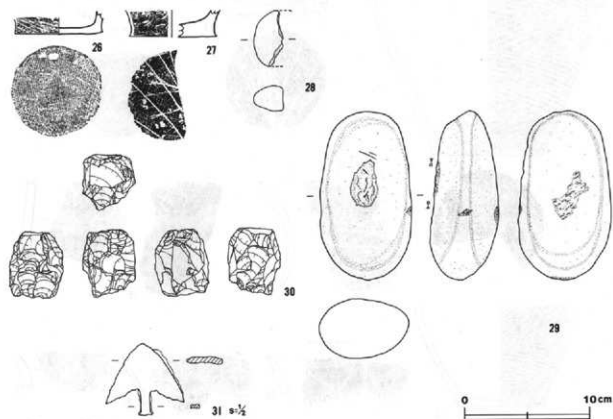


第34图 第6号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)

9は大形壺の胴部から底部片で、北東隅及び西部床面直上から出土している。10・11は壺の胴部から底部片で、10は南東隅から、11は南部壁際床面直上から出土している。第34図12の胴部から底部片は、南西部床面直上から出土している。13の高坏片と第35図28の紡錘車は、貯蔵穴覆土中から出土している。

第34図16～25・第35図26・27は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。16・17は高坏の口縁部片で、16の口唇部には、ヘラ状工具による刻みがあり突起をもつ。17は片口部で、外面には櫛歯状工具による波状文が施されている。18・20・21は口縁部片と口縁部から頸部片で、20の口縁部には櫛歯状工具による重山形文が施され、低い隆帯上には棒状工具による押圧がある。21には櫛歯状工具による波状文が施され、隆帯上には指頭によると思われる押圧がある。18の口唇部には縄文原体による押圧があり、口縁部は無文で、頸部には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。19・22～25は頸部片で、23・24には山形文が施されている。25には、胴部との境に籐状文が施され、胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。第35図26・27は底部片で、26には布目痕があり、27には木葉痕があり、初任痕も確認されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第35図 第6号住居跡出土遺物実測図(3)

第6号住居跡出土遺物観察表

図数番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	粘土・色調・構成	備考
第35図 1	広口壺 弥生土器	A 16.6 B (13.1) H 12.2	頸部から口縁部片。口唇部には、ヘラ状工具による刻みがある。口縁部には、櫛歯状工具による波状文が施され、頸部との境には、3条の隆帯が走り、指頭による押圧がある。頸部は、3条を単位に分割され、区画内には、波状文が施される。	長石、石英、雲母 に濃い黄褐色 普通	P59, 10% P.L15 外面スチ付着 東壁層覆土中腐

図号	図名	寸法(mm)	器形の特徴及び文様	原料・色調・構成	備考
第3回	広口壺 弥生土器	A 13.8	頸部から口縁部一帯欠損。口縁部には、縄文が施される。口縁部内面には、櫛歯状工具による波状文が施される。胴部との境には、2条の隆起が有り、櫛歯状工具による押圧がある。底部は、4分割され、3面内には常置状工具による波状文が施される。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。羽状構成をとる。	長石、石英、磁粒 砂粒 灰黄褐色 普通	P63, 80% P.115 外周側面直上 外面スス付着 底部縮小径付近 ・胴部最大径の 下の厚部。内面縮 小径十位から口縁部 に黒褐色のシミあり。
		B 21.5			
C 7.3					
H 9.9					
I 17.1					
3	ぶく壺 弥生土器	A 12.8	頸部から口縁部一帯欠損。口縁部には、縄文が施される。口縁部は複合口縁で、附加条二種（附加1条）の縄文が施される小帯を。段の下部には、櫛歯状工具による刺突がある。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。頸部下の帯には紐文帯があり、胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。	長石、石英、雲母 磁粒 ぶい黄褐色 普通	P64, 70% P.115 赤や紫褐色直上 外面スス付着。頸 部・胴部最大径の 下に厚部。内面 胴部から口縁部に 黒褐色のシミあり。
		B 21.3			
		C 6.4			
		H 11.9			
		I 17.0			
4	広口壺 弥生土器	B 27.0	頸部から口縁部欠損。胴部は、3条を単位に4分割され、縮小径内には、櫛歯状工具による波状文が施される。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。底部には有戸痕がある。	長石、石英、砂粒 小砂 普通	P66, 80% P.116 内周側面直上 外面スス付着
		C 9.3			
5	壺 弥生土器	I 5.2	頸部から口縁部一帯欠損。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。頸部には、櫛歯状工具による刺突がある。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒 小砂、ベニス ぶい黄褐色 普通	P66, 80% P.116 内周側面直上 外面スス付着
		B (42.3)			
H 17.2	I [29.4]				
6	広口壺 弥生土器	B (20.0)	頸部から胴部上半部片。胴部から胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒 小砂、ベニス ぶい黄褐色 普通	P57A, 80% P.116 北部腹直上 外面刺突
		I 28.2			
7	壺 弥生土器	B (27.0)	胴部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。羽状構成をとる。	長石、石英、磁粒 砂粒、小砂、スクリ ア ぶい黄褐色 普通	P67, 85% P.116 内白刺突
		I [28.2]			
第3回	大形壺 弥生土器	B (37.7)	胴部から胴部片。胴部から胴部には「く」の字状に立ち上がる。頸部には、櫛歯状工具による波状文が施される。胴部には、附加条二種（附加2条）の縄文が施される。羽状構成をとる。	長石、石英、磁粒 小砂、ベニス 緑 普通	P56, 60% P.117 北西側面直上 内面直上 外面直上 外面直上 外面直上
		I 29.1			
9	壺 弥生土器	B (23.1)	胴部から胴部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。羽状構成をとる。底部には有戸痕がある。	長石、石英、雲母 砂粒、スクリア ぶい黄褐色 普通	P58, 80% P.117 北東→南西側面直上 外面スス付着
		C 15.8			
10	壺 弥生土器	B (15.0)	胴部から胴部下半部片。胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施される。羽状構成をとる。底部には有戸痕がある。	長石、石英、雲母 砂粒、ベニス ぶい黄褐色 普通	P51, 30% P.118 赤や紫褐色直上 外面スス付着
		C 8.9			
11	壺 弥生土器	B (12.3)	胴部から胴部下半部片。胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施される。羽状構成をとる。底部には有戸痕がある。	長石、石英、雲母 砂粒、小砂 ぶい黄褐色 普通	P62, 20% P.116 南や東側面直上 外面スス付着
		C 8.0			
12	壺 弥生土器	B (8.0)	胴部から胴部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。羽状構成をとる。底部には、有戸痕がある。	長石、石英、雲母 砂粒 緑 普通	P65, 20% P.116 外面スス付着 南や東側面直上 胴部一帯厚部
		C 6.8			
13	高坏 弥生土器	A [10.1]	環部片。環部は外側して立ち上がる。外内には櫛歯状工具による横脊文が施される。その下に、竹管による刺突が施される。	長石、石英、雲母 針状 磁粒 ぶい黄褐色 普通	P68, 20% P.117 腹直上
		B (3.9)			
14	高坏 弥生土器	D [7.5]	環部。環部は「ハ」の字状に広がる。外内には有戸痕がある。	長石、石英 ぶい黄褐色 普通	P18, 10% P.117 南部腹直上
		E (3.2)			

図面番号	基座	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第24期 15	ミナチュア 土器 弥生土層	A[11.0] H[2.5]	口縁部片。白線飾は外巻して立ち上がる。内面ナデ。	長石、石英、黄母 に多い埋 當跡	PL12 P L17 南側段土中

図面番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第36期 20	紡錘車	4.4	(2.3)	2.0	—	(17.6)	40	貯蔵穴覆土中	D P12 P L27

図面番号	類別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第36期 29	磁石	13.4	7.2	6.5	744.4	100	砂岩	西側部床面	Q15 P L32
30	石核	5.3	4.3	4.2	107.3	100	黒曜石	覆土中	Q16 P L32

図面番号	類別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第36期 31	鉄鏝	(3.8)	4.1	0.4	(5.7)	95	東側覆土上層	M27 P L35

第7号住居跡(第36区)

位置 調査区中央部、D19区。

規模と平面形 長軸4.81m、短軸4.38mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-52°-W

壁 壁高は41cm～50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、竈の周囲から北東壁際にかけてと、出入口ピットの周囲が踏み固められ硬化している。

ピット 13か所(P₁～P₁₃)。P₁～P₄は長径33～52cm、短径27～46cmの楕円形で、深さが47～85cmの土柱穴と思われる。P₁・P₂の長径方向は住居跡の主軸方向に対して直角である。P₃は長径35cm、短径25cmの楕円形で、深さ45cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P₄～P₁₀は長径19～33cm、短径18～24cmの円形及び楕円形で、深さ28～45cmの壁柱穴と思われる。P₁₁はP₄の北東壁側にあり、直径23cmの円形で、深さ36cmの補助柱穴と思われる。

貯蔵穴 1か所。P₅の南側、南東壁際に設置され、半面形は長径57cm、短径46cmの楕円形で、床面を18cm程掘り込んでいる。底面は皿状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

炉 中央部から北西寄りに位置し、長径130cm、短径93cmの不整形楕円形で、床面を15cm程掘り窪めている。上面は攪乱されているため、覆土は、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒が少量、炭化物微量を含む黒褐色土の1層しか確認されなかった。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。

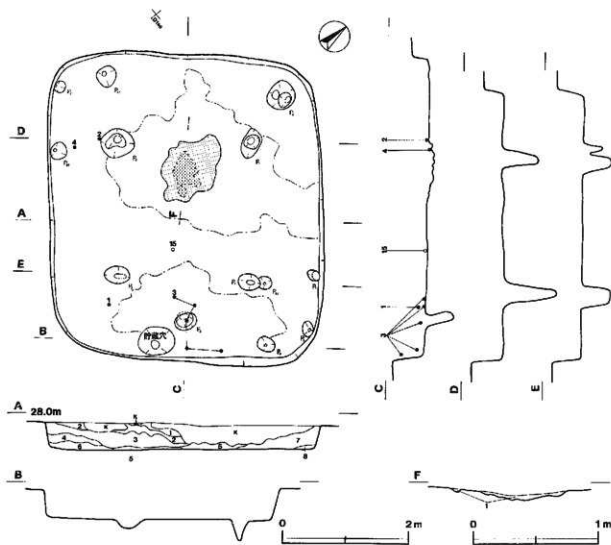
覆土 8層からなる。中央部から北部にかけて、床面直上まで達する大きな攪乱があり、正確には層位の様相はつかめない。壁際の覆土には、ロームブロックを含む黒褐色土がレンズ状に堆積していることから自然堆積であると思われる。

土層解説

- 1 黒 色 コーム粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒少量、炭化物・炭化粒子少量
- 2 黒 褐色 コーム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒少量、ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒 褐色 コーム小ブロック・ローム粒少量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・炭化物少量、焼土中・小ブロック・焼土粒少量・炭化粒子少量
- 4 黒 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・炭化物少量
- 5 黒 褐色 コーム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒・炭化物・炭化粒子少量
- 6 黒 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック少量、焼土粒・炭化物・炭化粒子少量
- 7 褐色 コーム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、焼土中・小ブロック・焼土粒少量、炭化物・炭化粒子少量
- 8 暗 褐色 コーム小ブロック・ローム粒少量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック少量、炭化物少量

遺物 弥生土器片が約380点出土している。ほとんどが胴部の細片で、口縁部・底部は微量である。第37図1～4は弥生土器壺で、1の口縁部片は南部から、3の胴部から底部片は南東部の覆土下層から出土している。2の胴部から底部片は、西部床面直上から押しつぶされた状態で出土している。4の台付壺は、西部壁床面直上から横位で出土している。15は紡錘車で、中央部床面直上から出土している。

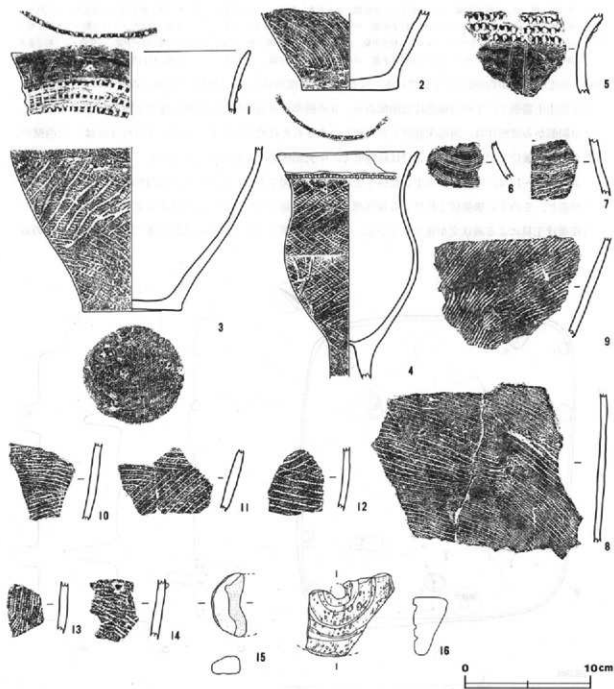
第37図5～14は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。5・6・7は頸部片で、5には3条の隆帯が回り、その下に櫛歯状工具による縦区画・波状文が施されている。6には逆弧文が施されている。7には櫛歯状工具による波状文が施されている。8～14は胴部片で、8～12には附加条二種（附加1条）の縄文



第36図 第7号住居跡実測図

が施されている。13には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。14には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、粒状の粘層が付く。

所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第37図 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	粘土・色調・組成	備考
1	広口壺 弥生土器	A: 19.0 B: 5.0	口縁部片。口唇部には、ヘラ状工具による刻みがある。口縁部は黒文で、腹部との境には、3本の縞帯が走り、棒状工具による凹凹がある。	長石、石英、砂粒、 小礫 にぶい黄褐色 普通	P66, 5% P.L17 内河原土下層
2	甕 弥生土器	B: 6.4 C: 7.7	底部から腹部下半部片。胴部には、附加条二種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒、 パミス にぶい黄褐色 普通	P68, 15% P.L17 西原床直上 外河原土付着
3	壺 弥生土器	B: 13.0 C: 7.9	底部から腹部下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には凹凹がある。	長石、石英、砂粒、 小礫、スコリア にぶい褐色 普通	P67, 20% P.L18 新東部壺土下層
4	台付壺 弥生土器	A: 11.4 B: 18.0 E: 2.5 H: 9.0 I: 10.6	台部、口縁部一帯欠損。口唇部には、縄文が施される。口縁部は無文で、写写との境には、縞帯が3条走り、縄文原体を強く押し出している。腹部から胸部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒、 小礫、スコリア 普通	P69, 70% P.L18 南西壁際床直上 外河原土付着

図版番号	器種	計測値(cm)			口径(cm)	重量(g)	保存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第38図 1a	紡輪	5.0	(2.7)	1.4		(18.7)	40	中央部断面直上	Q13 P.L27

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	保存率(%)	材質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第38図 1b	不明な器種	(3.5)	(3.3)	1.3	(2.2)	-	軽 G	壺中	Q17 P.L32

第10号住居跡 (第38図)

位置 調査区北東部, B4₀区。

規模と平面形 長軸(2.58)m, 短軸0.02mで、住居跡の南部は調査区外のため、平面形は不明である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は48~54cmで、わずかに外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが、軟弱なロームで炉の周辺にやや硬化した面がある。

ピット 13か所(P~P₁₃)。P₁とP₂は長径43~48cm, 短径約39cmの楕円形で、深さが77cmの主柱穴と思われる。P₄~P₁₀は直径16~33cm, 短径13~22cmの円形及び楕円形で、深さ28~46cmの柱杖穴と思われる。P₃は長径82cm, 短径55cmの不整形楕円形で、深さ25~27cmであるが、性格は不明である。

炉 P₁とP₂の間より南に位置し、長軸87cm, 短軸(43)cmで南部は調査区外のため、平面形は不明である。

床 面を15cm程度掘り窪めている。炉床は、火熱を受け赤変硬化している。覆土は2層で、焼土粒子・小ブロックを含んだ極暗褐色土である。

覆土 上層にはローム・焼土を含む黒褐色土が堆積し、下層にはロームを多量に含む暗褐色土がレンズ状に堆積する7層からなる自然堆積である。

土層構成

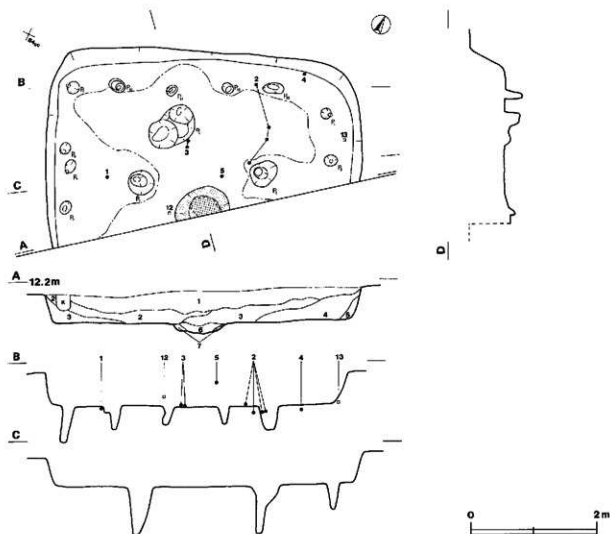
- 1 黒褐色 ローム粒中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 白色粒多量

- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭屑パリス粒少量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム大・中・小ブロック・粒子多量、炭化物微量
- 6 棕褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭屑パリス小ブロック少量
- 7 棕褐色 ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック少量、焼土粒微量 ※6・7層は砂の覆土

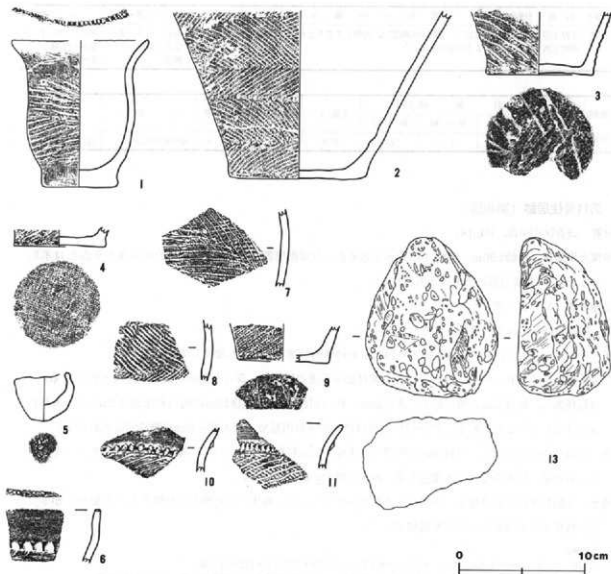
遺物 弥生土器片約250点が出土している。胴部の細片が多量で口縁部は少量である。第39区1～4は弥生土器壺で、1の小形壺は、南西部床面直上から横位で出土している。2～4の胴部から底部片は、2が北部、3が中央部、4が北隣の床面直上から出土している。5の手捏土器は、中央部覆土中層から正位で出土している。

第39区6～11は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。6・10・11は口縁部から頸部片で、6は接合口縁で、段の下には指頭による押圧がある。10の口縁部は無文で、頸部との境に隆帯が巡り、縄文原体による押圧がある。7・8は胴部片で、7には附加条二種（附加1条）、8には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。9は底部片で、外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、底部には木炭痕がある。

所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



第38図 第10号住居跡実測図



第39図 第10号住居跡出土遺物実測・拓影図

第10号住居跡出土遺物観察表

図番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	小形壺 弥生土器	A [10.9] B 11.8 C 5.9	口縁部一部欠損。口唇部にはへら状工具による刻みがある。口縁部は無文で、胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒 明赤褐色 普通	P77, 90% PL18 外面スス付着 南西部床面直上
2	壺 弥生土器	B (13.5) C 10.9	底部から胴部下半部片。平底で、底部から胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒 小礫、パミス 焼 普通	P74, 30% PL18 内面割離 北東部床面直上
3	壺 弥生土器	B (13.5) C 10.9	底部から胴部下半部片。平底で、底部から胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施される。底部には木葉痕がある。	長石、石英、砂粒 褐色 普通	P75, 10% PL18 中央部床面直上 外面スス付着
4	壺 弥生土器	B (1.6) C 7.3	底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がるものと思われる。胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。底部には布目痕がある。	長石、石英、砂粒 パミス にぶい黄褐色 普通	P76, 5% PL18 北東部床面直上

図番	器名	寸法(cm)	器形の特徴及び文様	陶土・佐剤・焼成	備考
第34図 5	手捏土器 吹土土器	A 4.3 B 3.8	丸底で、底面から胴部は、内側して立ち上がる。口縁部内面に指跡による圧痕がある。	灰石、石英、当母 にふい黄緑 普通	P78, 100% P.L18 底面稍圧痕 中央部腹土中層

図番	器名	寸法 (cm)			重量(g)	残存率(%)	土質	出土地点	備考
		最大径	最大幅	最大厚					
第39図 3	不明石器	6.4	5.4	3.7	(27.9)		砂子	東部壁裏内面	Q20 P.L32

第11号住居跡(第40図)

位置 調査区中央部, B4p区。

規模と平面形 長軸4.96m, 短軸(4.17)mであるが、北東部壁際が調査区外であるため正確な平面形は不明であるが、[隅丸長方形]であると思われる。

主軸方向 N-44°-W

壁 壁高は48~61cmで、垂直に立ち上がる。

床 平坦なルームで、竈の周囲と出入り口ピットの周囲が踏み固められ硬化している。

ピット 19か所(P₁~P₁₉)。P₁~P₄は直径20cm前後の円形で、深さが40cm前後の主井穴と思われる。P₅は長径20cm, 短径15cmの楕円形で、深さ30cm, P₆は長径15cm, 短径10cmの楕円形で深さ25cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。P₇~P₁₉は直径15~30cmの円形で、深さ25~30cmの樁柱穴と思われる。

竈 ほぞ中央部に位置し、直径90cmの円形で、床面を15cm程盛り窪めている。覆土は1層で、焼土、炭化物、ルームの他、灰を少量含む黒褐色土で、竈床は焼土の残存が少ない。

覆土 上層に黒色土が堆積し、中層から下層にかけてルーム、焼土、炭化物を含む黒色土と黒褐色土がレンズ状に堆積する6層からなる自然堆積である。

土層解説

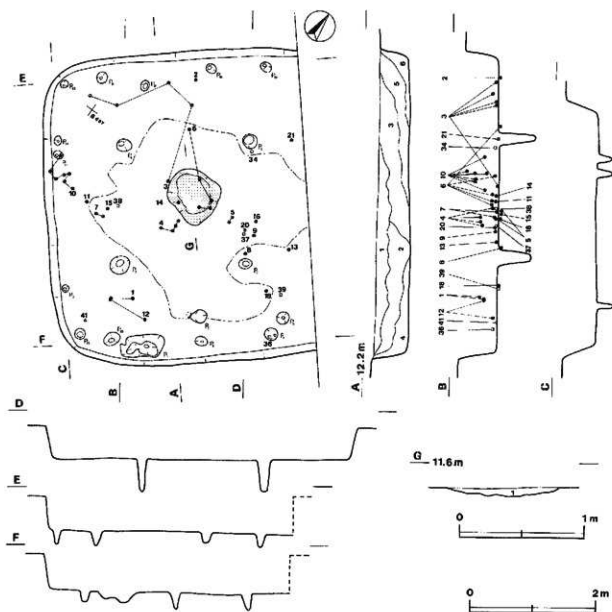
- 1 黒色 ルーム小ブロック・ルーム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・白色粒子少量
- 2 黒褐色 ルーム粒子中量, ルーム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・白色粒子少量, スコリア粒子極少
- 3 暗褐色 白色粒子中量, ルーム小ブロック・ルーム粒子・炭化物・炭化粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・スコリア粒子微量
- 4 黒色 ルーム粒子多量, ルーム小ブロック・炭化物少量, ルーム中ブロック・焼土粒子・スコリア粒下・白色粒下層
- 5 黒褐色 ルーム粒子多量, ルーム小ブロック・焼土粒子・白色粒子中量, ルーム中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量, ルーム大ブロック・焼土中ブロック・スコリア粒子少量
- 6 極暗褐色 ルーム粒子多量, ルーム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・スコリア粒子・白色粒子少量, ルーム中ブロック・炭化物・炭化粒子極少

遺物 弥生土器片が約1300点出土しているが、胴部細片が多量で、他の部位は少量である。第41図1~4・第42図5~17・第43図18~21は弥生土器で、1・10の口縁部から胴部片は、1が南部覆土中層から押しつぶされた状態で、10が南西壁際覆土中層から出土している。18の胴部下下部から底部は、東部床面直上から逆位で出土している。2の中形口蓋は完形で、北西壁際床面直上から横位で出土している。3・4の口縁部から胴部片は、3が西部覆土下層から出土している。4は中央部覆土中層から出土している。5~7の大口蓋口縁部から胴部片は、5・6が中央部覆土下層から、7が南西部床面直上から出土している。8の小形壺は東部床面直上から出土し、10の壺は西部壁際中層からつぶれた状態で出土している。18の底部は東部床面から逆位で出土している。

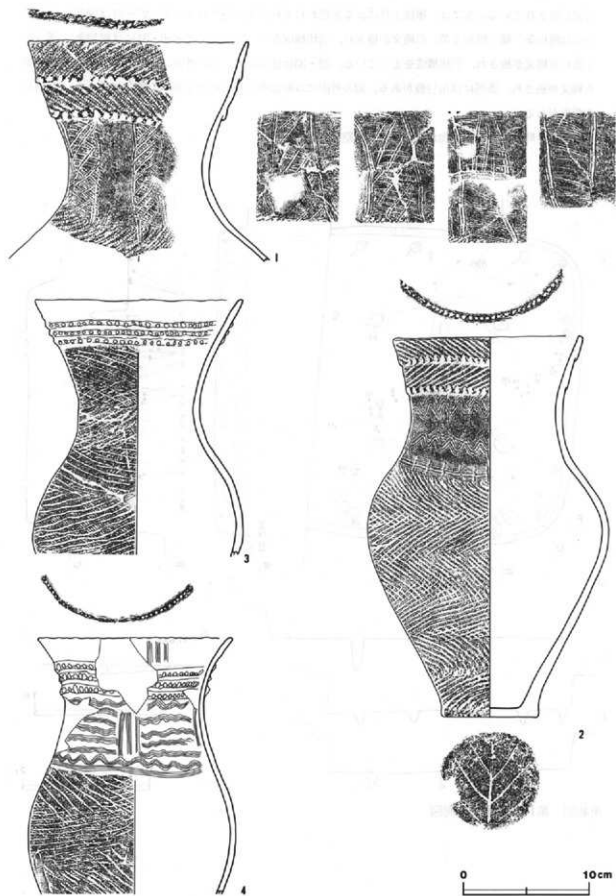
第43図22~33は、本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。22・23・24は口縁部片で、22は口縁部の無文帯を櫛歯状工具により縦区画している。23・24は口縁部に縄文が施され、口蓋部が無文でその下に隆帯が巡る。24の頸部には、粗い附加条二種(附加1条)の縄文が施されている。25・26は頸部片で、25には逆

弧文が施されている。26には、棒状工具によると思われる刺突文が施されている。27～31は胴部片で、27・29には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。28・30・31には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。32・33は底部片で、33の外面には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、底部には布目痕がある。32の外面には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、底部には木炭痕がある。

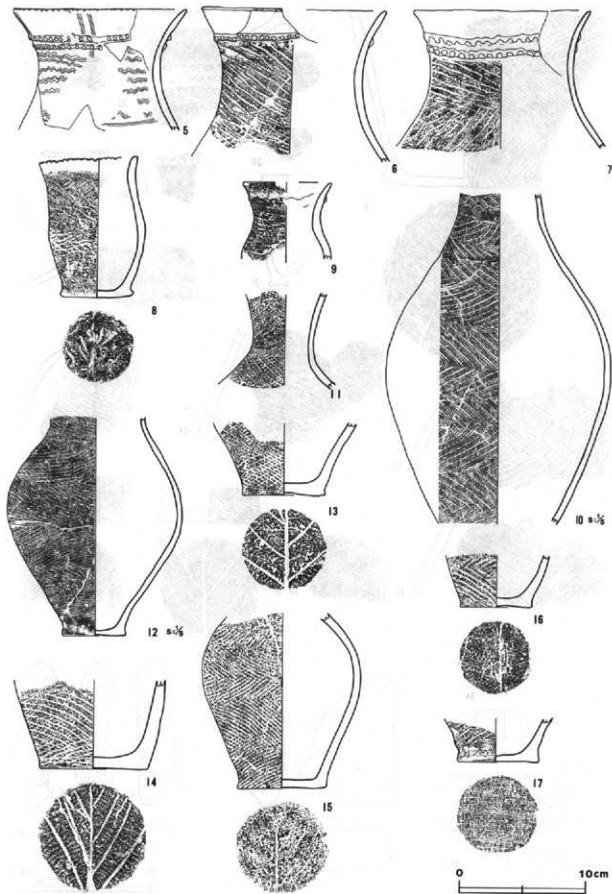
所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。



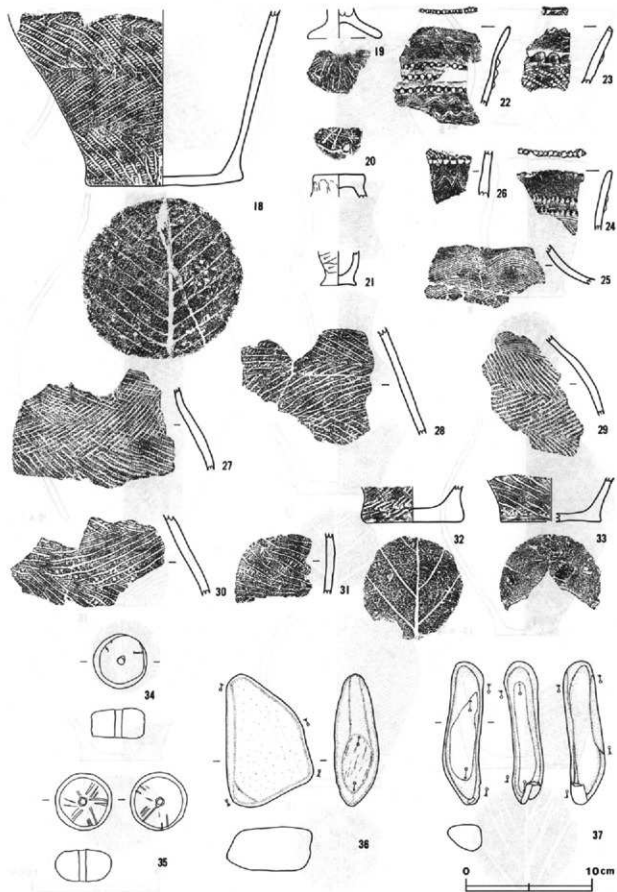
第40図 第11号住居跡実測図



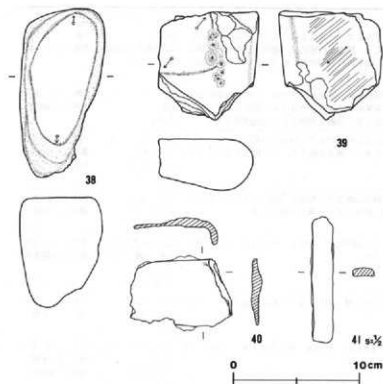
第41图 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第42图 第11号住居跡出土遺物実測図(2)



第43图 第11号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)



第44図 第11号住居跡出土遺物実測図(4)

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	広口壺 弥生土器	A 17.5 B (17.6) H 11.3	胴部上端から口縁部。口唇部には、縄文胴体による押圧がある。口縁部は2段の複合口縁で、附加条一種(附加2条)の縄文が施され、段の下端には縄文胴体による刺突がある。胴部は、へら状工具により6区画され、幅の狭い区画内には、格子状文と横走文が不規則に並んでいる。胴部には、附加条一種(附加2条)の縄文が施される。	長石・石英・雲母 砂粒 赤褐色 普通	P79, 20% P.L19 南部覆土中層
2	中形広口壺 弥生土器	A 15.2 B 30.4 C 7.8 H 12.2 I 19.3	口唇部には、棒状工具による押圧がある。2段の複合口縁で、附加条一種(附加2条)の縄文が施され、段の下端には、縄文胴体による押圧がある。胴部には、櫛状工具による波状文が2条施され、胴部との境には、簾状文が施される。胴部には、附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木炭痕がある。	長石・石英・砂粒 小礫 内ふい褐色 普通	P82, 96% P.L19 外面スス付着 北西壁跡床面直上 外面割断最大径の直下一部厚域 内面に黒褐色のシミ
3	広口壺 弥生土器	A 16.6 B (20.2)	胴部上半から口縁部片。口唇部には縄文が施される。口縁部は縄文で、頸部との境に、陰帯が3条走り、指頭とかわれる押圧がある。頸部から胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石・石英・雲母 砂粒 内ふい褐色 普通	P83, 30% P.L20 外面スス付着 西部覆土下層
4	広口壺 弥生土器	A (15.5) B (20.5)	胴部上半から口縁部片。口唇部には、棒状工具による押圧がある。口縁部は、櫛状工具により、3条を単位に区画される。頸部との境には、3条の陰帯が走り、棒状工具による押圧がある。頸部の上下端には波状文が1条走り、縦区画は3条を単位に5分割され、区画内には、櫛状工具による波状文が施される。胴部との境には、横走文が施され、胴部には、附加条二種(附加1条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石・石英・砂粒 にふい橙 普通	P84, 30% P.L20 中央部覆土中層 外面スス付着 内面に黒褐色のシミ
5	広口壺 弥生土器	A [13.9] B (9.6)	頸部から口縁部片。口唇部には、棒状工具による押圧がある。口縁部から胴部は3条を単位に分割される。頸部との境には、2条の陰帯が走り、棒状工具による押圧がある。頸部の区画内には、櫛状工具による波状文が施されている。	長石・石英・雲母 砂粒 にふい褐色 普通	P85, 15% P.L19 外面割断 中央部床面直上

図録番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徵及び文様	胎土・色面・泥成	備考	
第42図	6	広口蓋 弥生土器	A 12.01 B 11.6	底部から口縁部片。口縁部には、へら状工具によると見られる取みがある。口縁部外縁は横文で、頸部との境には、頸帯が1条走り、横文図様による浮彫がある。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施される。	長石、石英、バミス 赤褐色。黄砂 普通	P87, 15% P.L.9 中央部腹土下層
	7	広口蓋 弥生土器	A 14.0 B 11.3	頸部から口縁部片。口蓋部には、横文が施される。口縁部外面は横文で、頸部との境には、頸帯による浮彫がある。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施される。羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、 砂粒 普通	P88, 15% P.L.19 内西部床面直上
	8	小形蓋 弥生土器	A 7.9 B 5.8 C 5.8	口蓋部には、柄状工具による浮彫がある。口縁から頸部にかけては、短い附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、 小砂粒 赤褐色 普通	P102, 60% P.L.19 東部床面直上 外底スチ付着
	9	小形広口蓋 弥生土器	A (7.1) B (6.1)	頸部から口縁部片。口縁部は横文で、頸部との境には頸帯が1条走る。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施される。	長石、石英 赤い黄褐色 普通	P86, 5% P.L.21 東部覆土層
	10	大形広口蓋 弥生土器	A (4.0) I 30.0	頸部から口縁部片。頸部から頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、 砂粒、小砂粒、バミス 普通	P80, 60% P.L.20 内西部埋土中層
	11	広口蓋 弥生土器	B (7.6)	頸部片。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英 赤い黄褐色 普通	P97, 10% P.L.9 内西部床面直上
	12	広口蓋 弥生土器	H (29.0) C 8.5 I 23.2	頸部から口縁部欠片。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、 砂粒 赤褐色 普通	P92, 75% P.L.20 南部覆土下層 外底に黒褐色のシミ
	13	蓋 弥生土器	B (5.7) C 6.7	底部から頸部片。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、バミス 赤褐色 普通	P89, 16% P.L.20 東部床面直上
	14	蓋 弥生土器	B (7.1) C 8.1	底部から頸部下半部片。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、砂粒 赤い黄褐色 普通	P98, 18% P.L.20 中央部赤土直上 外底スチ付着
	15	広口蓋 弥生土器	A (14.0) C 7.1	頸部から口縁部欠片。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、 小砂粒、木砂 赤褐色 普通	P88, 80% P.L.20 内西部床面直上 外底スチ付着
	16	蓋 弥生土器	B (4.1) C 3.7	底部から頸部片。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、砂粒 赤い黄褐色 普通	P103, 16% P.L.21 東部床面直上
	17	蓋 弥生土器	B (3.5) C 6.4	底部片、外底には、附加条二種(附加1条)の横文が施されている。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、 赤褐色 普通	P101, 16% P.L.21 覆土中
第43図	18	大形広口蓋 弥生土器	B (4.0) C 12.5	底部から頸部下半部片。頸部には、附加条二種(附加1条)の横文が施され、羽状構成をとる。底部には木葉痕がある。	長石、石英、雲母、 小砂粒 赤褐色 普通	P81, 20% P.L.21 内西部赤土下層 東部床面直上
	19	高坏 弥生土器	D [6.0] E (2.5)	頸部片。頸部には、へら状工具による。底部には、横文が施される。	長石、石英、砂粒 赤い黄褐色 普通	P104, 20% P.L.21 砂土中
	20	蓋 弥生土器	F [4.1] G [1.9]	つまみ部片。上面には木葉痕がある。つまみ部には、柄状工具があり、磨面状工具により、造文される。	長石、石英、雲母、 砂粒 赤褐色 普通	P105, 10% P.L.21 東部覆土層 底部の土層生育
	21	ミニチュア 土器 弥生土器	B (2.8) C 2.8	底部から頸部片。頸部外面は、へら削り。	長石、石英、雲母 赤褐色 普通	P105, 40% P.L.21 上部床面直上

図録番号	器種	寸法値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	保存率 (%)	出土地点	備考	
		最大長	最大幅	最大厚						
第44図	34	洗輪皿	4.5	4.3	1.4	6.0	49.7	100	北野床面直上	D P 15 P.L.27
35	洗輪皿	4.5	4.7	2.6	6.0	57.5	100	東土上層	D P 16 P.L.27	

探検号	種別	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	石質	山上地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第43区 36	磨石	10.6	6.9	3.6	349.3	100	砂岩	南東部床面直上	Q23 P.L.33
37	磨石	11.4	3.3	2.1	127.0	100	砂岩	伊跡床面直上	Q24
第44区 38	磨石	(13.0)	6.6	8.8	(1093.5)	-	砂岩	南西部床面直上	Q22 P.L.32
39	凹石	(14.5)	(13.9)	6.8	(1923.1)	-	砂岩	東部床面直上	Q26 P.L.33

探検号	種別	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第45区 40	鉄鏝	(5.4)	4.0	0.5	(22.0)	10	黄土中	M28 P.L.36
41	不規則製品	6.6	1.2	0.5	(14.6)	-	附壁部床面	M29 P.L.35

第12号住居跡 (第45区)

位置 調査区南西部斜面, C33a区。

重複関係 第76号土坑が本跡の内部壁を掘り込み, 第77号土坑が伊跡の東部床面を, 第78号土坑が南西部の壁から床面を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.80m, 短軸4.53mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-22°E

壁 本跡は, 傾斜地で確認されており, 壁高は北部で20cm, 南部で85cmであり, 外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦であるが, 小さな凹凸があり, 南東部の出入り口ピットの付近が踏み固められ硬化している。

ピット 34か所 (P₁~P₃₄)。P₁~P₄は長径40~47cm, 短径32~34cmの楕円形で, 深さが52~65cmの柱穴と思われる。P₅は長径41cm, 短径32cmの楕円形で, 深さ48cmの出入り口施設に伴うピットと思われるが, 壁に近いこと, 壁高が高いところにあることから梯子状の構造物があったものと思われる。P₆~P₉は直径19~24cmの円形及び不整形楕円形で, 深さ35~40cmの補助柱穴と思われる。P₁₀~P₃₄は, P₁₀以外は壁際に不規則に配置され, 直径13~25cmの円形で, 深さ10~46cmの壁柱穴と思われる。P₃₃は直径20cmの円形で, 深さ15cmであるが性格は不明である。

炉 中央部から北西寄りにあり, 長径100cm, 短径90cmの楕円形で, 床面を20cm程掘り窪めている。か床は火熱を受け赤変硬化している。

伊上層解説

- 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量, 焼土中ブロック中量, ローム小ブロック・焼土大ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 焼土中ブロック微量
- 黒褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック・焼土粒中量, ローム中ブロック・焼土大ブロック少量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, ローム大ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 上層に黒色土が堆積し, 中層から下層にかけてローム・焼土を含む暗褐色土がレンズ状に堆積する13層からなる自然堆積である。

土層解説

- 黒色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 黒色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土粒微量
- 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子多量, ローム大・中・小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量, 焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック・焼土粒子少量

8	緑褐色	ローム粒多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒了・炭化粒了少量
9	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少
10	暗褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
11	褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、ローム大ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量
12	黒褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
13	黒褐色	焼土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量

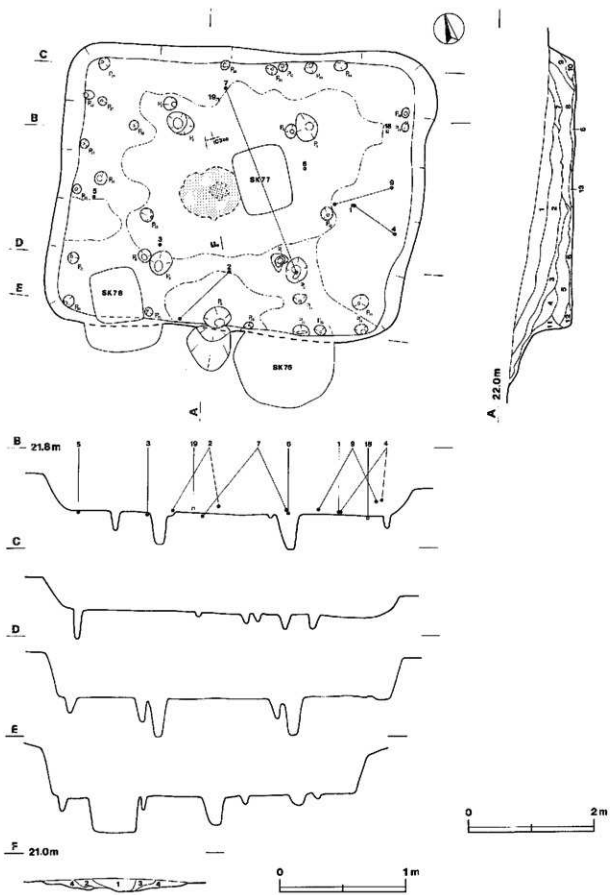
遺物 弥生土器片が約150点出土している。第46図1～9は弥生土器で、1～3は広口壺で、1の口縁部から胴部片は東部床面直上から出土している。2・3の口縁部から頸部片は、2が南部壁際、3が西部の床面直上から出土している。4の胴部片は南東壁際覆土下層から出土している。5～9は胴部から底部片で、5は西壁際床面直上からつぶれた状態で出土し、7は北部から東部にかけての広範囲に散在して出土している。8は覆土中から、6は東部床面直上、9は東部覆土下層から出土している。

第47図の13～17は、本跡から出土した弥生土器片の拓形図である。13は頸部片で、縦区画内に櫛歯状工具による波状文が施されている。14・15は頸部から胴部片で、14の頸部と胴部の境には櫛歯状文が施され、胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。16・17は胴部片で、16には附加条二種（附加1条）、17には附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

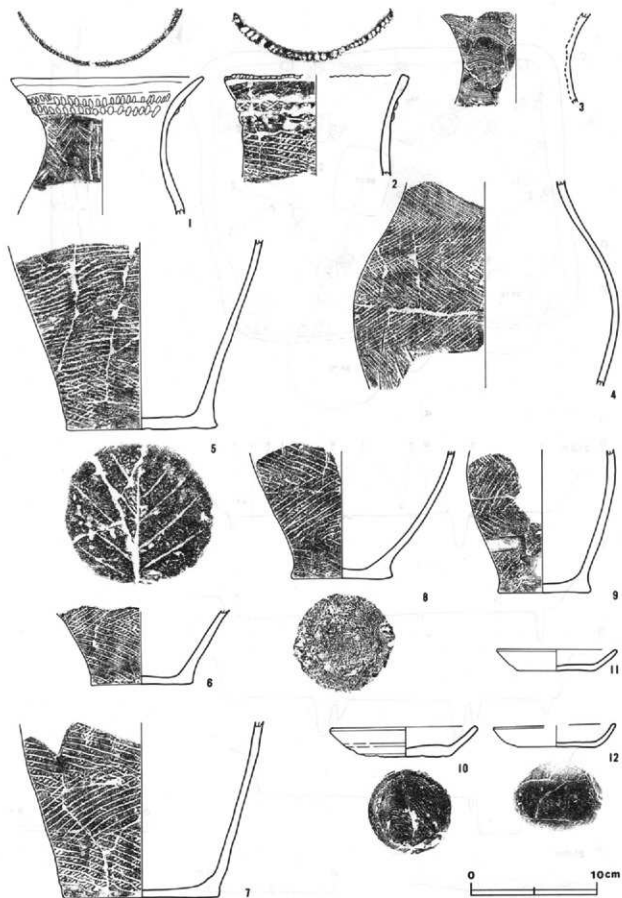
所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

第12号住居跡出土遺物観察表

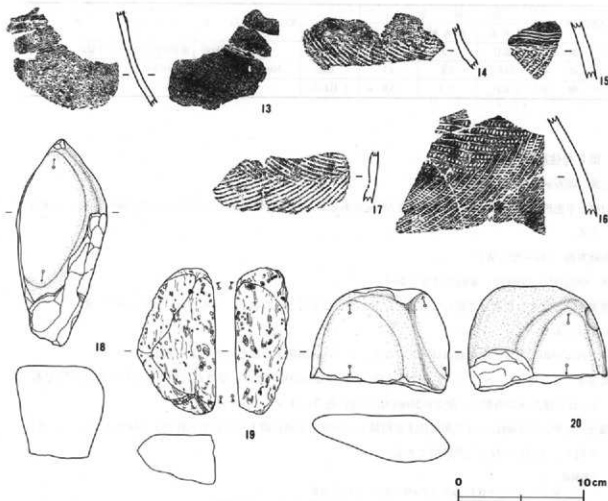
図号	科 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	粘土・色調・形成	備 考
1	広口壺 弥生土器	A : 5.4	胴部上半から口縁部片。口唇部には、縄文が施される。口唇部は無文で、輪縁がある。頸部との境には、2条の附加条が回り、胴部上には、櫛歯状工具による押圧がある。胴部は、4条を単位に6分割され、区画内には、市面土具による山形文が、狭い区画には1列、広い区画には2列、施されている。胴部との境には、櫛歯状工具による横走文が施され、胴部には、附加条一種（附加2条）の縄文が施される。	長石、石英、雲母、砂粒、炭褐色 普通	P107、20% P121 東部床面直上 内面に黒褐色のシミ
		B(11.9) H 9.6			
2	広口壺 弥生土器	A(14.7) C 8.0	胴部から口縁部片。口唇部には、縄文断片による押圧がある。口唇部は無文で、下縁には隆起が2突出する。胴部上には、指圧による押圧があり、一部に縄文が施される。頸部には、附加条一種（附加1条）の縄文が施される。	長石、石英、雲母、砂粒 におい黄褐色 普通	P108、10% P121 南東壁際覆土・層外面スチ付着
		B(7.0)			
3	広口壺 弥生土器	B(7.0)	胴部片。頸部には、櫛歯状工具による波状文が施される。	長石、石英、小礫、砂 普通	P109、6% 内面付着 西部覆土下層
4	広口壺 弥生土器	H(16.4) I 21.2	胴部片。胴部には、附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、小礫、砂粒 におい黄褐色 普通	P110、15% P122 外面スチ付着 南東壁際覆土下層
5	壺 弥生土器	B(14.9) C 12.0	底部から胴下半部片。胴部には、附加条一種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。胴部には木炭層がある。	長石、石英、砂粒 におい黄褐色 普通	P111、20% P122 底面に櫛歯状 西壁際覆土下層 外面スチ付着
6	壺 弥生土器	B(6.8) C 8.2	底部から胴部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母 におい黄褐色 普通	P114、20% P121 東部床面直上
7	壺 弥生土器	H(14.0) C 12.2	底部から胴下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、雲母、砂粒 におい黄褐色 普通	P113、20% P122 北部から南東部
8	壺 弥生土器	H(10.0) C 8.0	底部から胴下半部片。胴部には、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底部には木炭層がある。	長石、石英、砂粒 におい黄褐色 普通	P112、20% P121 覆土中



第45图 第12号住居跡実測図



第46图 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第47図 第12号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	粘土・色調・焼成	備考
第46図 9	壺 弥生土器	B (11.4) C 7.4	底部から胴下半部片。胴部には、附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	長石、石英、砂粒にふい橙 普通	P115、20% P L22 東部覆土下層

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第46図 10	皿 土師質土器	A 11.8 B 2.4 C 6.6	口縁部一部欠損。平底で、底部から外傾して立ち上がる。	体部内外面横ナデ。底部回転糸切り。	長石、石英、雲母、パミスにふい橙 普通	P116、80% P L32 覆土中
11	皿 土師質土器	A 9.1 B 1.7 C 6.2	口縁部、底部一部欠損。平底で、底部から外傾して立ち上がる。	体部内外面横ナデ。底部回転糸切り。ナデ整形。	長石、石英にふい橙 普通	P117、70% P L22 覆土中
12	皿 土師質土器	A [9.8] B 1.9 C 6.0	底部から口縁部片。平底で、底部から、内彎ぎみに立ち上がる。	体部内外面横ナデ。底部回転糸切り。	長石、石英、雲母にふい橙 普通	P118、40% P L22 覆土中

図記号	種別	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
平均値	磨石	(16.4)	(7.2)	(7.4)	(128.8)	—	硬質砂岩	東部塚内直上	Q26
19	砥石	11.6	5.2	4.1	63.2	100	硬石	北部穴直上	Q27 P.L.38
20	磨石	(8.3)	11.1	3.9	(413.5)	—	砂岩	覆土中	Q28 P.L.33

第8号住居跡 (第48図)

位置 調査区北東部, B4a区。

規模と平面形 長軸 (3.98)m, 短軸 (2.53)mであるが, 南西部が調査区外であるため正確な平面形は不明である。

主軸方向 [N 22° W]

壁 壁高は50cm前後で, 垂直に立ち上がる。

壁溝 確認された壁溝は連続しており, 全周しているものと思われる。上幅15cm, 下幅5cmで, 断面は「J」字状である。

床 はほぼ平坦である。硬化面はほとんどなく, ロームと黒色土の混じった貼床である。

ピット 2か所 (P₁ ~ P₂)。P₁は長径47cm, 短径38cmの楕円形で, 深さが42cmであるが性格は不明である。

P₂は直径26cmの円形で, 深さが25cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。

覆土 上層から中層にかけて黒褐色土が堆積し, 中央部下層に炭土を含む暗赤褐色土の層がある。レンズ状に堆積する8層からなる自然堆積である。

土器解説

- 黒褐色 ローム・焼土・炭化粒子少量, 焼沼パミス粒子少量
- 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量, 焼沼パミス粒子微量
- 黒褐色 焼土・炭化粒子中量, ローム粒子・炭化物少量
- 黒色 炭化粒子中量, 焼土粒子・炭化物少量, ローム粒子微量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼一粒子・焼沼パミス粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物微量
- 暗赤褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・焼土小ブロック中量, ローム中・小ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼沼パミス粒子少量, 焼沼パミス小ブロック微量
- 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼沼パミス粒子少量, 炭化粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子・焼沼パミス粒子少量, ローム小ブロック・焼沼パミス小ブロック中量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・焼沼パミス中ブロック少量

遺物 土師器片が8点, 遺物包含層からの流れ込みと思われる弥生土器片, 縄文土器片が約120点出土している。

第48図1~3は土師器環で, 1は環の口縁部から底部の破片で, 2・3は環の口縁部片で, いずれも中央部覆土下層から出土している。4の支脚は, 中央部覆土下層から出土している。

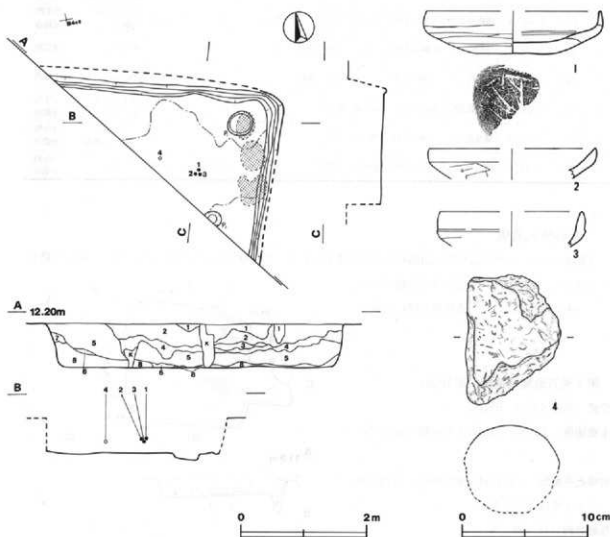
所見 本跡の時期は, 出土遺物から古墳時代後期と思われる。

第8号住居跡出土遺物観察表

図記号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色澤・焼成	備考
第48図 1	土師器 環	A [15.8]	底形から口縁部片。平底。底形から外反り立ち上がり, 口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	体形側面, 内面, へく磨き。口縁部外反り, 内面, 横ナデ。底部木炭灰。	灰石, 石英, 磁母に多い黄色音滴	P70, 25% P.L.17 中央部覆土下層
		B 3.3				
		C [6.0]				
2	土師器 環	A [13.4]	体部から口縁部片。体部から口縁部は内反り立ち上がる。	体部外面, へく磨り。口縁部内面横ナデ。内面黒色焼成。	灰石, 雲母, 炭屑は微量	P71, 5% P.L.17 中央部覆土下層
		B (2.3)				

図番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土質・色調・焼成	備考
第48図 3	环 土 師 器	A[11.4] B(2.8)	体部から口縁部片。体部との境に線 をもち、口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石、石英、雲母 に濃い褐色 普通	P72、5% P L17 中央部覆土下層

図番号	種別	計 測 値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第48図 4	支 脚	(10.4)	(7.6)	(7.6)	(482.9)	—	覆土中	DP14, 中央部覆土下層



第48図 第8号住居跡出土遺物実測図

表3 大畑遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設			出入口	炉	壁土	出土遺物	備考	
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴 ドット						
1	C2a	N-37°-W	隅丸長方形	4.46×4.0	6~54	平坦	-	4	-	8	1	炉	自然	弥生土器・ 紡錘車・磁石	弥生時代 後期後半
2	D3a	[N-33°-E]	[隅丸方形]	5.60×(1.94)	34~54	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	弥生土器	弥生時代 後期後半
3	D2a	N-55°-E	隅丸方形	6.68×6.38	18~68	平坦	-	4	-	26	1	炉	自然	弥生土器・ 紡錘車・土製勾	弥生時代 後期後半
4	D2a	N-43°-W	隅丸方形	6.72×6.12	48~64	平坦	-	4	-	21	1	炉	自然	弥生土器・ 紡錘車・磁石	弥生時代 後期後半
5	D1a	N-19°-E	隅丸長方形	5.19×4.96	45~53	平坦	-	4	1	17	1	炉	自然	弥生土器・ 紡錘車	弥生時代 後期後半
6	D1a	N-66°-W	隅丸長方形	6.10×5.32	44~55	平坦	-	4	-	15	1	炉	自然	弥生土器・ 鉄鏃・紡錘車	弥生時代 後期後半
7	D1a	N-52°-W	隅丸長方形	4.81×4.38	41~50	平坦	-	4	-	9	1	炉	自然	弥生土器・ 紡錘車	弥生時代 後期後半
8	B4a	N-22°-E	[隅丸方形]	(3.98)×(2.53)	55	平坦	[全周]	2	-	-	-	-	-	縄文土器	縄文時代
9	B4a	N-15°-W	楕円形	8.18×(7.65)	-	平坦	[全周]	-	-	18	-	-	自然	土師器	古墳時代
10	B4a	N-24°-W	[隅丸長方形]	(2.58)×5.02	48~54	平坦	-	2	-	11	-	炉	自然	弥生土器・ 手型土器	弥生時代 後期後半
11	B4a	N-44°-W	隅丸長方形	4.96×4.17	48~61	平坦	-	4	-	14	1	炉	自然	弥生土器・ 鉄鏃・紡錘車	弥生時代 後期後半
12	C3a	N-22°-E	隅丸長方形	4.53×5.80	30~70	平坦	-	4	-	29	1	炉	自然	弥生土器	弥生時代 後期後半

2 方形竅穴遺構

当遺跡からは、中世の方形竅穴遺構が4基検出されている。当初は土坑として扱っていたが、調査の結果、柱穴や出入り口施設等から方形竅穴遺構であることが確認された。以下、遺構番号順に記載する。

第1号方形竅穴遺構 (第49図)

位置 調査区北部、B3a区。

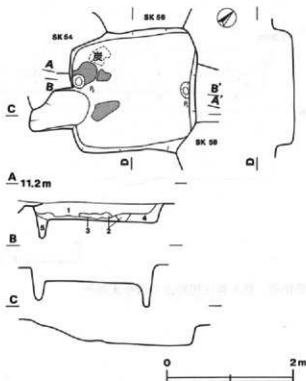
重複関係 本跡を、第54号土坑が掘り込んでいる。

規模と平面形 平面形は長軸2.68m、短軸1.99mの不整長方形である。

長軸方向 N-59°-W

出入り口施設 南壁中央部から南に向かって壁外に約65cm突出し、底面から確認面に至る長さ約80cm、幅65cmの緩傾斜面を持った出入り口を有している。斜面上は平坦で硬くしまっている。

壁 壁高30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第49図 第1号方形竅穴遺構実測図

底面 平坦で硬くしまっている。西部から炭化材が散乱して出土している。

ピット 2か所 (P₁～P₂)。P₁は長径23cm、短径19cmの楕円形で、深さが30cm、P₂は長径24cm、短径16cmの楕円形で、深さが35cmである。いずれも柱穴であると思われる。

覆土 5層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭屑・炭灰少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 3 褐色 ローム大・中ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム粒中量、ローム小ブロック・粘土大ブロック少量
- 5 褐色 ローム大ブロック・ローム粒中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量

所見 本跡は、出土遺物がなく不明な点があるが、形状から中世の方形竪穴遺構であると思われる。

第2号方形竪穴遺構 (第50図)

位置 調査区北部、E3_南区。

重複関係 本跡は、第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と平面形 北西部が調査区外であるため正確な平面形は不明であるが、長軸2.09m、短軸(1.62)mの「長方形」と思われる。

長軸方向 N-45°-E

壁 壁高16cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦で硬くしまっている。南東部の床面から炭化材が散乱して出土している。

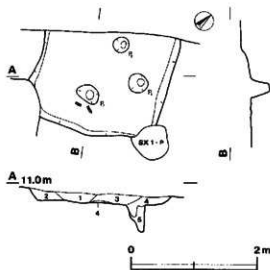
ピット 3か所 (P₁～P₃)。P₁は長径32cm、短径30cmの楕円形、P₂は長径38cm、短径25cmの楕円形、P₃は長径22cm、短径19cmの楕円形である。いずれも深さが30cm前後の柱穴であると思われる。

覆土 5層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大・中ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化物少量、焼土粒子微量
- 5 明褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量

所見 本跡は、出土遺物がなく不明な点があるが、形状から中世の方形竪穴遺構であると思われる。



第50図 第2号方形竪穴遺構実測図

第3号方形竪穴遺構 (第51図)

位置 調査区北部、A4_南区。

重複関係 本跡が、第63号土坑を掘り込んでいる。第4号方形竪穴遺構との重複関係は、第1号不明遺構に伴うピットにより攪乱され不明である。

規模と平面形 重複により正確な平面形は不明であるが、長軸2.83m、短軸(1.80)mの「長方形」と思われる。

長軸方向 N-44°-E

壁 壁高25cmで、外傾して立ち上がる。

底面 平坦で硬くしまっている。

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁は長径23cm、短径14cmの楕円形で、P₂は長径22cm、短径17cmの楕円形で、それぞれ深さが30cm程である。いずれも井穴であると思われる

覆土 4層からなる人為堆積である。(第51図A土層図)

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック・炭化物・黒色土ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・黒色土ブロック・粘土ブロック・炭泥・ミス粒子少量、焼土粒子・黒色土大ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭泥・ミス粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量、黒色土ブロック少量

遺物 覆土中から流れ込みと思われる弥生土器片が1点出土している。第52図1は、弥生土器片の拓影図である。壺の頸部で、縦区画内に縦状文が施され、胴部との境に下向きの連弧文が施されている。

所見 本跡は、時期を特定できる出土遺物がなく不明点があるが、形状から中世の方形竪穴遺構であると思われる。

第4号方形竪穴遺構 (第51図)

位置 調査区北部、B4区。

重複関係 本跡が、第61号土坑を掘り込んでいる。第3号方形竪穴遺構との新旧関係は第1号不明遺構に伴うピットによる攪乱のため不明である。

規模と平面形 平面形は長軸2.50m、短軸1.87mの長方形である。

長軸方向 N 46° E

壁 壁高20cmで、外傾して立ち上がる。

底面 平気で硬くしまっている。

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁は長径43cm、短径36cmの楕円形で、深さが30cm、P₂は長径45cm、短径33cmの楕円形で、深さが33cmである。いずれも井穴であると思われる。

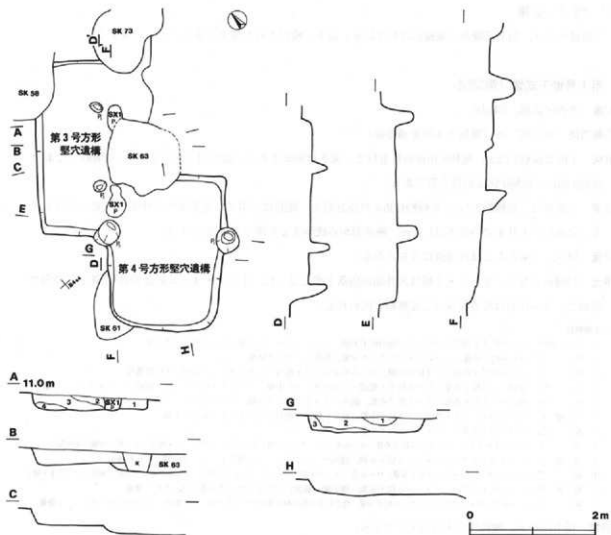
覆土 3層からなる人為堆積である。(第51図G土層図)

土層解説

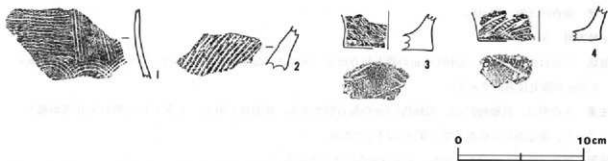
- 1 褐色 ローム大・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・炭泥・ミス粒子中量、黒色土中ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・炭泥・ミス粒子・スコリア少量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物・炭泥・ミス粒子少量

遺物 覆土中から流れ込みと思われる弥生土器片が3点出土している。第52図2～4は弥生土器片の拓影図である。2は壺の胴部片で、附加条1番(附加2条)の縄文が施される。3・4は底部片で、附加条2種(附加1条)の状文が施され、胴部には木葉痕がある。

所見 本跡は、時期を特定できる出土遺物がなく不明点があるが、形状から中世の方形竪穴遺構であると思われる。



第51图 第3·4号方形竖穴遗构实测图



第52图 第3·4号方形竖穴遗构出土遗物拓影图

3 地下式墳

当遺跡からは、地下式墳が2基検出されている。以下、検出された地下式墳について記載する。

第1号地下式墳（第53図）

位置 調査区北部、B4a3区。

主軸方向 N-45°-W（堅坑と主室を通る線）

堅坑 上面は長軸1.02m、短軸0.76mの長方形で、深さは98cmである。底面は主室に向かって傾斜しており、長軸0.85m、短軸0.56mの長方形である。

主室 平面形は、長軸約3.2m、短軸約1.95mの長方形で、底面は平坦で、北東部の天井部の一部が残存している。底面から天井までの高さは1.12m、確認面から底面までの深さは1.3mである。

壁面 堅坑、主室ともにほぼ垂直に立ち上がる。

覆土 12層からなり、2・6・7層は大井部の崩落土層と見られ、1・3・4・5層は天井部崩落後の自然堆積層で、8～12層は埋め戻しによる堆積と思われる。

土層解説

- 1 におい褐色 コーム粒子・炭屑小ブロック・炭屑粘土多量、ローム小ブロック・陶器大・中ブロック少量
- 2 桜色 ローム粒子少量、ローム大・小ブロック少量、黒色土ブロック少量
- 3 桜色 ローム粒子・炭屑バミス粒子中量、ローム小ブロック・炭屑バミス小ブロック少量、炭化物少量
- 4 褐色 炭屑バミス粒子多量、ローム粒子・炭屑バミス小ブロック中量、ローム中・小ブロック・炭屑バミス大ブロック少量
- 5 褐色 炭屑バミス粒子中量、ローム粒子中量、炭屑バミス小ブロック少量、ローム小ブロック少量
- 6 明褐色 ローム小ブロック・炭屑バミス粒子中量、ローム粒子・炭屑バミス中・小ブロック少量
- 7 桜色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 8 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック・炭化物・炭屑バミス小ブロック・炭屑バミス粒子少量、炭屑量
- 9 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、炭屑バミス小ブロック・黒色土ブロック少量、炭化物少量
- 10 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、ローム大ブロック・炭屑バミス中ブロック少量、炭屑バミス粒子・炭屑量
- 11 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、炭屑少量、炭屑バミス小ブロック・炭屑バミス粒子少量
- 12 桜色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量、炭屑少量、炭屑バミス小ブロック・炭屑バミス粒子・炭屑小ブロック少量

遺物 覆土中から、陶器片が1点出土している。

所見 本跡は、時期を特定できる出土遺物がなく不明な点があるが、形状から中世の地下式墳と思われる。

第2号地下式墳（第53図）

位置 調査区北部、R3a区。

主軸方向 N-27°-E

堅坑 上面は長軸1.33m、短軸0.87mの隅丸長方形で、深さは78cmである。底面は平坦で、長軸0.92m、短軸0.73mの隅丸長方形である。

主室 平面形は、長軸約2.5m、短軸約1.7mの長方形である。底面は平坦で、主室入り口部の天井部が残存している。確認面から底面までの深さは2.1mである。

壁面 堅坑は外傾して立ち上がり、主室は垂直に立ち上がる。

覆土 13層からなる人為堆積である。8・9層のロームブロックはハードロームである。10層は粘土層で、あ

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・炭屑粒子少量、炭屑バミス大・中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭屑粒子少量、炭屑粒子・炭化物・黒色土ブロック・炭屑量

3	黒褐色	ローム段が多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
4	黒褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子・白色粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム大・中ブロック・焼土粒子・礫少量
6	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック・炭化粒子・礫少量、焼土粒子微量
7	暗褐色	ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・焼沼ベミス粒子・礫微量
8	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量、炭化粒子・焼沼ベミス小ブロック微量
9	褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、ローム大ブロック・小礫少量、炭化物・炭化粒子・粘土大ブロック微量
10	褐色	焼沼ベミス粒子多量、白色粒子少量
11	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量、焼沼ベミス大・小ブロック・白色粒子少量、炭化物・粘土大ブロック微量
12	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼沼ベミス粒子少量、ローム大ブロック・焼沼ベミス大ブロック微量
13	褐色	ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・焼沼ベミス大ブロック・焼沼ベミス粒多量、焼沼ベミス小ブロック中量、焼沼ベミス中ブロック・礫微量

所見 本跡は、出土遺物がなく不明な点があるが、形状から中世の地下式墳であると思われる。

第1号地下式横出土遺物観察表

階別	深 度	計測値(m)	断面の 特徴	手法の 特徴	胎土・色調・炭灰	備 考
第3段	横	B(7.6)	体部片。体部は外環して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。	灰白色	P139, 5% P.L.2 墓土中
1	開 掘				青濁	P.L.2 墓土中

4 井 戸

当道跡からは、中・近世に構築された井戸が2基検出されている。以下、遺構番号順に記載する。

第1号井戸（第54区）

位置 調査区北部、A4-s区。

規模と形状 掘り方は、上面が径約4mの円形をしており、確認面から約2mの深さまでは傾斜状に傾斜し、そこから下は円筒形をしている。

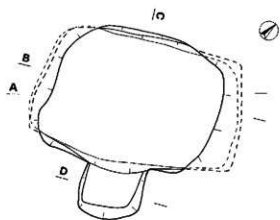
覆土 18層からなり、1～3層は自然堆積である。4～18層は、埋め戻しによると思われる人為堆積である。

土層解説

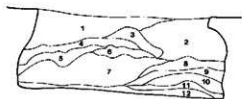
1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・礫少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・灰・焼沼ベミス微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼沼ベミス粒子少量、焼土粒子・炭化物・小礫微量
3	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・礫・焼沼ベミス粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子・礫少量、炭化物微量
5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・礫少量、炭化物微量
6	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・小礫少量、焼土粒子・炭化粒子微量
7	褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・小礫少量、炭化物微量
8	黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物少量、炭十粒了・炭化粒了微量
9	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック中量
10	黒褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物・礫微量
11	暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化物・小礫微量
12	褐色	ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
13	黒褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・焼沼ベミスブロック少量、焼土小ブロック・小礫微量
14	褐色	ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・砂粒中量、ローム大ブロック・小礫少量
15	明黄褐色	砂粒多量、小礫中量、炭化物微量
16	黒褐色	砂粒・小礫多量、ローム大ブロック中量
17	褐色	砂粒多量、礫少量
18	褐色	砂粒多量、ローム大ブロック中量、礫少量

遺物 第4・5層から、内耳編（第55～62区1～16）が16点出土している。いずれも外面に多量のススが付着し、投棄されたようにつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は、出土遺物から15世紀後半の井戸と思われる。埋め戻し土層の上層から、ほぼ完形にもどる内耳編が、一括して数多く出土している点特徴的である。



A 12.0m



B



C



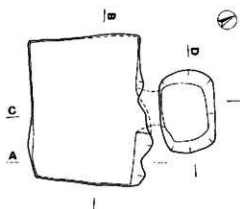
D



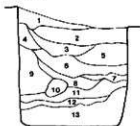
第1号地下式塚



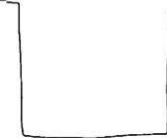
0 10cm



A 14.8m



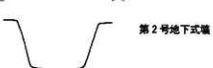
B



C 13.4m



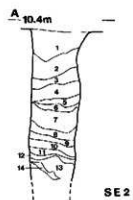
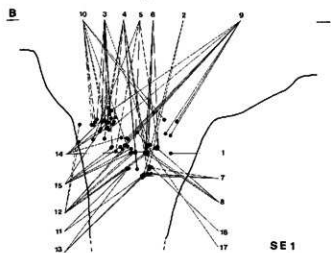
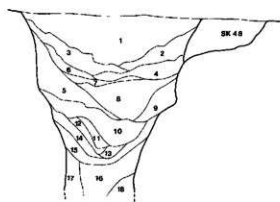
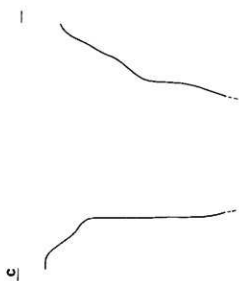
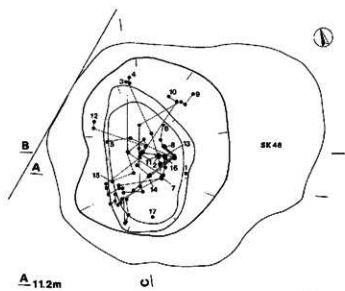
D



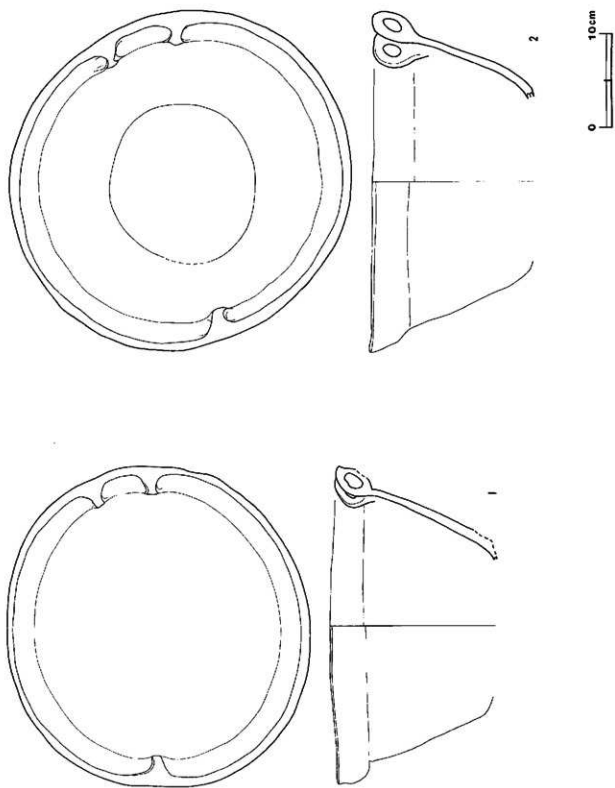
第2号地下式塚

0 2m

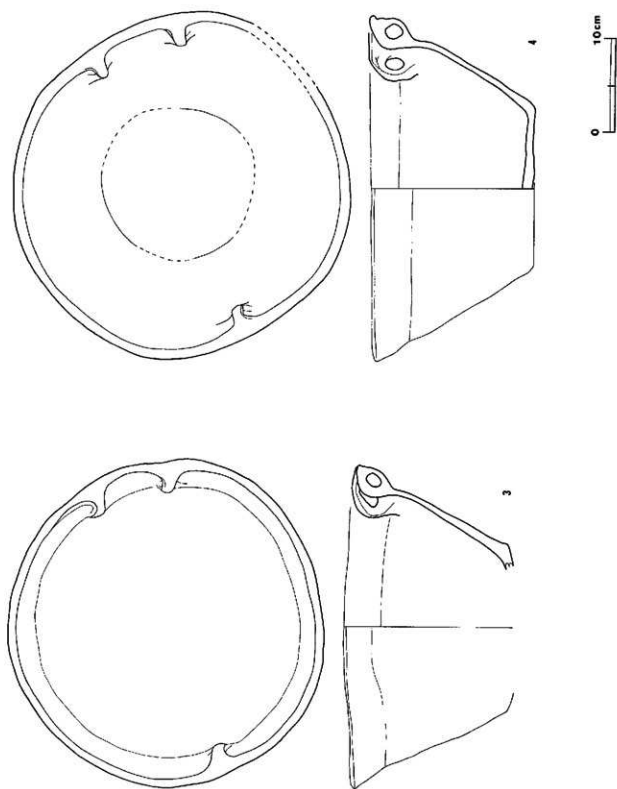
第53图 第1・2号地下式塚・出土遺物実測図



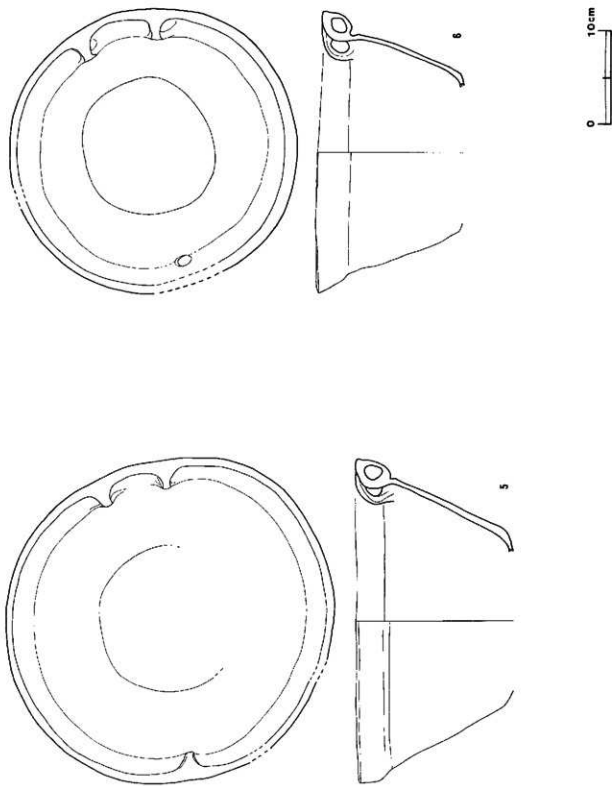
第54图 第1・2号井戸実測図



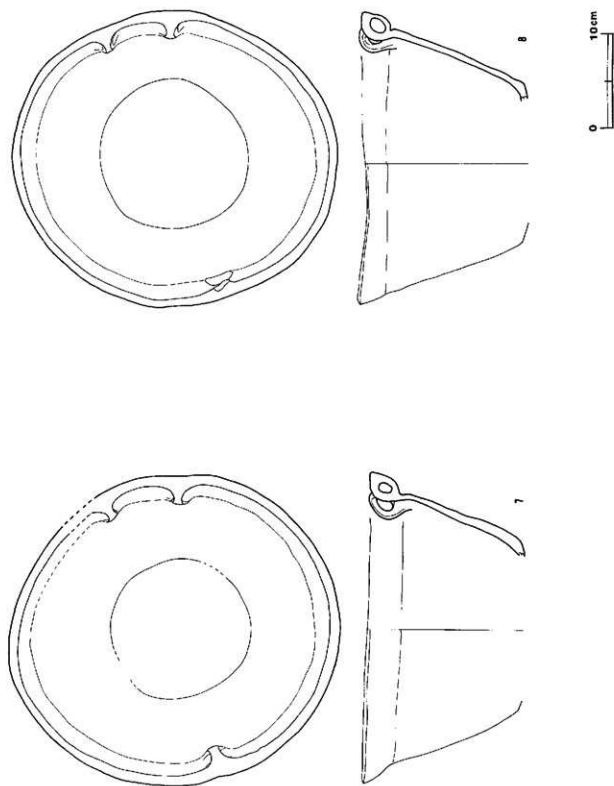
第55图 第1号并戸出土遺物実測図(1)



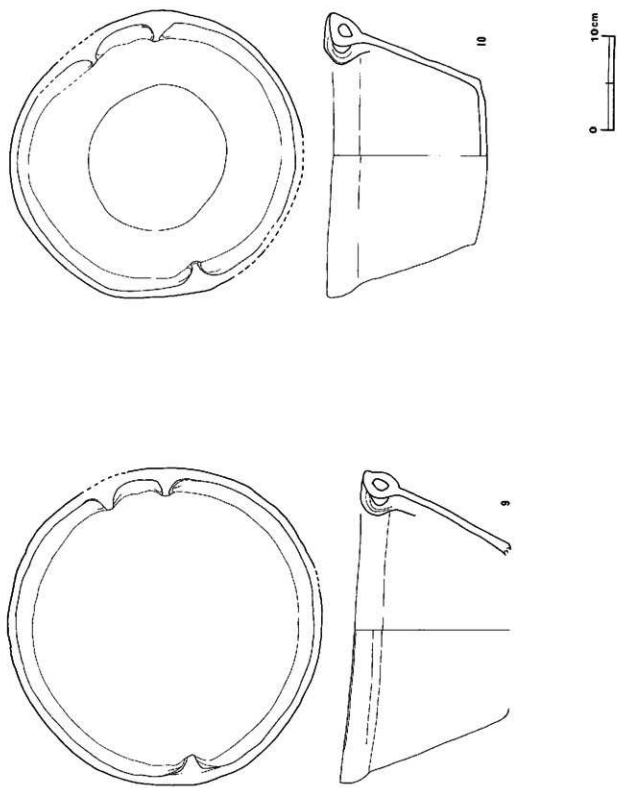
第56图 第1号井戸出土遺物実測図(2)



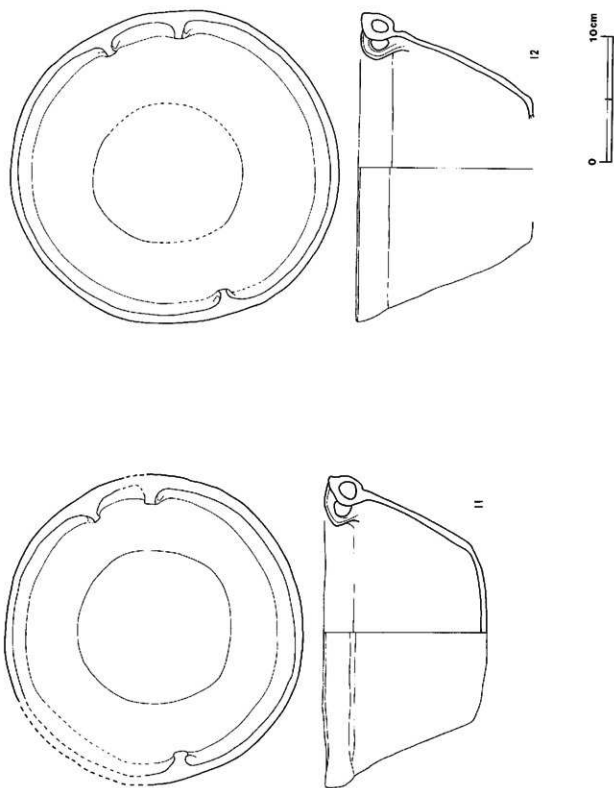
第57图 第1号井戸出土遺物実測図(3)



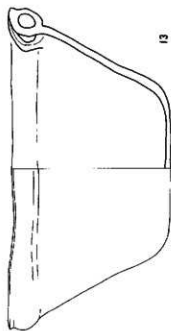
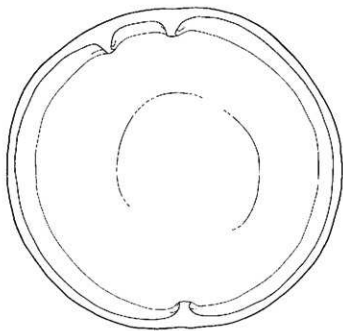
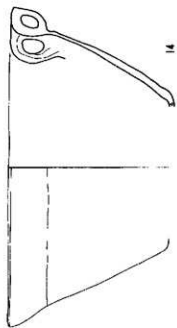
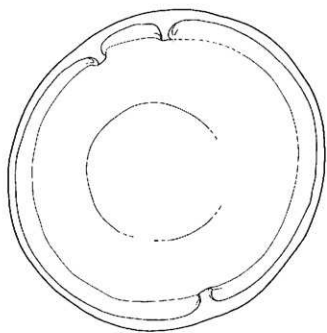
第58图 第1号井戸出土遺物実測図(4)



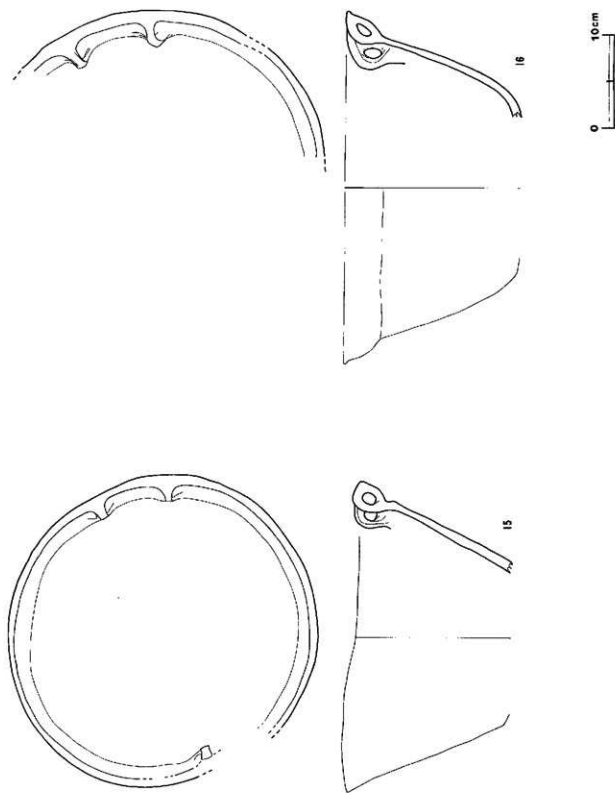
第59图 第1号井戸出土物実測図(5)



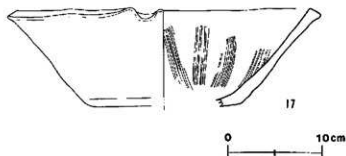
第60图 第1号井戸出土物实测图(6)



第61图 第1号井戸出土遺物実測図(7)



第62図 第1号井戸出土遺物実測図(8)



第63図 第1号井戸出土遺物実測図(9)

第1号井戸出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	写形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
第55図	内耳輪 土胎質土器	A 34.0 B (17.8) C [18.8]	底部欠損。体部はわずかに内傾しながら外傾して立ち上がる。三方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英 にぶい褐色 普通	P122, 90% P L23 外面スス付着 内面下流黒褐色のシミ 覆土中層
2	内耳輪 土胎質土器	A 36.0 B (17.2) C [19.1]	口縁部内。体部は直線的に外傾し、口縁部は「く」の字状に外反する。三方に耳が付く。	体部・口縁内・ 外面ナデ。	石英、砂粒、 スクリア にぶい褐色 普通	P123, 80% P L23 外面スス付着 内面下流黒褐色のシミ 覆土中層
第56図	内耳輪 土胎質土器	A 34.3 B 17.8 C 17.7	底部欠損。体部はわずかに内傾しながら外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母 にぶい褐色 普通	P124, 85% P L23 外面スス付着 内面下流黒褐色のシミ 覆土中層
4	内耳輪 土胎質土器	A 36.8 H 19.0 C 16.8	平底で、体部は内傾しながら外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。三方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、雲母、 スクリア にぶい褐色 普通	P125, 80% P L23 外面スス付着 底面内面黒褐色のシミ 覆土中層
第57図	内耳輪 土胎質土器	A 34.5 B 16.7 C 18.7	底部欠損。体部は内傾気味に外傾して立ち上がり、口縁部は大きく「く」の字状に外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母 にぶい褐色 普通	P126, 85% P L23 外面スス付着 内面下流黒褐色のシミ 覆土中層
6	内耳輪 土胎質土器	A 30.0 B 15.1 C 16.4	底部・耳1か所欠損。体部は内傾気味に外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内・外面ナデ。	長石、石英 にぶい褐色 普通	P127, 80% P L23 外面スス付着 内面下流黒褐色のシミ 覆土中層
第58図	内耳輪 土胎質土器	A 33.0 B (16.7) C 17.7	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母 にぶい褐色 普通	P128, 80% P L23 外面スス付着 内面下流黒褐色のシミ 覆土中層
8	内耳輪 土胎質土器	A 31.0 B 18.0 C 16.9	丸底気味で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。三方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母 にぶい褐色 普通	P129, 90% P L23 外面スス付着 体部内面黒褐色のシミ 覆土中層
第59図	内耳輪 土胎質土器	A 33.1 B (18.1) C 18.4	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英 にぶい褐色 普通	P130, 80% P L24 外面スス付着・一部剥離 内面下流黒褐色のシミ 覆土中層
10	内耳輪 土胎質土器	A 30.4 B 16.5 C 17.5	平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母 にぶい褐色 普通	P131, 85% P L24 外面スス付着・一部剥離 内面下流黒褐色のシミ 覆土中層

図録番号	発 掘	計測値(m)	造 形 の 特 徴	手法の特徴	粘土・色調・結成	備 考
第42図	内 耳 鏡 十層貫土器	A 35.0 B 17.6 C 19.0	丸底気味で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母 多い赤褐色 普通	P132、70% P L24 外面スス付着 覆土中層
12	内 耳 鏡 十層貫土器	A 33.0 B (18.5) C 15.81	底部欠損。体部は内寄気味に外傾して立ち上がる。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母 多い黄褐色 普通	P133、60% P L24 外面スス付着 覆土中層
第43図	内 耳 鏡 十層貫土器	A 34.2 B 17.3 C [18.2]	丸底気味で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、雲母 褐色 普通	P134、65% P L24 外面スス付着 覆土中層
14	内 耳 鏡 十層貫土器	A 34.0 B (17.5) C [17.3]	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がる。三方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、雲母 多い褐色 普通	P138、65% P L24 外面スス付着 内位下層黒褐色のシミ 覆土中層
第44図	内 耳 鏡 十層貫土器	A 33.0 B (17.6) C 17.3	底部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部に張り出しを持つ。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英 褐色 普通	P138、75% P L24 外面スス付着 内位下層黒褐色のシミ 覆土中層
16	内 耳 鏡 十層貫土器	A 37.6 B (18.7) C [18.0]	体部から口縁部片。体部は内寄気味に外傾して立ち上がる。口縁部に張り出しを持つ。二方に耳が付く。	体部内・外面ナデ。	長石、石英 多い褐色 普通	P137、40% P L24 外面スス付着 内位下層黒褐色のシミ 覆土中層
第45図	罎 鉢 十層貫土器	A 33.3 B 10.2 C (16.1)	体部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に張り出しを持つ。	体部外面ナデ。内面に 5本単位の横筋が施さ れる。	長石、石英、雲母、 スコリア 褐色 普通	P138、30% P L22 覆土中層

第2号井戸（第54区）

位置 調査区北部、A4a区。

規模と形状 掘り方は、径93cmの円筒形で、深さは、地盤が軟弱なため底面まで掘り下げることができなかったが、確認面から2.5mまで掘り下げ、その下はボーリングステッキで調べたところ約85cmで底面になるものとと思われる。

覆土 14層からなる人為堆積である。

土層解説

- 黒褐色 ローム粒多量、ローム中・小ブロック多量、ローム大ブロック・粘土粒子、炭化物、骨、粘土ブロック、焼瓦バリス少量、粘土大ブロック少量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒多量、ローム中ブロック・硬・焼瓦バリス中量、ローム大ブロック・炭化物バリス小ブロック少量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒多量、ローム大・中ブロック・焼瓦バリス小ブロック少量、粘土粒子・粘土小ブロック少量
- 黒褐色 ローム山ブロック・ローム粒多量、ローム小ブロック・硬中量、ローム大ブロック・焼瓦バリス小ブロック、硬瓦バリス小ブロック少量
- 黒褐色 ローム粒多量、ローム中・小ブロック・硬・炭化物バリス粒子少量、焼瓦バリス小ブロック少量
- 黒褐色 ローム小ブロック・硬少量、粘土中ブロック・黒褐色十六大ブロック少量
- 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒多量、硬少量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒中量、ローム中ブロック少量、硬少量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒少量
- 明褐色 砂多量、ローム粒少量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒多量、ローム中ブロック・硬中量
- 明褐色 硬中量、ローム・焼瓦バリス粒子少量
- 黒褐色 ローム粒多量、ローム中・小ブロック少量
- 黒褐色 硬多量、ローム粒中量、焼瓦バリス粒子少量

遺物 覆土中から、流れ込みと思われる上師質IIIの底部片と動物骨片1点が出土している。

所見 本跡の時期は、底面まで掘り下げられていないことや、時期を特定できる遺物が出土していないことから不明である。

5 土 坑

当遺跡からは、土坑が91基検出されている。ここでは、時期・性格が推定できる主なものを記述し、他は一覧表に記載する。

第9-A号土坑（第64図）

位置 調査区北部、A4a区。

重複関係 本跡を第8号溝が掘り込んでいる。第9-B号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 平面形は長軸（2.74）m、短軸2.50mの【長方形】と思われ、深さは18cmである。

長軸方向 [N-51°-W]

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる自然堆積である。

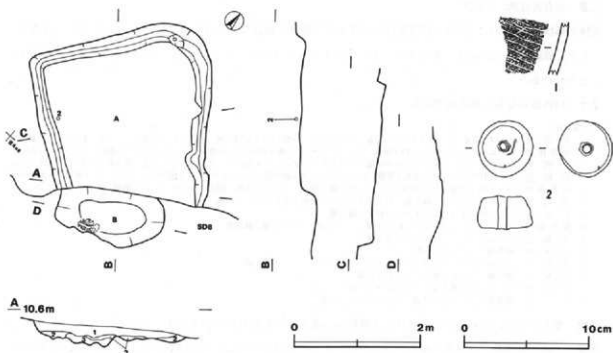
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、鹿沼パミス・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック少量
- 3 明褐色 ローム大ブロック多量、ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子微量

遺物 覆土中から流れ込みと思われる弥生土器片1点・紡錘車1点が出土しているほか、馬骨が覆土中から出土している。

第64図1は本跡から出土した弥生土器片の拓影図である。壺の胴部片で、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。

所見 本跡の時期は、時期を特定できる出土遺物がなため不明である。また、性格も不明であるが、隣接する第9-B号土坑からも馬の骨が出土していることから、本跡と何らかの関連があると思われる。



第64図 第9-A・B号土坑実測・拓影図

第9-B号土坑 (第64図)

位置 調査区北部, B4a区。

重複関係 本跡が第8号溝を掘り込んでいる。第9-A号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 平面形は長径1.70m, 短径0.88mの楕円形で、深さは18cmである。

長径方向 N 59°-E

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状でやわらかい。

遺物 底面から馬の頭骨が横に寝かせたような状態で出土している。

所見 本跡の時期は、時期を特定できる出土遺物がなため不明である。また、性格も不明であるが、隣接する第9-A号土坑からも馬の骨が出土していることから、本跡と何らかの関連があると思われる。

第11号土坑 (第65図)

位置 調査区北部, B4a区。

規模と平面形 円形は長径1.08m, 短径0.68mの楕円形で、深さは60cmである。

長径方向 N-69°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦で、硬くしまっている。

覆土 4層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・白色粒子少量、ローム小ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、黒色土ブロック微量
- 3 暗褐色 灰少量、ローム粒子微量
- 4 褐色 黄土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量(灰層)

遺物 覆土中から馬の歯が1点出土している。

所見 本跡の時期や性格は不明である。

第19号土坑 (第65図)

位置 調査区北部, B4a区。

規模と平面形 平面形は長軸0.94m, 短軸0.68mの長方形で、深さは60cmである。

長軸方向 N-50°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦でやわらかい。

覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼沼パミス少量
- 2 暗褐色 焼沼パミス中量、黒色土ブロック微量
- 3 黒色 焼沼パミス少量、ローム粒子少量

所見 本跡からは出土遺物がないうが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第20-A号土坑（第65図）

位置 調査区北部，B4a区。

重複関係 本跡を第20-B号土坑が掘り込んでいる。

規模と平面形 長径0.92m、短径（0.29）mで、南東部が調査区外のため正確な平面形は不明である。深さは72cmである。

長径方向 N-55°-W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 皿状でしまりのある鹿沼土である。

覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック・鹿沼ベミス中・小ブロック中量、ローム大ブロック・炭化物少量、赤土小ブロック・粘土粒子・燐等量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼ベミス粒子多量、ローム大・中ブロック少量、鹿沼ベミス小ブロック少量、炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・鹿沼ベミスブロック・鹿沼ベミス粒子多量、ローム大ブロック少量

所見 本跡からは出土遺物がないが、第1号地下式竈及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第20-B号土坑（第65図）

位置 調査区北部，B4a区。

重複関係 本跡が第20-A号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 平面形は長軸1.02m、短軸0.78mの長方形で、深さは78cmである。

長軸方向 N-45°-W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦でしまりのある鹿沼土である。

覆土 1層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 鹿沼ベミス少量、ローム小ブロック・ローム粒子少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式竈及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第23号土坑（第65図）

位置 調査区北部，第1号地下式竈の北東，B4a区。

規模と平面形 平面形は長軸2.00m、短軸1.14mの隅丸長方形で、深さは41cmである。

長軸方向 N-46°-E

壁面 外傾して立ち上がり、北西部は垂直に立ち上がる。

底面 平坦でしまりのある鹿沼土である。

覆土 1層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子・鹿沼ベミス中量、ローム中ブロック少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳に隣接している配置からみて、中世の墓塚の可能性がある。

第24号土坑（第65図）

位置 調査区北部，第1号地下式墳の北西，B4a区。

規模と平面形 平面形は長軸1.00m，短軸0.68mの不整長方形で，深さは19cmである。

長軸方向 N-64°-E

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状でしまりのある鹿沼土である。

覆土 1層からなる人為堆積である。

土層解説

1 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳に隣接している配置からみて、中世の墓塚の可能性がある。

第25号土坑（第65図）

位置 調査区北部，第1号地下式墳の北部，B4a区。

規模と平面形 平面形は，上面では長軸0.99m，短軸0.70mの不定形であるが，確認面から20cm程下からは長軸0.70m，短軸0.45mの長方形である。深さは45cmである。

長軸方向 N-71°-W

壁面 真面から垂直に立ち上がり，上面では外傾して立ち上がる。

底面 平坦でしまりのある鹿沼土である。

覆土 2層からなる人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量，黒色土ブロック数層

2 褐色 ローム粒子・暗褐色土ブロック中位，鹿沼パミス少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳に隣接している配置からみて、中世の墓塚の可能性がある。

第26号土坑（第65図）

位置 調査区北部，第1号地下式墳の北西部，B4a区。

規模と平面形 平面形は長軸0.81m，短軸0.59mの長方形で，深さは44cmである。

長軸方向 N-47°-W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦でしまりのある鹿沼土である。

覆土 1層からなる人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量，ローム小ブロック数層

遺物 覆土中から内耳銅片が1点出土している。

所見 本跡からは時期を特定できる出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳に隣接している配置からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第27号土坑（第65図）

位置 調査区北部、第1号地下式墳の西側、B4a区。

規模と平面形 平面形は長軸2.09m、短軸1.03mの不定形で、深さは32～37cmである。

長軸方向 N-39° W

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状でしまりのある鹿沼土である。

覆土 2層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 地 色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス中量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・黒色土ブロック散見
2 樹 色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・鹿沼パミス少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳に隣接している配置からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第28-A号土坑（第65図）

位置 調査区北部、B4a区。

規模と平面形 平面形は長軸1.01m、短軸0.69mの不整長方形で、深さは20cmである。

長軸方向 N-34° E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦でやわらかい。

覆土 1層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 樹 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第28-B号土坑（第65図）

位置 調査区北部、B4a区。

規模と平面形 平面形は長軸0.86m、短軸0.63mの不整長方形で、深さは37cmである。

長軸方向 N-34° E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦でやわらかい。

覆土 1層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 樹 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第29号土坑（第65図）

位置 調査区北部，B4₂区。

規模と平面形 平面形は長軸0.97m，短軸0.70mの不整長方形で，深さは81cmである。

長軸方向 N-62° W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦でやわらかい。

覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量，鹿沼パミス多量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・黒色テフラック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量，鹿沼パミス微量

遺物 覆土中から陶器・内耳椀・土師器坏片が出土している。

所見 本跡は，第1号地下式竈及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の墓塚の可能性はある。

第43号土坑（第66図）

位置 調査区北部，B4₄区。

規模と平面形 平面形は長軸2.36m，短軸1.08mの隅丸長方形で，深さは21cmである。

長軸方向 N-47° E

壁面 底面から外傾して立ち上がり，上面は耕作により削平されている。

底面 平坦でやわらかい。

覆土 2層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量，鹿沼パミスブロック中量，炭化物微量
- 2 明褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量，鹿沼パミスブロック・鹿沼パミス粒子少量

所見 本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式竈及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の系塚の可能性はある。

第44号土坑（第66図）

位置 調査区北部，B4₃区。

規模と平面形 平面形は長径1.47m，短径1.13mの不整楕円形で，深さは53～58cmである。

長径方向 N-42° W

壁面 垂直に立ち上がる。

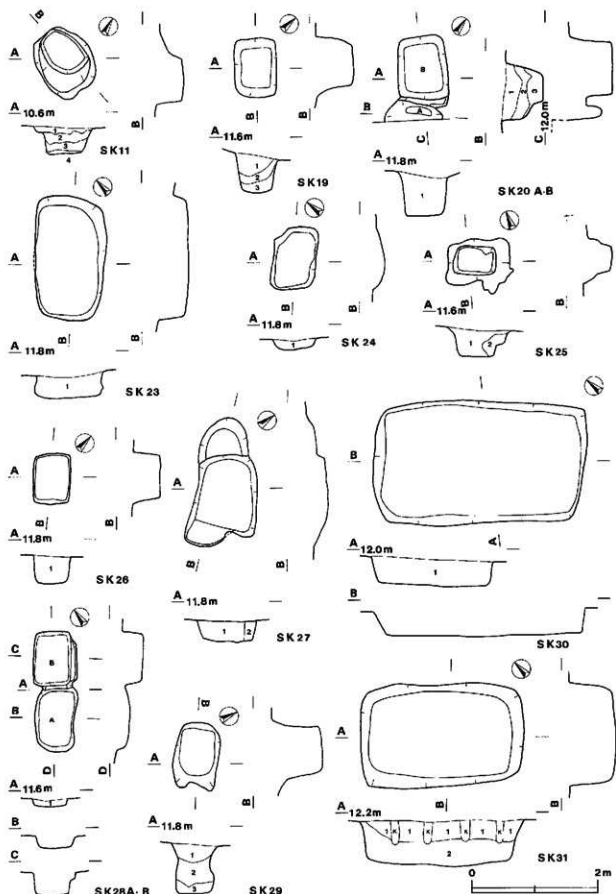
底面 平坦である。

覆土 2層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス多量，炭化物微量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，鹿沼パミス中量，ローム大ブロック少量，青灰色粘土ブロック少量，炭化物微量

所見 本跡からは出土遺物がなく，正確な時期・性格は不明であるが，第1号地下式竈及び第1号井戸との配置関係からみて，中世の系塚の可能性はある。



第65図 第11・19・20A・B・23・24・25・26・27・28A・B・29・30・31号土坑実測図

第54号土坑（第67図）

位置 調査区北部、B3a区。

重複関係 本跡は第56号土坑を掘り込み、本跡を第1号方形竪穴遺構が掘り込んでいる。

規模と平面形 平面形は長軸3.31m、短軸1.00mの長方形で、深さは14cmである。

長軸方向 N-41°-E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中・中ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・黒色土ブロック少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・腐炭屑
- 3 黒褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明である。

第55号土坑（第67図）

位置 調査区北部、B3a区。

重複関係 本跡を第54号土坑が掘り込んでいる。

規模と平面形 平面形は長軸2.17m、短軸（2.03）mの「長方形」と思われる。深さは16cmである。

長軸方向 N-44°-E

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦でやわらかい。

覆土 2層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、黒色土ブロック少量、ローム中・中・小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック微量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式竪穴及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の基壇の可能性はある。

第56号土坑（第67図）

位置 調査区北部、B3a区。

重複関係 本跡は第54号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 重複のため正確な平面形は不明であるが、長軸（2.07）m、短軸（2.06）mの「長方形」と思われ、深さは6～15cmである。

長軸方向 [N-0°-E]

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦でやわらかい。

覆土 1層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚である可能性がある。

第58号土坑（第67図）

位置 調査区北部、A4区。

規模と平面形 長径1.61m、短径1.05mの楕円形で、深さは32cmである。

長径方向 N-45°-E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム人・中・小ブロック・ローム粒子多量、黒色土ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・黒色土ブロック少量、炭化物微量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック・黒色土ブロック少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第63号土坑（第68図）

位置 調査区北部、B4区。

重複関係 本跡は第1号方形竪穴遺構と第68号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 重複のため正確な平面形は不明であるが、長軸（1.15）m、短軸（1.05）mの〔長方形〕であると思われる、深さは40cmである。

長軸方向 [N 36°-E]

壁面 底面から外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる人為堆積である。（第68区C土層図の第5・7層）

土層解説

- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム人・中ブロック・炭化物・黒色土ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、黒色土ブロック少量、炭上粒子・炭化物・炭屑・バミス粒子少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚の可能性はある。

第64号土坑（第68図）

位置 調査区北部、B4区。

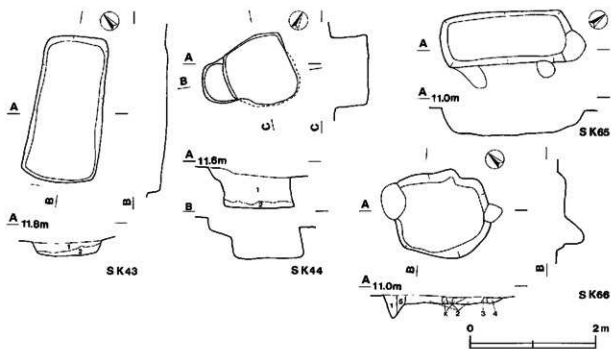
重複関係 本跡と第69号土坑が重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 重複のため正確な平面形は不明であるが、長軸（1.50）m、短軸0.9mの〔長方形〕であると思われる、深さは35cmである。

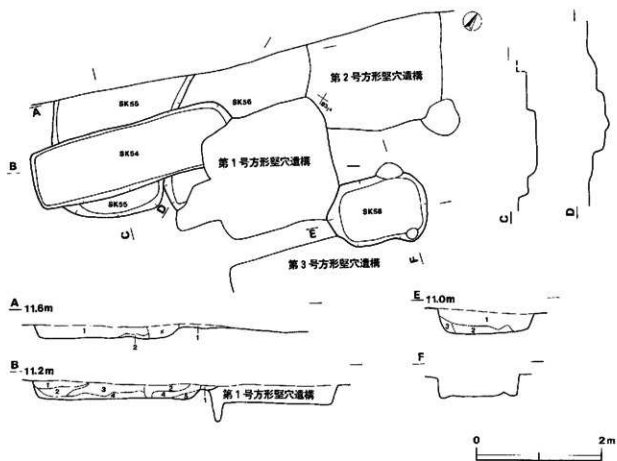
長軸方向 [N 52° E]

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。



第66图 第43·44·65·66号土坑实测图



第67图 第54·55·56·58号土坑实测图

覆土 1層からなる人為堆積で、ロームブロック、鹿沼パミスブロックを含む黒褐色土である。

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配
置関係からみて、中世の墓塚の可能性がある。

第65号土坑（第66図）

位置 調査区北部、B4a3区。

規模と平面形 平面形は長軸2.15m、短軸0.85mの長方形で、深さは44cmである。

長軸方向 N-86°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 1層からなる人為堆積で、ロームブロック、鹿沼パミスブロックを含む黒褐色土である。

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配
置関係からみて、中世の墓塚の可能性がある。

第66号土坑（第66図）

位置 調査区北部、B4a5区。

規模と平面形 平面形は長軸1.55m、短軸1.40mの不整長方形で、深さは12cmである。

長軸方向 N-50°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 5層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土中・小ブロック・焼土粒・炭化粒子・鹿沼パミスブロック少量、軽石量
- 2 明褐色 ローム粒子・鹿沼パミス多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・軽少量、炭化物微量
- 3 におい黄褐色 小礫多量、鹿沼パミス粒子・粘土中量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・鹿沼パミス粒子・小礫少量、炭化物・炭化粒子微量
- 5 明赤褐色 ローム粒子・焼土粒・鹿沼パミス粒子多量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・鹿沼パミス小ブロック・粘土粒子中量、ローム大・中ブロック・焼土大・中ブロック・鹿沼パミス中ブロック・軽少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配
置関係からみて、中世の墓塚の可能性がある。

第68号土坑（第68図）

位置 調査区北部、A4a区。

重複関係 本跡は、第63・69号土坑を掘り込んでおり、第3号方形竈穴遺構に掘り込まれている。

規模と平面形 重複のため正確な平面形は不明であるが、長軸(2.37)m、短軸(1.05)mの「長方形」と思わ
れ、深さは40cmである。

長軸方向 [N-41°-E]

壁面 南西部の壁は外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる人為堆積である。(第68区C土層図の第1, 2層)

上層解説

- 1 極細 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・鹿沼パミス褐色土ブロック少量、黄土粒少量
- 2 粗 色 ローム小ブロック・ローム粒少量、ローム中ブロック・鹿沼パミス・黒色土ブロック少量、黄土粒、炭化物少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配
置関係からみて、中世の墓塚の可能性ある。

第69号土坑 (第68区)

位置 調査区北部、A4a区。

規模と平面形 重複のため正確な平面形は不明であるが、長軸(1.90)m、短軸(1.15)mの「長方形」と思われ、深さは38cmである。

長軸方向 [N-40°-E]

壁面 重複のため不明である。

底面 平坦である。

覆土 1層からなる人為堆積である。(第68区C土層図の第3層)

土層解説

- 3 粗 色 ローム中ブロック・ローム粒中量、ローム中ブロック・鹿沼パミス少量、黄土粒・粘土中ブロック少量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配
置関係からみて、中世の墓塚の可能性ある。

第70号土坑 (第68区)

位置 調査区北部、A4a区。

重複関係 本跡は、第71号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 重複のため正確な平面形は不明であるが、長軸2.25m、短軸(1.05)mの「長方形」と思われ、
深さは30cmである。

長軸方向 N-49°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 1層からなる人為堆積である。(第68区G上層図の第5層)

土層解説

- 5 粗 色 ローム小ブロック・ローム粒多量、ローム中ブロック中量、鹿沼パミス中・小ブロック・鹿沼パミス粒少量、黄土粒・炭化物

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配
置関係からみて、中世の墓塚の可能性ある。

第71号土坑 (第68区)

位置 調査区北部、A4a区。

規模と平面形 平面形は長軸1.90m、短軸0.85mの不整形長方形で、深さは12cmである。

長軸方向 N-41°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

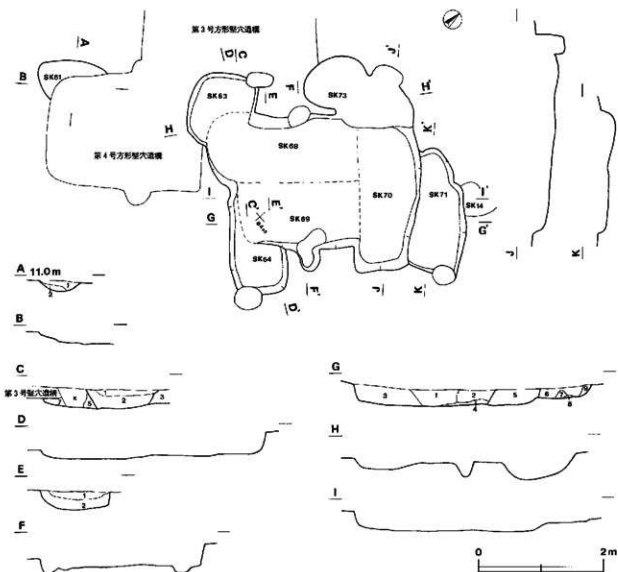
底面 平垣である。

覆土 4層からなる人為堆積である。(第68図G土層図の第6～9層)

土層解説

- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒多量、炭化物・炭屑バミス小ブロック・炭屑バミス粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭屑バミス小ブロック・炭屑バミス粒少量、粘土粒子・炭化物微量
- 8 明褐色 ローム小ブロック多量、炭屑バミス小ブロック少量
- 9 明褐色 ローム大ブロック多量、ローム粒子中量

所見 本跡からは出土遺物がなく、正確な時期・性格は不明であるが、第1号地下式墳及び第1号井戸との配置関係からみて、中世の墓塚の可能性がある。



第68図 第63・64・68・69・70・71号土坑実測図

第94号土坑 (第69図)

位置 調査区2区北東部, D2a区。

重複関係 第81号土坑の底面を掘り込んでいるため、木跡の方が新しい。

規模と平面形 上面では長径約2.54m, 短径約1.20mの楕円形で、底面では長径約2.80m, 短径約0.25mの長楕円形である。深さは約230cmである。

長径方向 N-49°-E

壁面 長径方向の壁は内傾しながら立ち上がり、上面では垂直に立ち上がる。短径方向の壁は、外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

所見 本跡は、遺構の形状、類別から縄文時代の陥し穴と思われる。

第95号土坑 (第69図)

位置 調査区中央部, D2a区。

重複関係 第10号溝が、本跡の壁面を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径約3.61m, 短径約1.73mの長楕円形である。深さは約190cmある。

長径方向 N-56°-E

壁面 外傾して立ち上がるが、南西部の壁は底面から約50cmのところで大きくオーバーハングし、上面では垂直に立ち上がる。

底面 底面はほぼ平坦で、北東部に皿状のくぼみがある。

所見 本跡は、出土遺物はないが、遺構の形状、類別から縄文時代の陥し穴と思われる。

第96号土坑 (第69図)

位置 調査区中央部, C1a区。

重複関係 第11号溝が、木跡の壁面を掘り込んでいる。

規模と平面形 平面形は長径約3.43m, 短径約1.49mの長楕円形である。

長径方向 N-20°-E

壁面 壁高は約230cmで、底面からは垂直に立ち上がり、上面では外傾して立ち上がる。長径方向の壁は、底面から約50cmのところまで大きくオーバーハングし、上面では垂直に立ち上がる。

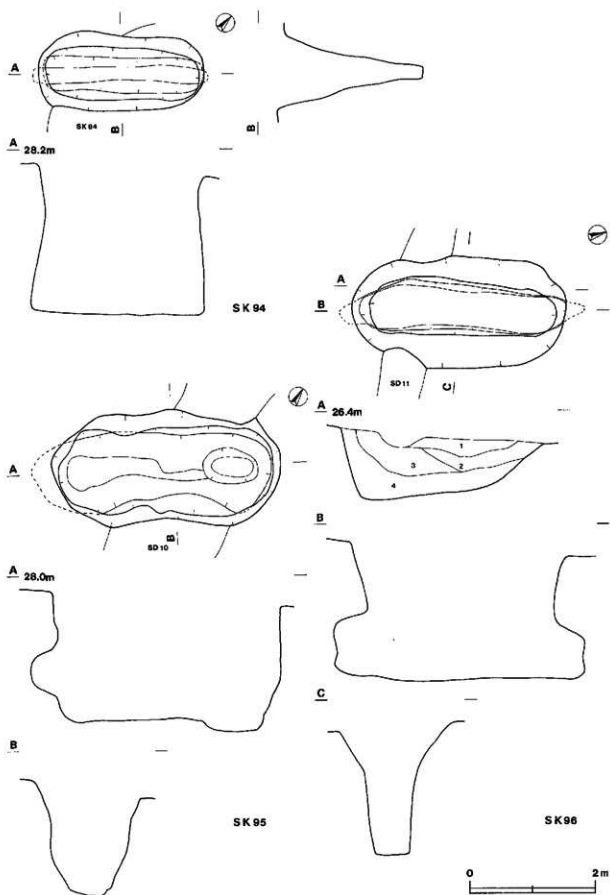
底面 平坦である。

覆土 4層からなり、レンズ状堆積を示し自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量、黒色土小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、ローム大ブロック・黒色土小ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・黒色土小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、黒色土小ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量

所見 本跡は、出土遺物はないが、遺構の形状、類別から縄文時代の陥し穴と思われる。



第69图 第94·95·96号土坑实测图

表4 大畑遺跡土坑一覽表

土坑 番 号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	坑 深			遺山	覆土	山 土 遺 物	備 考 (重複関係 H→新)
				坑深×短径(m)	深さ (cm)	断面				
1	A4a	N-26°-E	槽 円 形	0.58×0.47	36	垂直	凹状	自然	弥生土器片	
2	A4a	N-66°-E	槽 円 形	1.04×0.48	20~40	緩傾	凹状	人為	弥生土器片	
3	A4a	-	円 形	径 0.82	25~36	垂直	平坦	人為		
4	A4a	N-21°-W	槽 円 形	0.49×0.42	43	垂直	平坦	人為		
5	A5a	N-33°-W	槽 円 形	1.12×1.08	11	緩傾	平坦	自然		
6	A5a	N-60°-E	槽 円 形	0.92×0.66	38	外傾	凹状	自然	縄文土器片	
7	A5a	N-45°-W	不 定 形	1.43×1.15	24	外傾	凹状	自然	弥生土器片	
8	A5a	N-53°-W	(槽 円 形)	0.73×(0.37)	30	外傾	凹状	自然	弥生土器片	
9-A	A4a	N-51°-W	不 定 形	(2.74)×2.50	15~25	外傾	平坦	自然	弥生土器片・粘棒・馬骨	
9-B	B4a	N-59°-E	槽 円 形	1.70×0.88	18	緩傾	平坦	自然		
10	A4a	N-52°-W	槽 円 形	2.00×0.80	17	外傾	凹状	自然	弥生土器片	
11	B4a	N-69°-W	槽 円 形	1.08×0.91	43	垂直	平坦	自然	瓦器。灰を短めている	SD 8・SK11
12	A4a	N-63°-E	槽 円 形	0.77×0.62	30	緩傾	凹状	自然		
13	A4a	N-0°	槽 円 形	0.82×0.72	18	外傾	平坦	自然		
14	A4a	N-38°-W	槽 円 形	0.73×0.47	40~47	垂直	平坦	人為		
15	B3a	N-32°-E	長 方 形	2.33×1.41	30~62	垂直	平坦	人為	弥生土器片	
16	A4a	N-35°-E	槽 円 形	1.08×0.77	11~27	外傾	凹状	人為		
17	A4a	N-90°-E	不 定 形	1.05×0.93	18~29	外傾	凹状	人為		
18	B4a	N-50°-E	槽 円 形	1.13×0.95	32	外傾	凹状	人為		
19	B4a	N-50°-W	長 方 形	0.94×0.68	60	外傾	平坦	人為		
20-A	B4a	N-53°-E	不 定 形	0.92×(0.29)	72	垂直	凹状	人為		
20-A	B4a	N-45°-W	長 方 形	1.02×0.78	78	垂直	平坦	人為		
21	B4a	N-65°-E	(槽 円 形)	1.39×(0.62)	21	外傾	凹状	人為		
22	B4a	-	円 形	0.64×0.64	12	外傾	凹状	人為		
23	B4a	N-46°-E	隅丸長方形	2.00×1.14	41	垂直	平坦	人為		
24	B4a	N-64°-E	不 定 形	1.00×0.68	19	緩傾	凹状	人為		
25	B4a	N-71°-W	不 定 形	0.99×0.70	45	外傾	平坦	人為		
26	B4a	N-47°-W	長 方 形	0.81×0.59	44	垂直	平坦	人為	古瓦片	
27	B4a	N-39°-W	不 定 形	2.09×1.03	32~37	緩傾	凹状	人為		
28-A	B4a	N-35°-E	不 定 形	1.01×0.69	20	外傾	平坦	人為		
28-B	B4a	N-34°-E	不 定 形	0.86×0.63	37	垂直	凹状	人為		

土 坑 番 号	位 置	长径方向 (长轴方向)	平 面 形	规 模		坑 深 (cm)	坑 形	底 部	土 质	出 土 遗 物	备 考 (重要關係 出→新)
				长径×短径(m)	深 度 (cm)						
29	B4a2	N-62°-W	不整长方形	0.97×0.7	81	垂直	平坦	人为	土師器片、陶器片、内耳銅片		
30	B5a3	N-40°-W	反 方 形	3.57×1.99	35~41	倾斜	平坦	人为	刺片		
31	B5a1	N-43°-W	隅丸长方形	2.60×1.62	74	垂直	平坦	人为			
32	B5a1	N-61°-W	梯 形	0.90×0.52	34	外倾	凹状	人为			
33	B5a1	N-35°-W	梯 形	1.13×0.93	15	外倾	凹状	人为			
34	B4a	N-76°-E	不 定 形	2.27×1.60	18	外倾	凹凸	自然	縄文土器片		
35	B5a2	N-45°-W	不整梯形	1.64×1.04	75	外倾	凹状	自然			
36	B4b0	N-63°-E	梯 形	1.10×0.55	5a	外倾	凹状	人为			
37	B4a	N-54°-W	梯 形	2.00×1.72	23~30	倾斜	凹凸	人为	縄文・弥生土器片		
38	B4a	N-63°-W	(梯 形)	(1.83)×(1.47)	27	外倾	凹凸	自然	縄文・弥生土器片		
39	B4a	N-73°-E	隅丸长方形	0.77×0.56	30	垂直	平坦	人为	縄文土器片		
40	B5a	N-73°-W	梯 形	1.88×0.80	13	外倾	平坦	人为			
41	B5a	N-48°-W	隅丸长方形	1.95×1.42	50	外倾	凹状	人为	縄文土器片		
43	B4a	N-47°-E	隅丸长方形	2.36×1.06	21	垂直	平坦	人为			
44	B4a	N-42°-W	不整梯形	1.47×1.13	53~58	垂直	平坦	人为			
46	B4a	N-76°-E	不整长方形	2.30×1.64	46	外倾	凹状	人为			
47	B3a5	N-58°-E	梯 形	1.93×1.40	15	外倾	平坦	人为	弥生土器片		
48	B3a	N-29°-W	不整长方形	(2.90)×2.30	67	外倾	凹状	人为			
49	B4a	N-10°-W	不整梯形	1.58×1.12	48~59	外倾	凹凸	人为	縄文・弥生土器片		
50	B4a	N-34°-W	梯 形	1.12×0.94	54	外倾	平坦	人为			
51	B4a	N-23°-E	梯 形	0.90×0.83	23	外倾	凹凸	自然	縄文・弥生土器片		
52	C3a	N-36°-E	隅丸长方形	1.60×1.16	16	外倾	凹状	自然			
53	B4a2	N-62°-W	梯 形	1.15×0.88	50~60	外倾	平坦	人为			
54	B3a	N-41°-E	长 方 形	3.31×1.00	74	垂直	平坦	自然		SK37~SK36→SK34	
55	B3a	N-44°-E	长 方 形	2.17×(2.00)	16	倾斜	平坦	人为		SK35→SK34	
56	B3a	不 明	(长方形)	(2.07)×(2.06)	6~16	倾斜	平坦	人为		SK37→SK36→SK34	
57	B3a	N-41°-W	不整长方形	2.68×1.99	30	垂直	平坦	人为	炭化物	第1号方形竪穴遺構	
58	B3a	N-45°-E	梯 形	1.61×1.05	32	垂直	平坦	人为			
59	B3a	N-45°-E	(长方形)	2.00×(1.62)	16	倾斜	平坦	人为	炭化物	第2号方形竪穴遺構	
60	A4a	N-44°-E	(长方形)	2.83×(1.80)	25	不明	平坦	人为	弥生土器片	第3号方形竪穴遺構	
61	B4a	N-46°-E	(梯 形)	(1.88)×(0.83)	14	外倾	平坦	人为			
62	B4a	N-46°-E	长 方 形	2.50×1.87	20	外倾	平坦	人为	弥生土器片	第4号方形竪穴遺構	

土坑 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	出土	出土遺物	備考 (重複関係 H→新)
				長×短径(m)	深さ (cm)					
63	A4 ₁	N-36°-W	(不整形方形)	1.15×1.05	40	不明	平坦	人為		SK63→SK68-A・ SK68-B・SK69
64	B4 ₁	N-52°-W	(長方形)	1.50×0.9	35	外積	平坦	不明		
65	B4 ₂	N-36°-E	長方形	2.15×0.85	44	外積	平坦	不明		
66	B4 ₃	N-50°-W	不整形方形	1.55×1.4	12	外積	平坦	人為		
68	A4 ₄	N-41°-E	(長方形)	(2.37)×(1.05)	40	不明	平坦	人為		SK-63→SK68-A→ SK68-B・SK69
69	A4 ₅	N-40°-E	(長方形)	(1.90)×(1.15)	38	不明	平坦	人為		SK71→SK70→SK69- A・SK69-B・SK68
70	A4 ₆	N-49°-W	(長方形)	2.25×(1.05)	30	外積	平坦	人為		SK71→SK70→SK69- A→SK69-B・SK68
71	A4 ₇	N-41°-W	不整形方形	1.90×0.86	12	外積	平坦	人為		SK-71→SK-70→SK-69 A→SK-69B・SK-68
72	B4 ₄	N-5°-E	楕円形	0.60×0.49	28	垂直	平坦	不明		
73	A4 ₈	N-58°-E	不整形円形	1.83×0.88	20	垂直	平坦	不明		
74	C3 ₁	N-9°-E	楕円長方形	1.53×1.17	29	外積	平坦	人為	磁器	
75	C3 ₂	N-42°-W	楕円形	1.14×1.05	22	外積	凹凸	人為		
76	C3 ₃	-	円形	1.65×1.55	86	外積	凹凸	人為	キセル、古銭、人骨	近世墓域
77	C3 ₄	N-54°-E	楕円形	1.71×1.54	84	外積	平坦	人為	キセル、古銭、人骨	近世墓域
78	C3 ₅	N-6°-E	不整形方形	1.79×1.46	146	垂直	平坦	人為		近世墓域
79	C3 ₆	N-0°	楕円長方形	1.05×1.00	29	外積	凹凸	人為	弥生土器片	
80	C3 ₇	N-75°-W	楕円形	0.89×0.71	25	傾斜	皿状	人為	古銭、人骨	近世墓域
81	D2 ₁	N-31°-E	楕円形	3.95×3.27	12	外積	平坦	人為		
82	C2 ₁	N-83°-W	長楕円形	3.24×1.34	18~38	外積	凹凸	人為		
83	C2 ₂	N-41°-E	楕円形	1.54×1.00	36	外積	皿状	不明		
84	D3 ₁	N-61°-E	楕円形	2.45×1.85	110	外積	皿状	人為		
85	D3 ₂	N-0°	楕円形	0.47×0.36	19	外積	皿状	不明		
86	D3 ₃	N-35°-E	楕円形	0.65×0.61	20	外積	皿状	不明		
87	D3 ₄	N-17°-W	楕円形	0.75×0.47	22	外積	皿状	不明		
88	D3 ₅	N-90°-E	楕円形	0.74×0.64	26	外積	皿状	不明		
89	D3 ₆	N-46°-E	楕円形	1.26×0.96	37	外積	皿状	不明		
90	D2 ₂	N-65°-W	楕円形	1.12×0.83	20~40	外積	凹凸	不明		
91	C1 ₁	N-27°-W	楕円形	1.82×1.00	60~86	傾斜	凹凸	人為		
92	C1 ₂	N-68°-E	楕円形	0.95×0.73	35	外積	皿状	人為		
93	C1 ₃	N-22°-E	楕円形	1.13×0.84	50	外積	皿状	人為		
94	D2 ₃	N-49°-E	楕円形	2.54×1.20	231	垂直	平坦	不明		龍七穴
95	D2 ₄	N-56°-E	不定形	3.64×1.73	190	垂直	平坦	不明		龍七穴

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (重複関係 旧・新)
				長径×短径(m)	深さ (cm)					
96	C1a	N 20° E	楕円形	3.43×1.49	190~210	袋状	平坦	人為		隔土穴
103	E1a	N 20° E	楕円形	0.98×0.87	11	外傾	平坦	人為		

6 墓 塚

当遺跡からは、墓塚と思われる土坑が、25基検出されているが、人骨が確認された4基について墓塚として取り上げた。以下、遺構番号順に記載する。

第1号墓塚 (第70図)

位置 調査区中央部, C3a区。

重複関係 本跡が第12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 底面は長軸0.79m, 短軸0.69mの長方形で, 上面は直径1.60mの円形で, 深さは86cmである。

長軸方向 N-12°-E

壁面 底面から垂直に立ち上がり, 上面では外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

遺物 覆土下層〜底面から, 第71図3〜8の古銭・1のキセルが人骨に伴って出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から近世の墓塚である。

第1号墓塚出土遺物観察表

図録 番号	種別	計測値			裏年率(%)	制作年		出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		時代	西暦		
第71 3	寛永通宝	2.5	1	3.2	100	江戸	1668年	覆土中	M2 P.L.36
4	寛永通宝	2.4	1	3.3	100	江戸	1767年	覆土中	M3 P.L.35
5	寛永通宝	2.3	1	2.5	100	江戸	1708年	覆土中	M4 P.L.36
6	寛永通宝	2.3	1	2.7	100	江戸	1708年	覆土中	M5 P.L.35
7	寛永通宝	2.3	1	2.2	100	江戸	1708年	覆土中	M6 P.L.35
8	寛永通宝	2.3	1	2.9	100	江戸	1708年	覆土中	M7 P.L.35

図録 番号	種別	計測値(cm)						裏年率 (%)	出土地点	備考
		全長	火皿径	覆土小口径	覆土長	取口径	取口小口径			
第71 1	キセル	16.4	1.6	0.9	7	0.4	0.9	6.4	95	覆土中 M30 P.L.35

第2号墓塚 (第70図)

位置 調査区中央部, C3a区。

重複関係 本跡が第12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 底面は長軸0.93m、短軸0.73mの長方形で、上面は長径1.71m、短径1.54mの楕円形で、深さは84cmである。

長径方向 N-57°-E

壁面 底面から垂直に立ち上がり、上面では外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

遺物 覆土下層～底面から、第71図9～14の古銭・2のネセルが人骨に伴って出土している。

所見 本跡は、出土遺物から近世の墓墳である。

第2号墓墳出土遺物観察表

図号	種別	計測値			現存率(%)	初 年		出土地点	備考
		径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)		持 代	西 暦		
70	寛永通宝	2.5	1	3.5	100	江戸	1765年	覆土中	M9
10	寛永通宝	2.5	1	3.5	100	江戸	1668年	覆土中	M10
11	寛永通宝	2.5	1	3.9	100	江戸	1668年	覆土中	M11
12	寛永通宝	2.5	1	3.5	100	江戸	1668年	覆土中	M12
13	寛永通宝	2.5	1	3.1	100	江戸	1708年	覆土中	M13
14	寛永通宝	2.5	1	3.4	100	江戸	1708年	覆土中	M14

図号	種別	計測値 (cm)							現存率 (%)	出土地点	備考
		全長	火口径	唇径小口径	唇筒長	喉門径	喉口小口径	喉口長			
第71図 2	ネセル	-	1.6	0.9	5.7	0.4	0.8	5.1	40	覆土中	M8 P.1.35

第3号墓墳 (第70図)

位置 調査区中央部、C3区。

重複関係 本跡が第12号伴同跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 底面は長軸0.72m、短軸0.63mの長方形で、上面は長軸1.79m、短軸1.46mの不整長方形で、深さは146cmである。

長径方向 N-6°-E

壁面 底面から垂直に立ち上がり、上面では外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

遺物 人の歯の他、腐食した釘が底面近くから出土している。

所見 本跡は、出土遺物及び、第76・77土坑との位置関係から見て近世の墓墳である。

第4号墓墳 (第70図)

位置 調査区中央部、C3区。

重複関係 本跡が第12号伴同跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 平面形は長径0.89m、短径0.71mの楕円形で、深さは25cmである。

長径方向 N-75°-E

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

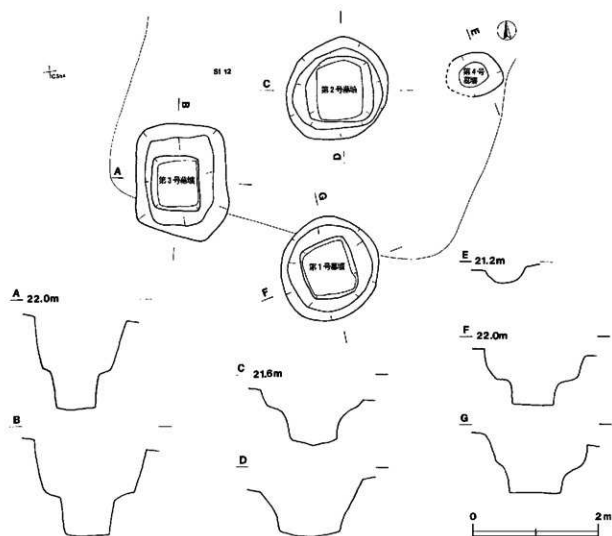
底面 皿状である。

遺物 底面から、第71図15～20の古銭が人骨に伴って出土している。

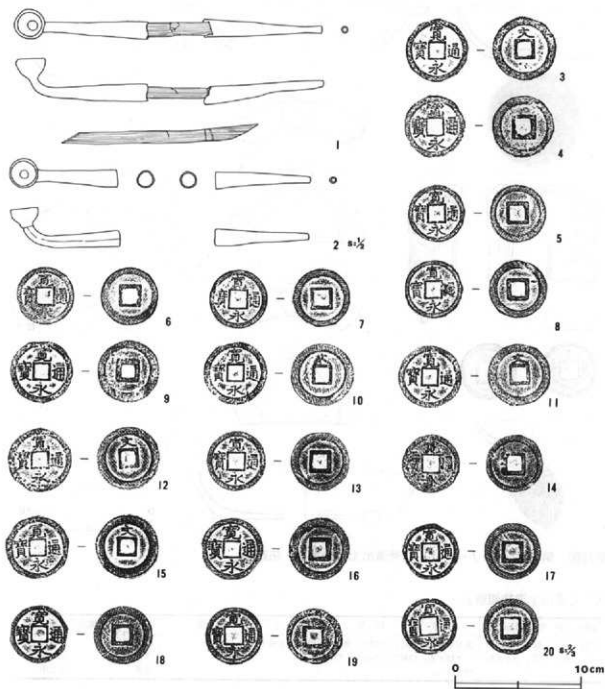
所見 本跡は、出土遺物から近世の墓塚である。

第4号墓塚出土遺物観察表

図番	種別	計測値			保存率(%)	初出年		出土地点	備考
		径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)		時代	西暦		
第71図 15	寛永通宝	2.5	1	3.2	100	江戸	1668年	塚上中	M15 P.L.35
16	寛永通宝	2.5	1	3.4	100	江戸	1765年	塚土中	M16 P.L.55
17	寛永通宝	2.3	1	3.1	100	江戸	1708年	塚上中	M17 P.L.85
18	寛永通宝	2.3	1	2.7	100	江戸	1767年	塚土中	M18 P.L.35
19	寛永通宝	2.3	1	2.7	100	江戸	1737年	塚土中	M19 P.L.35
20	寛永通宝	2.2	1	3.5	100	江戸	1708年	塚土中	M20 P.L.35



第70図 第1・2・3・4号墓塚実測図



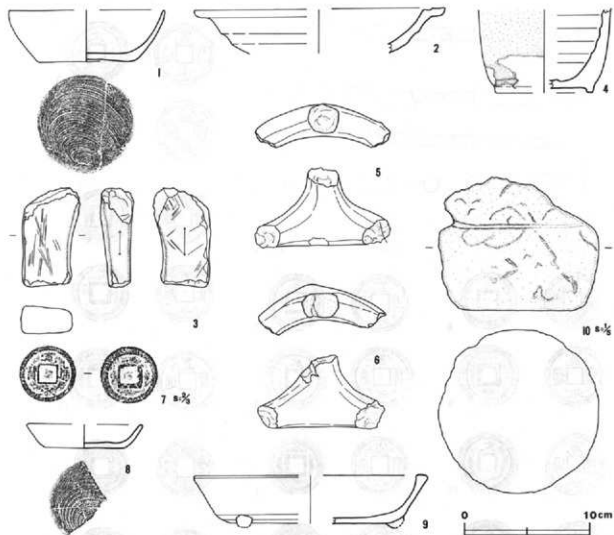
第71図 第1・2・4号墓出土遺物実測・拓影図

7 溝

当遺跡からは12条の溝が検出されている。時期決定の資料に恵まれず、構築時期や性格については不明な点が多い。以下、検出された溝の特徴や遺物について記載する。

第1号溝出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第72図 1	環 土 銅 器	A [12.3] B 4.1 C 7.6	底部から口縁部片。平底で、体部は内彎気味に外傾する。	体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	灰石・雲母、針状鉱物にふい塵	P140, 60% P.L.25 覆土中
					普通	



第72図 第1・2・5・7・9・10・11号溝出土遺物実測・拓影図

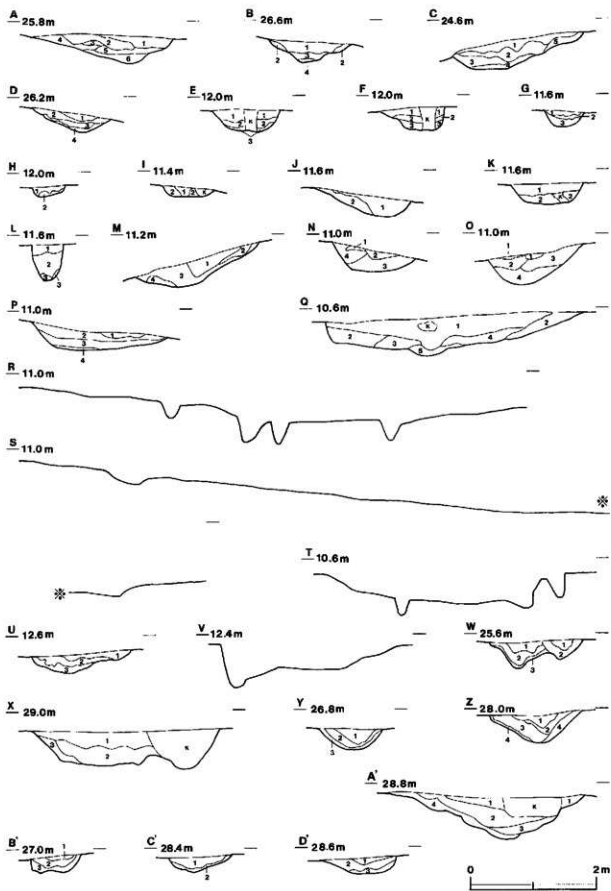
第7号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 2	浅鉢 陶器	A [20.0] B (3.5)	体部から口縁破片。体部は内彎気味に外傾する。口縁部は外反し上位に縁を持つ。	体部外面横ナデ。	砂粒 浅黄色 普通	P141, 5 96 P L.25 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第72図 3	砥石	(7.9)	(4.5)	(2.1)	(124.8)	-	砂岩	覆土中	Q30 P L.33

第9号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 4	高台付形造 陶器	B (6.7) D [7.8] E 0.5	底部から体部片。平底で、体部は内彎気味に外傾する。高台は直立する。	体部内・外面横ナデ。	砂粒 黄褐色 普通	P142, 2056 P L.25 覆土中



第73图 第1·2·3·4·5·6·7·8·9·10·11·12号溝土層·断面実測図

発掘番号	器種	計測値(cm)			孔径(m)	重量(g)	残存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大高					
第7230 e	不明+銅器	(10.7)	(3.4)	(5.3)		(17.9)		覆土中	P143 P.L.25
e	不明+銅器	(10.1)	(4.0)	(5.9)	-	(15.1)	-	覆土中	P144 P.L.25

発掘番号	器種	計測値			残存率(%)	初探年	出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(mm)	重量(g)				
第7230 f	煮火銅器	2.8	1	2.2	100	江戸 1708年	覆土中	M31 P.L.35

第10号溝出土遺物観察表

発掘番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7230 8	皿	A(9.2)	底部から口縁部片。凹底。	口縁部・体部内・外面削ナデ。	砂粒に白い機着色	P147, 20% P.L.25 覆土中
	土師製土器	H 9.2		底部起糸切り。		
		C(6.3)				

発掘番号	器種	計測値(cm)			重量(kg)	残存率(%)	石葉	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第7230 c	五輪塔	(17.9)	21.5	21.7	(0.32)	-	佐藤寺	覆土下層	Q37, 遺輪 P.L.33

第11号溝出土遺物観察表

発掘番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7230 9	火鉢	A(18.5)	肩部から体部片。肩部は近方形で、	体部内・外面削ナデ。	灰方、スクエア 網灰黄色	P148, 10% P.L.25 覆土中
	瓦質土器	H(4.2)	体部は外傾して立ち上がる。口縁部は厚化する。			
		K 0.5				

大塚遺跡溝十層解説

第1号溝(A)

- 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 柿崎褐色 ローム粒子多量
- 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子微量(硬化層)
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量、炭化物微量
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、スクリア粒子微量(硬化層)
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック・炭化物少量(硬化層)

第1号溝(B)

- 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量
- 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化した微塵(硬化層)
- 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第1号溝(D)

- 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量、炭化物微量(硬化層)
- 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第1号溝(C)

- 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量(硬化層)
- 黒褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
- 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、ローム大ブロック少量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック少量

第2号溝(E)

- 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、焼土粒子微量

第2号溝(F)

- 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土大ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、焼土粒子微量

第3号溝(G)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭粒粒子少量、炭化物少量
 2 暗褐色 炭粒粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物少量
 3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭粒粒子中量、炭化物・炭屑大・中・小ブロック少量

第3号溝(H)

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭屑中ブロック少量、ローム大ブロック少量
 2 褐色 ローム大・中ブロック少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭屑中ブロック少量

第4号溝(I)

- 1 明褐色 ローム中ブロック・炭粒粒中量、ローム大・小ブロック・ローム粒子・炭屑小ブロック少量、炭化物少量
 2 暗褐色 ローム大・中ブロック・炭粒小ブロック・炭粒粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量

第5号溝(K)

- 1 に近い黄褐色 1層は中褐色土 2層は中褐色土の覆土
 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・炭粒
 パリス小ブロック少量、炭屑少量、炭化物少量
 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・炭屑
 パリス粒子・炭屑パリス大ブロック少量

第3号溝(J)

- 1 に近い黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭屑パリス粒子
 少量、炭屑パリス小ブロック少量、炭屑少量、炭
 化物少量

- 2 に近い黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭屑パリス粒
 子少量、炭屑パリス小ブロック少量、炭屑少量、ロ
 ム中ブロック・炭屑パリス大ブロック少量、炭化
 粒子少量

第6号溝(L)

- 1 褐色 碎作土
 2 褐色 炭屑パリス中量、ローム粒少量
 3 明褐色 炭屑パリス層

第7号溝(M)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭屑パリス微量
 2 褐色 炭屑パリス少量、ローム粒子・炭化物微量
 3 暗褐色 ローム粒子・炭屑パリス微量
 4 暗褐色 褐色砂粒少量

第7号溝(N)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭屑パリス微量
 2 褐色 褐色砂粒少量、炭屑パリス少量、ローム粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子・炭屑パリス微量
 4 暗褐色 褐色砂粒少量

第7号溝(P)

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭屑パリス少量
 2 暗褐色 炭屑パリス少量、ローム粒子微量
 3 暗褐色 炭屑パリス・褐色砂粒少量、ローム粒子微量
 4 暗褐色 ローム粒子・炭屑パリス微量

第7号溝(O)

- 1 暗褐色 炭屑パリス少量
 2 暗褐色 ローム粒子・炭屑パリス微量
 3 褐色 炭屑パリス・褐色砂粒少量
 4 暗褐色 ローム粒子・炭屑パリス微量

第8号溝(Q)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭屑パリス多量、
 ローム中ブロック・炭屑パリス小ブロック中量、
 ローム大ブロック・炭化物少量、炭屑粒子・炭化
 粒子・スコリア粒子微量
 2 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭
 屑パリス少量、炭化・スコリア粒子微量
 3 極暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、
 炭化物・炭屑パリス・炭屑少量、炭屑・スコリア粒
 子微量
 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブ
 ロック・炭屑パリス少量、炭屑・炭化粒子微量

- 5 極暗褐色 ローム粒子少量、ローム大・中・小ブロック・
 炭屑パリス・スコリア粒少量、炭屑少量、炭化
 粒子・炭化粒子微量

第9号溝(U)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック・炭屑パリス中量、ローム大ブロック少
 量、炭化物微量
 2 褐色 ローム小ブロック・粒子多量、ローム中ブロッ
 ク・炭屑パリス・炭屑パリス小ブロック・中量、炭
 屑パリス中ブロック少量、炭化物微量
 3 黒褐色 ローム粒子・炭屑パリス小ブロック・粒子多量、
 ローム大・中・小ブロック・炭屑パリス中ブロッ
 ク少量

第10号溝(W)

- 1 暗褐色 ゼラメ状粒子多量、ローム小ブロック・ローム粒
 子中量、炭化物微量
 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック・ゼラメ状粒子中量、ローム大ブロッ
 ク少量、炭化物微量
 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、ゼ
 ラメ状粒子少量

第10号溝(Y)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック中量、炭化物微量
 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム
 大ブロック少量、炭化物微量
 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第10号溝(Z)

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒少量、ローム中ブ
 ロック・炭化物少量
 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム
 中ブロック少量、炭化物微量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック中量、ローム大ブロック少量、炭化物微量
 4 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭屑粒子多
 量、ローム大ブロック中量、炭化物微量

第10号溝(X)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒少量、ローム大・
 中ブロック中量
 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム
 大ブロック少量、炭化物微量
 3 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第11号溝(H')

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック中量、炭化物微量
 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第12号溝(C')

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック中量、炭化物微量
 2 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第12号溝(D')

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム
 中ブロック少量、炭化物微量
 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・
 中ブロック中量、炭化物・スコリア粒子微量

第12号溝(A')

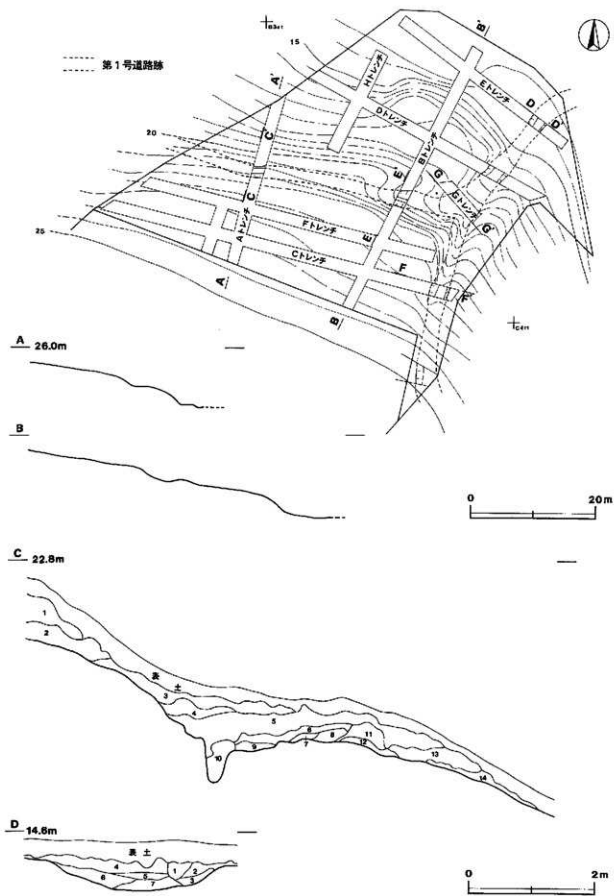
- 1 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック中量、炭屑粒子・炭化物微量
 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック中量、ローム大ブロック少量、炭化物微量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブ
 ロック中量、ローム大ブロック少量

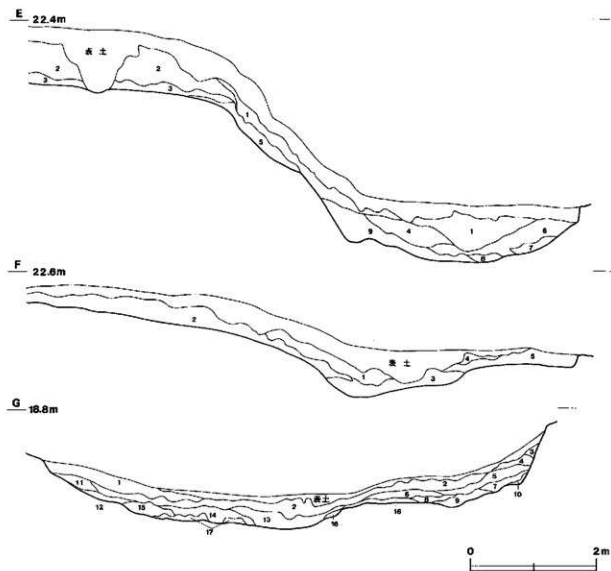
- 4 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

表5 大畑遺跡溝一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	東西	出土	出土遺物	備考 新土明係(古→新)
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)					
1	C1区	西→東	直線状	72.0	1.03	0.40	32	外傾	緩やかな「U」字状	自然	土製器片	SI1→SD10-11→本跡
2	D4区	西→東	直線状	17.5	1.20	0.62	37	外傾	緩やかな「U」字状	人為		
3	B5区	北西→南東	直線状	19.7	0.62	0.38	26	外傾	緩やかな「U」字状	人為		SD7→本跡
4	D5区	北西→南東	直線状	16.0	0.76	0.52	16	外傾	凹田	人為		SD7→本跡
5	B5区	北西→南東	直線状	7.2	1.50	0.37	33	外傾	緩やかな「U」字状	人為		SD7→本跡
6	B5区	北→南	くの字状	3.3	0.79	0.50	20	外傾	緩やかな「U」字状	人為		SD7→本跡
7	B5区	東→西	直線状	19.5	1.61	0.53	47	外傾	緩やかな「U」字状	人為		本跡→SD3-4・5・6
8	H4区	北東→南西	直線状	15.0	3.43	2.50	79	硬傾	緩やかな「U」字状	自然		SK9A→本跡→SK9B
9	C3区	北東→南西	直線状	12.0	1.65	0.72	29	外傾	凹田	人為		本跡→第1号段焼窯
10	D2区	北→南	直線状	69.5	1.60	0.65	32	外傾	緩やかな「U」字状	自然	古輪塚(既報)	SIK95→SD11→本跡
11	D2区	北東→西	くの字状	50.0	0.85	0.50	43	外傾	緩やかな「L」字状	自然		SK96→SD11→本跡
12	C1区	西→東	直線状	42.0	2.30	0.70	65	外傾	緩やかな「U」字状	自然	陶器片	本跡→SD1



第74図 第1号道路跡実測図



第75図 第1号道路跡実測図

8 道路跡

当遺跡からは、道路跡が1条検出されている。以下、検出された道路跡について記載する。

第1号道路跡（第74・75区）

位置 調査区北東部の板斜地、C3_南区からB2_北区。

規模と形状 全長（115m）、調査できた範囲で上幅2.4～3.5m、下幅0.5～1.3m、深さ0.45～1.0mである。断面は緩やかな「U」字状である。

方向 調査区北東部から南東方向に延び、斜面部C3_南区で南と西方向に分岐する。南方向へは斜面に直行しC3_南区で調査区外へ延びていく。西方向へは斜面と平行しB2_北区で調査区外へ延びていく。

覆土

Aトレンテ十層解説

- 1 玉 硯 色 コーム粒子・小礫少量
- 2 翠 色 コーム粒子少量、焼上粒少量
- 3 照 褐 色 コーム粒子少量、ローム中・小ブロック・小礫少量
- 4 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼上粒少量
- 5 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・樹十粒子少量
- 6 翠 褐色 コーム粒子少量、ローム山ブロック少量
- 7 昏 褐色 コーム粒子少量
- 8 翠 褐色 コーム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量
- 9 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック少量
- 10 照 褐色 コーム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、鹿沼パミス粒子・鹿沼パミス小ブロック少量
- 11 翠 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、焼上粒少量
- 12 照 褐色 コーム粒子少量、炭化物少量
- 13 照 褐色 コーム粒子少量、焼土中ブロック少量
- 14 翠 褐色 コーム粒子少量

Bトレンテ十層解説

- 1 照 褐色 コーム粒子少量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子少量
- 2 照 褐色 コーム粒子少量、ローム大・中・小ブロック・樹十粒子少量、焼土小ブロック・炭化した樹皮
- 3 照 褐色 コーム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量
- 4 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム山ブロック少量、焼土粒子少量、炭化粒子少量
- 5 照 褐色 コーム中ブロック・ローム粒子少量、ローム大・小ブロック少量、炭化粒子少量
- 6 照 褐色 コーム山・小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック少量、焼土・炭化粒子少量
- 7 照 褐色 コーム粒子少量、ローム大・小ブロック少量、焼土・炭化粒子少量
- 8 昏 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子少量
- 9 照 褐色 コーム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土・炭化粒子少量

Cトレンテ十層解説

- 1 照 褐色 コーム粒子少量、ローム中・小ブロック少量、焼土・炭化粒子少量
- 2 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼上粒少量、炭化粒子少量
- 3 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子少量
- 4 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・樹十粒子少量
- 5 照 褐色 コーム粒子少量、ローム大・中ブロック・炭化粒子少量

Eトレンテ十層解説

- 1 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・鹿沼パミス粒子少量
- 2 昏 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・炭化物・鹿沼パミス粒子少量
- 3 照 褐色 鹿沼パミス粒子少量、ローム粒子少量、鹿沼パミス小ブロック少量、ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子少量
- 4 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、鹿沼パミス粒子少量、鹿沼パミス大ブロック少量、ローム大・中ブロック少量
- 5 照 褐色 コーム中・小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・鹿沼パミス粒子少量、鹿沼パミス中ブロック少量、炭化物少量
- 6 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック少量、鹿沼パミス粒子少量
- 7 照 褐色 コーム粒子少量、砂粒少量、鹿沼パミス粒子少量

Gトレンテ十層解説

- 1 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・炭化粒子少量、焼上粒少量
- 2 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼上粒少量、炭化物・炭化粒子・樹皮少量
- 3 照 褐色 コーム中・小ブロック・炭化粒子少量、焼上粒少量
- 4 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子少量、焼土小ブロック・白色粒子少量
- 5 照 褐色 コーム粒子少量、ローム中・小ブロック少量、ローム大ブロック・炭化・白色粒子少量
- 6 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック少量、炭化粒子少量
- 7 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック少量、白色粒子少量、焼上粒・炭化物・樹皮小ブロック少量
- 8 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子少量
- 9 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子少量
- 10 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、粘土中ブロック少量、炭化粒子・粘土小ブロック少量
- 11 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・樹皮少量
- 12 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック少量、白色粒子少量
- 13 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土粒子・白色粒子少量、炭化粒子・粘土中ブロック少量
- 14 照 褐色 コーム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・粘土中・小ブロック少量、炭化物少量
- 15 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・樹皮・粘土・小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 16 照 褐色 コーム粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土粒子少量（砂層内）
- 17 照 褐色 粘土中・中ブロック少量、粘土小ブロック少量、ローム粒子少量（硬化面）

所見 本跡は、底面に硬化面があり、道路として利用されたものと思われる。遺物はなく、正確な時期は不明である。

9 炭焼窯跡

当遺跡からは、炭焼窯跡が4基検出されている。以下、遺構番号順に記載する。

第1号炭焼窯跡(第76図)

位置 調査区北部、C3a区。

規模と平面形 長軸(3.98)m、短軸(2.53)mであるが、南西部が調査区外であるため正確な平面形は不明である。

主軸方向 N-138°-E

壁 壁高は32cm前後で、垂直に立ち上がり、一部外傾して立ち上がる。壁面は厚さ10cm前後の煉瓦により構築され熱を受け赤変している。

炭化室 平面形は長径2.95m、短径1.80mの楕円形で、天井部は崩落している。底面は平坦で、径10cm程の礎が敷き詰められ、焚口部付近は熱を受け赤変している。

焚口部 幅75cm、長さ62cmで、底面は粘土で熱を受け赤色硬化している。閉塞部は幅20cm、長さ20cmで、煉瓦により構築されている。

煙道部 奥壁中央に位置し、外傾して立ち上がる。

前庭部 北西部が調査区外のため正確な平面形は不明であるが、長径(2.25)m、短径(1.46)mの楕円形であると思われる。炭化材が散在している。

覆土 炭化室は、焼土を多量に含む赤褐色土と炭化物を多量に含む黒色土の2層で、煙道部は焼土・炭化物を多量に含む赤褐色土からなる人為堆積である。

土層解説

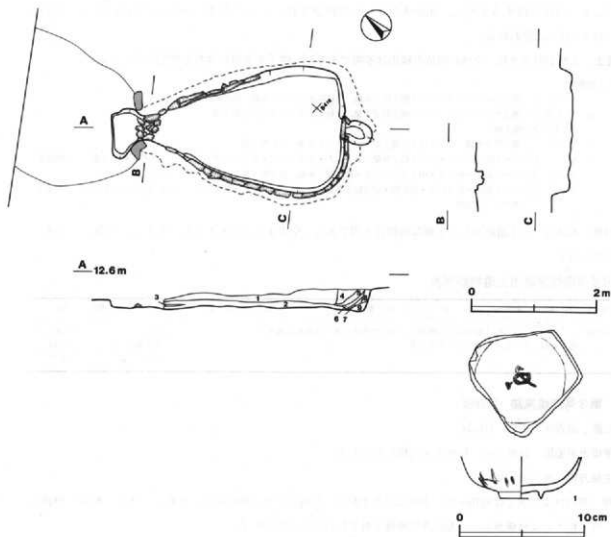
- 1 明赤褐色 焼土・中・小ブロック・焼土粒子・粘土大ブロック多量、炭化物少量
- 2 黒色 炭化材・炭化物・炭化粒子多量
- 3 灰褐色 灰多量、焼土大ブロック・炭化物少量
- 4 暗赤褐色 焼土大・中・小ブロック・炭1粒子多量、ローム粒子少量、炭化物少量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子多量、焼土中ブロック少量、焼土大ブロック少量
- 6 黒色 炭化物多量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 7 薄暗赤褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 8 黒褐色 炭化物・炭化粒子多量、ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子少量
- 9 暗赤褐色 ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量、ローム中・小ブロック中量、炭化物少量

遺物 覆土中から、第76図1の陶器の皿片のほか、鉢片、碗片が出土している。

所見 本跡は、開き込み調孔及び形状から、戦前の構築で、戦後まで使用されていたものである。

第1号炭焼窯跡出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徵	手法の特徵	粘土・色紙・状況	備考
第76図 1	皿	B(3.8)	底材から口縁部片。平底で高台は直立する。体部は内湾しながら立ち上がる。	体部大・外口縁ナデ。	赤褐色 灰白色 雲濁	P155、3056 P156 覆土中
		D 3.3				
		E 0.6				



第76図 第1号炭焼窯跡・出土遺物実測図

第2号炭焼窯跡 (第77図)

位置 調査区中央部, C2p区。

規模と平面形 長軸8.38m, 短軸4.97mの不定形である。

主軸方向 N-75°-W

壁 壁は削平され, 全容は不明であるが, 壁高が10cm前後で外傾して立ち上がる。壁面は, 山砂と粘土により構築されていたものと思われ, 熱により赤色硬化している。

炭化室 平面形は長径1.65m, 短径1.33mの楕円形で, 天井部は崩落している。底面は皿状で, 熱を受け赤変している。焚口部付近は特に熱を受け赤色硬化している。

焚口部 平面形は長径1.13m, 短径0.80mの楕円形で, 長径方向はN-18°-Wである。閉塞部は幅20cm, 長さ30cmの溝状である。

煙道部 奥壁中央部に位置し, 外傾して立ち上がる。

前庭部 平面形は長軸3.5m, 短軸2.4mの長方形で, 底面は平坦である。北東壁は削平されている。焚口部から南西方向に長軸1.7m, 短軸1.4mの長方形の張り出しを持つ。焚口部北東部に, 竈みがあり, 閉塞部に使用した粘土を握ねるためのものと考えられる。

ピット ほゞ全長するように、16か所のピットが確認されている。直径15～30cmの円形で、深さは20～40cmの柱穴と思われる。

覆土 上面が平坦され、全体の深位の様相は不明であるが、焼土を多量に含む赤褐色土からなる。

上層解説

- 赤褐色 焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量、山形粘土ブロック少量、炭化物少量
- 暗赤褐色 焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量、山形粘土ブロック・炭化物少量
- 赤褐色 焼土層
- 暗褐色 焼土粒子多量、ローム粒子、焼土中・小ブロック中量、炭化物少量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子少量、炭化物少量
- 赤褐色 ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子多量、炭化物中量、ローム大ブロック少量
- 茶色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子多量、ローム小ブロック・焼土小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土大・中ブロック少量

所見 本跡は、出土遺物がなく正確な時期は不明である。全周すると思われるピットから、上屋を持つものと思われる。

第2号炭焼窯跡出土遺物観察表

図号	引様	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	土色・土質・混成	備考
第78図	皿	A(11.2)	底面から皿縁部片。半円で休等は外	体部外野焼マテ。	灰石	P152. 25%
1	皿	B(2.1)	縁して立ち上がる。		明赤褐色 付着	P125 炭土

第3号炭焼窯跡(第78図)

位置 調査区南西部、D1a区。

規模と平面形 長軸7m、短軸2mの楕円形である。

主軸方向 N-97°-W

壁 壁高は炭化室では約76cmで、垂瓦に立ち上がり、前庭部では、約75cmで、外傾して立ち上がる。壁面は山砂と粘土により構築され、瓦片等で補強されていたものと思われる。

炭化室 平面形は長径2.47m、短径1.48mの楕円形で、天井部は崩落している。底面は平坦で硬くしまっている。

焚口部 長軸約80cm、短軸約70cmの方形で、底面は皿状である。閉塞部は幅42cm、長さ34cmで、両袖を粘土で構築し瓦等で補強している。

煙道部 奥壁中央部に位置し、ほぼ垂直に立ち上がる。

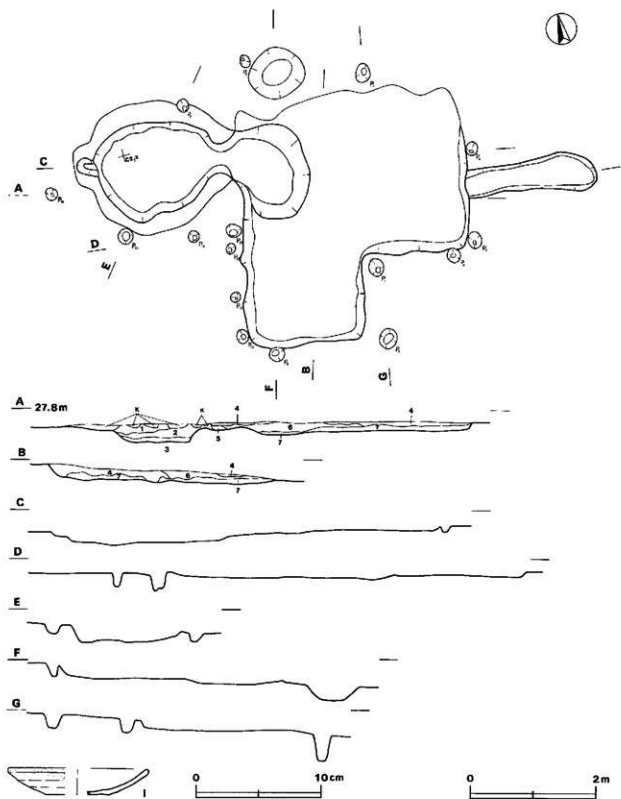
前庭部 平面形は長径2.65m、短径2.15mの楕円形で、底面は皿状で、東部はスロープ状に立ち上がる。北壁には、閉塞部に使用する粘土を握るための場所と思われる窪みがある。

覆土 8層からなる人為堆積で、1・5層は崩落後の堆積、2層は壁及び天井部の崩落土、3層は炭の堆積である。6・7層は使用中の堆積及び踏み固めで、特に7層はよく硬化している。

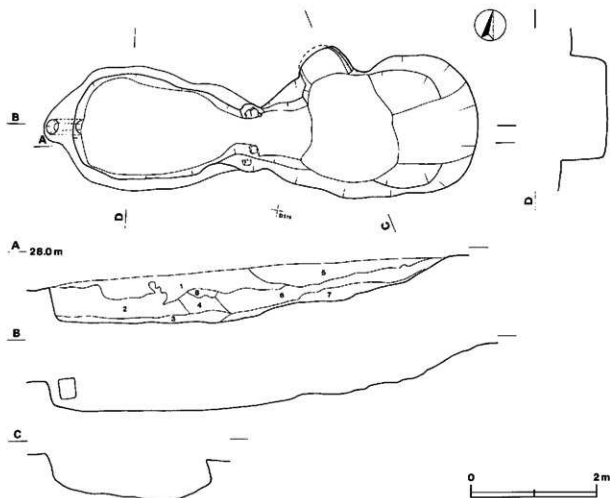
上層解説

- 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土大・中ブロック・炭化物・炭屑・バミスブロック・山形粘土ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 明赤褐色 山形粘土ブロック多量、粘土層(明赤褐色)多量、山砂層多量
- 紫褐色 炭化物多量
- 赤褐色 焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・山形粘土ブロック多量
- 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物中量、鹿沼バミスブロック少量、焼土大・中ブロック少量
- 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化物多量、ローム大ブロック・鹿沼バミスブロック・粘土ブロック少量
- 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・鹿沼バミスブロック中量、焼土大・中ブロック少量
- 明赤褐色 壁構築材崩落ブロック

所見 本跡は、出土遺物がなく正確な時期は不明である。



第77图 第2号炭烧窯跡・出土遺物実測図



第78図 第3号炭焼窯跡実測図

第3号炭焼窯跡出土遺物観察表

図号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色裏・焼成	備考
第5区 1	外 磁 甕	A [32.0] B 15.5 D [13.8] H 1.7	口縁から口縁部へ。平底で、土台は直立する。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	内面・外面横ナデ。	長石 緑灰色・灰白色 普通	P149, 25% P125 覆土中
2	炭 甕	A [33.6] 径(5.5)	口縁部片。平底で体部は内傾し、口縁部は外反する。	体部内・外面横ナデ。	灰褐色 普通	P153, 5% P123 覆土中

第4号炭焼窯跡 (第80図)

位置 調査区南西角, E1_g区。

規模と平面形 長径5.62m, 短径2mの楕円形であるが, 前庭部は削平され不明である。

長径方向 N-11°-W

壁 壁高は60cm前後で, 垂直に立ち上がる。山砂と粘土により構築され, 瓦等で補強していたと思われる。

炭化室 平面形は長径3.45m, 短径1.72mの楕円形で, 底面は平坦である。

焚口部 長径1.67m、短径1.30mの楕円形で、底面は皿状で、北部はスロープ状の傾斜を持つ。西部には、閉塞に使われる粘土を控える場所と思われる窪みがある。閉塞部の掘り方は幅60cm、長さ45cmである。

煙道部 奥壁中央部に位置し、垂直に立ち上がる。

覆土 6層からなる人為堆積で、1層は崩落後の堆積土、2層は天井部及び壁面の崩落層、3層は炭の残りと思われる。

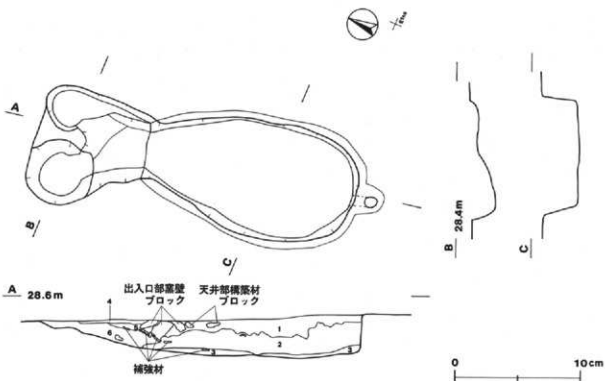
土層解説

- 1 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土大ブロック・炭化物・鹿沼パミスブロック少量
- 2 明黄褐色 山砂・粘土多量、炭化物少量
- 3 赤褐色 山砂・粘土多量、炭化物少量
- 4 黒色 炭化物多量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物炭化粒子少量、焼土中ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物中量、ローム大ブロック・焼土大ブロック少量

所見 本跡は、遺物がなく正確な時期は不明である。



第79図 第3号炭焼窯跡出土遺物実測図



第80図 第4号炭焼窯跡実測図

10 ビット群

当遺跡からは、2か所のビット群が検出されている。建物あるいは櫓列等の可能性があるが、対応関係を把握することができなかったため、ここではビット群として扱う。以下、その特徴について記載する。

第1号ビット群（第81図）

位置 調査区中央部、斜面突出部、B3₁₈区付近

規模 東西約12m、南北約8mの範囲に12か所のビット（P₁～P₁₂）を確認した。ビットの平面形は、径30～50cmの円形あるいは楕円形と長軸3～3.5m、短軸40cm程の溝状で、深さは15～35cmである。

覆土 ロームを多量に含む褐色土の1層で、埋め戻しと思われる。

所見 本跡は、ビット間の対応関係が把握できない。また、出土遺物がないため、正確な時期及び性格は不明である。

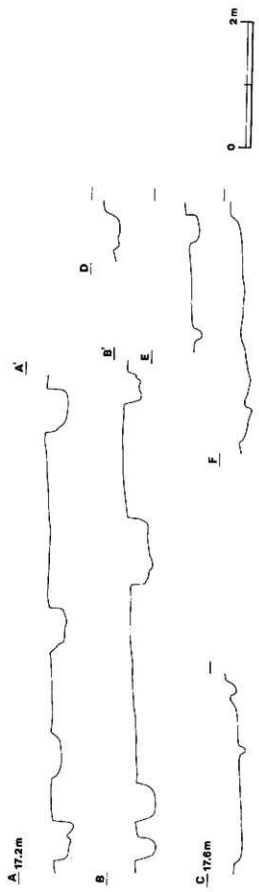
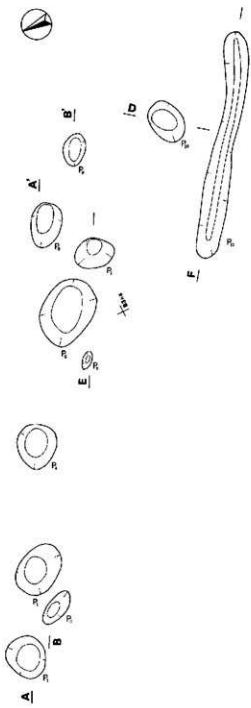
第2号ビット群（第82図）

位置 調査区南東部、D2₄区付近

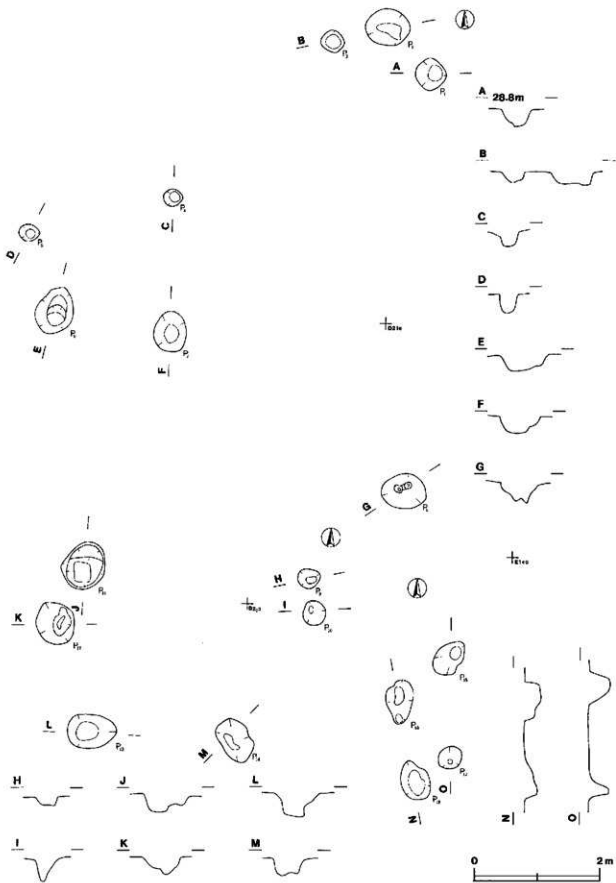
規模 東西約17m、南北約12mの範囲に18か所のビット（P₁～P₁₈）を確認した。ビットの平面形は、径25～70cmの円形あるいは楕円形で、深さは17～35cmである。

覆土 ローム粒子を含む黒褐色土と、ロームを多量に含む暗褐色土の2層からなる自然堆積である。

所見 本跡は、ビットの間隔が不規則であり、対応関係も把握できないため性格は不明である。また、出土遺物がなく、時期も不明である。



第81図 第1号ピット群実測図



第82図 第2号ピット群実測図

11 不明遺構

当遺跡からは、不明遺構が2基確認されている。以下、遺構番号順に記載する。

第1号不明遺構（第84区）

位置 調査区北部、A4区～B4区。

重複関係 本跡が第1号井戸及び第1～4号方形竪穴遺構の上向を削平している。

規模と平面形 北西部及び南東部が調査区外のため正確な平面形は不明であるが、長軸（8.50）m、短軸（6.00）mの「長方形」の範囲に硬化面が確認され、その中にピットが集中している。

長軸方向 N-43°-W

ピット 89か所（P～P₈₉）。径20～50cmの円形及び楕円形で、深さは15～40cmである。長方形の範囲に配置されているが、対応関係及び性格は不明である。

炉 灰跡と思われる焼土と灰の範囲が2か所確認されている。第1号炉はほぼ中央部に位置し、長軸1.75m、短軸1.06mの不定形で、焼沼バミス土を貼り付けて構築している。掘り方は、確認面から約30cm皿状に掘り穿められている。第2号炉は第1号炉の北東部に位置し、長軸1.20m、短軸0.93mの不定形で、底面は熱を受けて赤色硬化し、その周囲には灰による高まりがある。

炉裏土層解説

第1号炉

- 1 焼 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼沼バミス粒子中量、ローム中ブロック・焼沼バミス小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・焼沼バミス大・中ブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子・炭土中・小ブロック・焼土粒子・焼沼バミス粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土大ブロック・焼沼バミス大・中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼沼バミス粒子多量、焼沼バミス小ブロック中量、ローム大ブロック・焼沼バミス大・中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 灰赤褐色 灰多量、焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子・焼土大・中ブロック・焼沼バミス粒子少量
- 5 暗 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、焼土大ブロック・焼沼バミス大・中・小ブロック・焼沼バミス粒子・小礫少量
- 6 暗 褐色 焼沼バミス粒子・砂粒多量、焼土中ブロック・焼土粒子・焼沼バミス大・中・小ブロック・小礫少量

敷土 硬化面の土層の様相は、ロームを多量に含む暗褐色土で、人為堆積である。

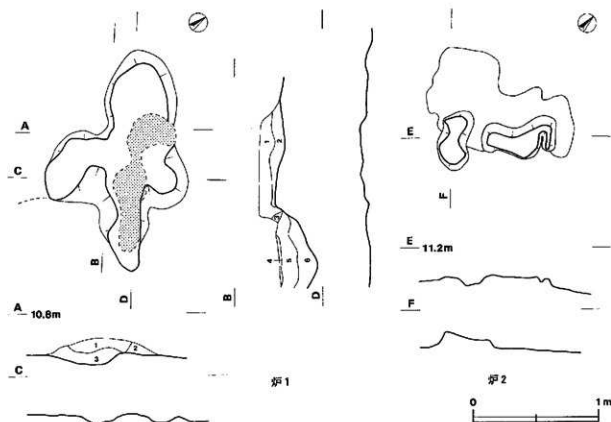
土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子・焼沼バミス粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子多量、焼沼バミス粒子中量、ローム中・小ブロック・焼沼バミス中・小ブロック少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・焼沼バミス大ブロック微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック・焼沼バミス粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、スコリア粒子微量
- 5 暗 褐色 ローム粒子多量、焼沼バミス粒子中量、ローム中・小ブロック少量
- 6 暗 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼沼バミス粒子・小礫少量
- 7 暗 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼沼バミス粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・焼沼バミス小ブロック・小礫少量
- 8 暗 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭化物・焼沼バミス大・中・小ブロック・焼沼バミス粒子少量、炭化粒子微量
- 9 暗 褐色 ローム粒子・焼沼バミス粒子多量、ローム中・小ブロック・焼沼バミス大・小ブロック・小礫少量、焼沼バミス大ブロック微量
- 10 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼沼バミス粒子多量、スコリア粒子中量、ローム中ブロック・焼沼バミス大・小ブロック・小礫少量
- 11 暗 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・スコリア粒子・小礫少量、ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 12 暗 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・焼沼バミス粒子少量、炭化粒子・砂粒微量
- 13 暗 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼沼バミス粒子中量、ローム中ブロック・焼沼バミス中・小ブロック・灰少量、焼土粒子・炭化粒子・焼沼バミス大ブロック微量
- 14 暗 褐色 焼沼バミス小ブロック・焼沼バミス粒子多量、焼沼バミス中ブロック中量、ローム粒子・焼沼バミス大ブロック少量、炭化物微量
- 15 暗 褐色 ローム粒子・焼沼バミス大・中・小ブロック・焼沼バミス粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土大・中・小ブロック・炭化粒子微量
- 16 暗 褐色 焼沼バミス大・中・小ブロック・焼沼バミス粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土大・中・小ブロック・炭化粒子微量

- 17 視 色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・炭屑バミス大・中・小ブロック・スコリア粒子等混
- 18 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック少量
- 19 品 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 20 昏 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭屑バミス粒子少量
- 21 黒 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子・炭屑バミス粒子少量、炭化物・スコリア粒子微量
- 22 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・炭屑バミス粒子少量、ローム大ブロック・炭化粒微量
- 23 黒 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 掃帚片1点、土師質土器片1点が覆土中から出土している。

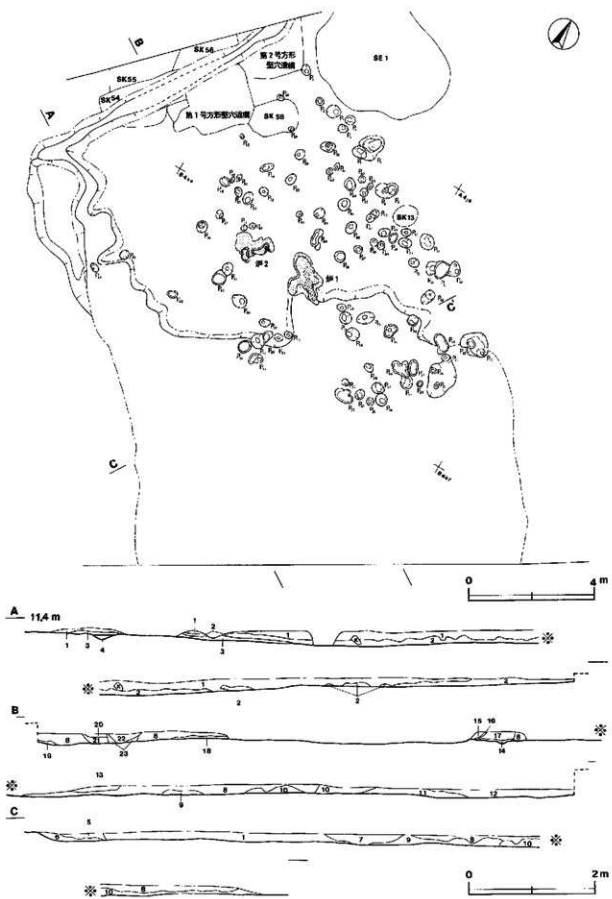
所見 本跡は、硬化面とピットからなるが、ピットの対応関係が不明確であるため性格は不明である。近世の住居跡である可能性も考えられる。



第83図 第1号不明遺構炉1・炉2実測図

第1号不明遺構出土遺物観察表

図番	器種	寸法(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・状態	備考
第83図 1	掃帚 土師質一系	A(25.0) B(5.3)	口縁部片、口縁部は外傾して立ち上がる。	体部内・外立輪ナシ。内面に4×1単位の刷目。	長石、針状炭化灰黄褐色 赤褐色	P119, 5% P125 覆土中



第84图 第1号不明遺構実測図

第2号不明遺構（第85図）

位置 調査区北部，B4a区。

規模と平面形 平面形は長径5.77m，短径3.00mの不整楕円形で，深さは30～50cmで，底面には凹凸がある。

壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

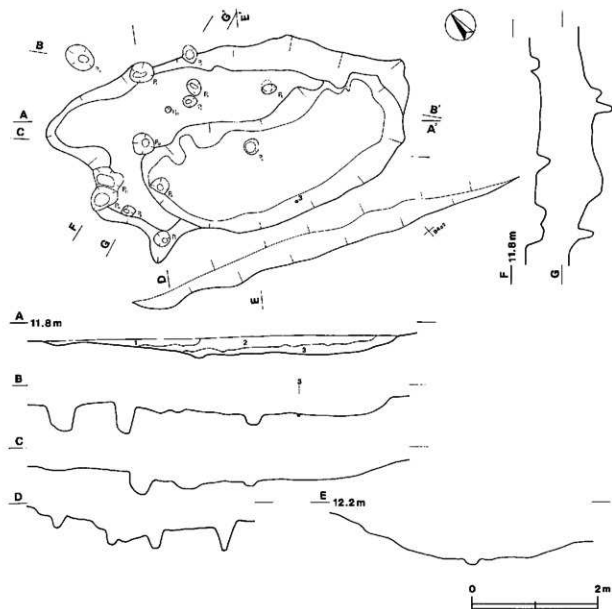
長径方向 N-53°-W

ピット 14か所（P₁～P₁₄）。長径25～50cm，短径17～37cmの円形及び楕円形で，深さは15～50cmである。柱穴とは考えにくく，性格は不明である。

覆土 ローム，鹿沼バミスを含む暗褐色土の3層からなる人為堆積である。

土層解説

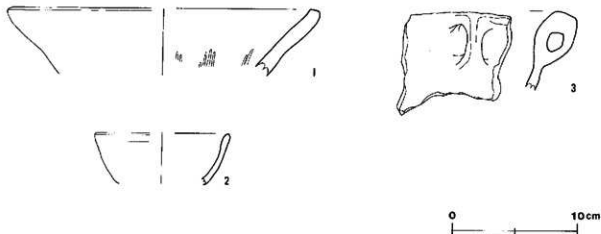
- 1 暗褐色 コーム粒子・鹿沼バミス・黒色土粒少量
- 2 暗褐色 コーム粒子・鹿沼バミス・黒色土ブロック少量
- 3 暗褐色 褐色砂粒少量



第85図 第2号不明遺構実測図

遺物 流れ込みと思われる弥生土器片、土師質土器片が覆土中から出土している。第85図3は、内耳銅の口縁部片で、南部床面直上から出土している。

所見 本跡からは時期を特定できる出土遺物がなく、形状からみても時期や性格は不明である。



第86図 第1・2号不明遺構出土遺物実測図

第2号不明遺構出土遺物観察表

実測号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	出土・色調・焼成	備考
第86図 2	土器	A(10.8) B(4.1)	体部・口縁部片。体部はわずかに内彎しながら外傾する。	体部内・外面横ナデ。	灰石・石英・スコリア・燻・普通	P120 20% 覆土中 P1.25
3	内耳銅土師質土器	B(8.1)	口縁部片。体部から口縁部くの字状に外傾して立ち上がる。	体部・口縁内外面横ナデ。	石英・砂粒・スコリア・灰褐色青濁	P121 PL25 10% 覆土中

12 旧石器時代の遺物

当遺跡における旧石器時代の調査は、D2cを基点とし、南に16m、東に4mの範囲に4m×4mの4つのグリッドを設定し調査した。その後、遺物が出土した地点を中心に拡張し第5層まで調査を進めた。

調査の結果、石器等の遺物が129点出土している。これらの遺物は、ほとんどが1か所から集中して出土しており、調査区中央部の標高約28mの平坦な台地上に位置する。以下、接合資料及び主な石器について記述し、他は一覧表に記載する。

第1号石器集中地点

位置 調査区の中央部、D2a区を中心に出土している。出土遺物の平面分布及び垂直分布については第94・95図に示したとおりである。

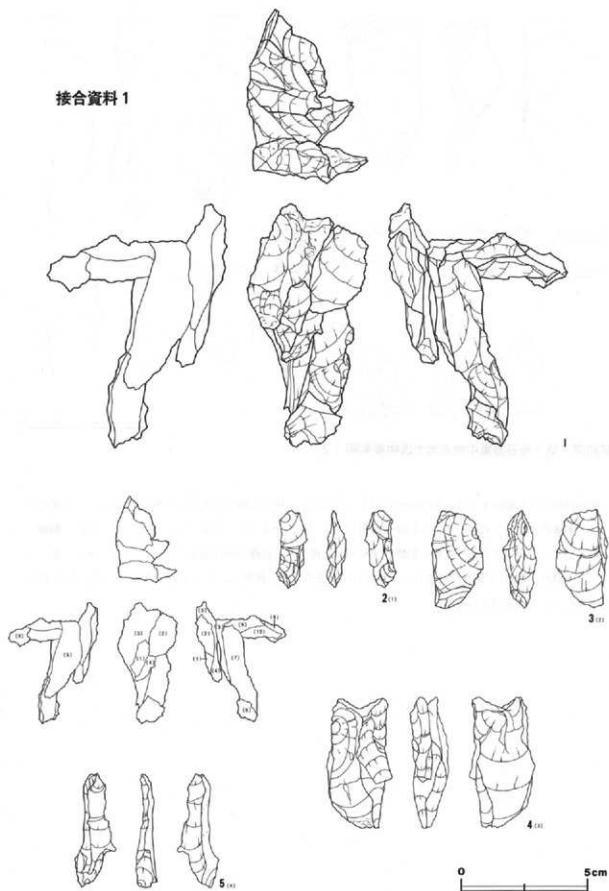
規模 7号器集中地点は、D2a区を中心に北東方向に5.5m、北西方向に4mの楕円形の範囲である。北東部の礫石が出土している地点周辺が、特に密である。

確認土層 確認面から深さ50cm、鹿沼バミス土層のハードルーム層（第5層）で確認された。

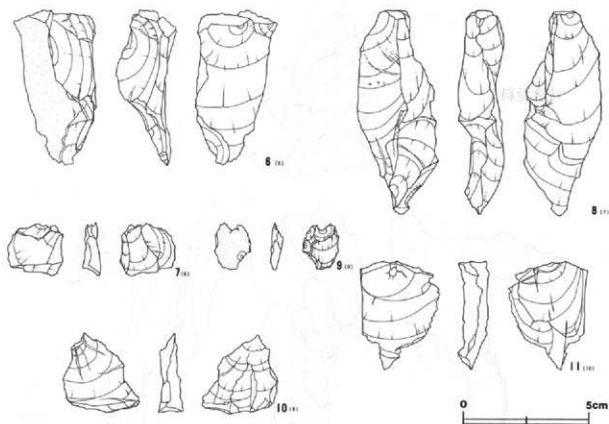
遺物 本石器集中地点からの出土遺物総数は132点である。内訳はナイフ形石器9点、鍔集線石器2点、台形礫石器・割器1点、剥片97点、敲石4点で、石質はメノウ101点、安山岩29点、凝灰岩3点である。接合資料は3点で、第87図1・第89図12・第90図18はメノウの剥片の接合資料である。第91図24～32はナイフ形石器、33～36は微細剥離のある剥片で、第92図38・39は鍔集線石器、第91図37は台形礫石器、第92図41は割器である。いずれも確認土層中から出土している。

所見 本石器集中地点は、剥片が主体で、ハンマーが出土していることから、石器の製作跡的な性格を持つものと考えられる。

接合資料 1

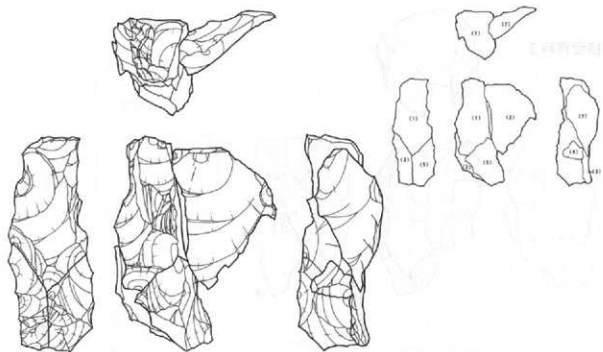


第87图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(1)



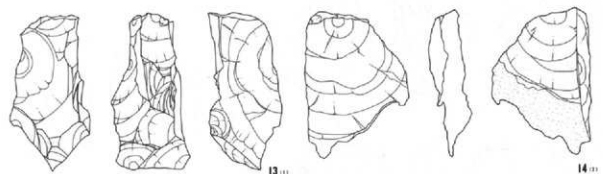
第88図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(2)

接合資料1(第87図1)は、A2a区から出土したもので、10点の割片が接合し自然面が残る。自然面を打面として剥離作業を行った後、上方へ打面を移動し、2(1)→3(2)→4(3)→5(4)の順に剥離している。次に、打面を左に90°移動し剥離作業を行った後、その剥離面を打面として、6(5)→7(6)→8(7)の他数枚の割片の剥離作業を行い、さらに打面を右に90°移動し、9(8)→10(9)→11(10)の剥離作業を行ったものと考えられる。



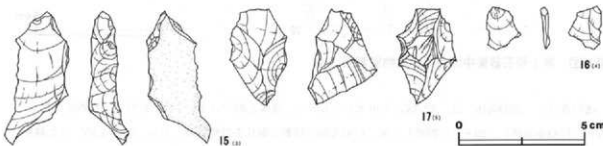
接合資料 2

12



13 (1)

14 (1)



15 (1)

17 (1)

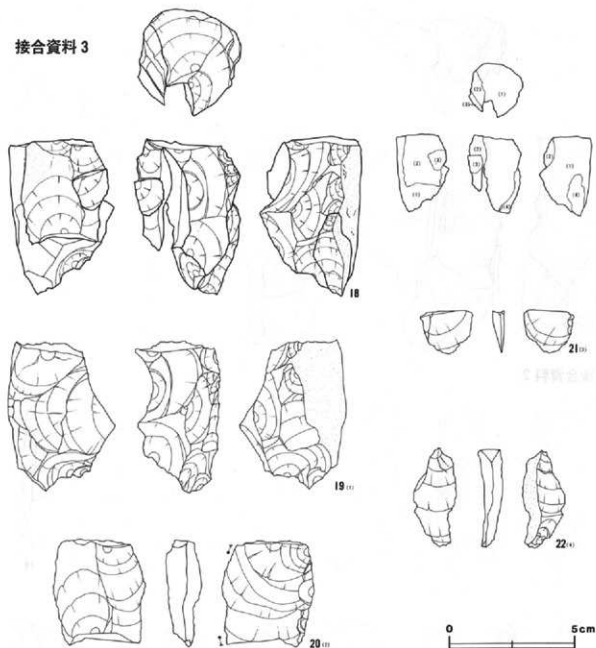
16 (1)



第89図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(3)

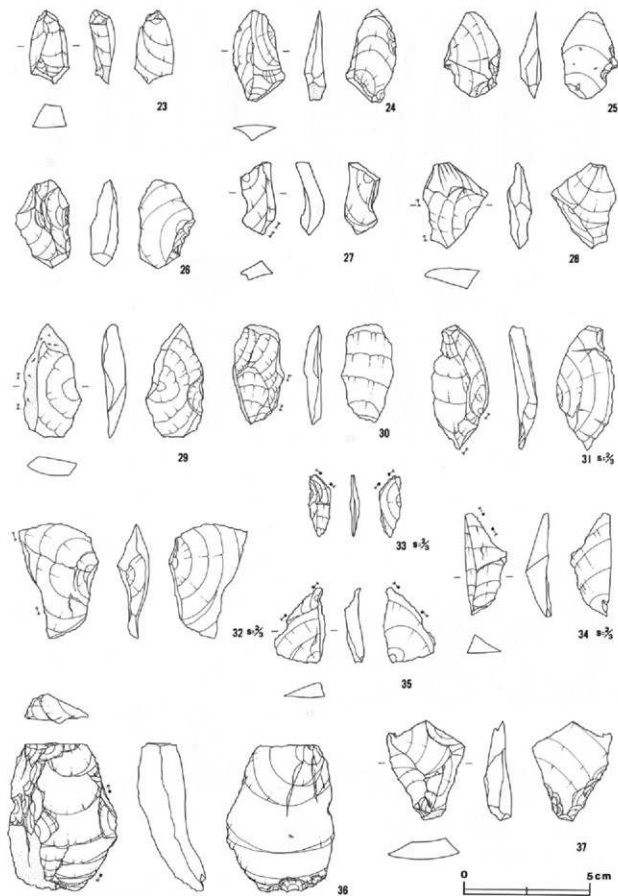
接合資料2(第89図12)は、A2₆区から出土したもので、6点の割片が接合し、13(1)・17(5)は、厚さ2cm前後の板状の石核の末端部であると考えられる。14(2)の割片は、自然面を打面として剥離された後、母岩から剥離されたものと考えられる。15(3)の剥離作業面から90°打面移動して、16(4)の剥離を行い、その際に13(1)と17(5)が剥離されたものと思われる。

接合資料 3

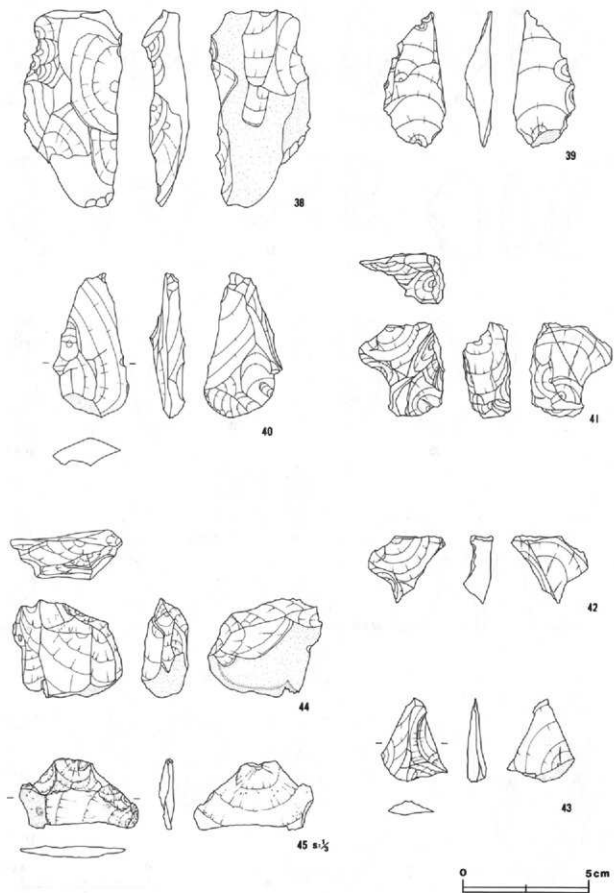


第90図 第1号石器集中地点出土物実測図(4)

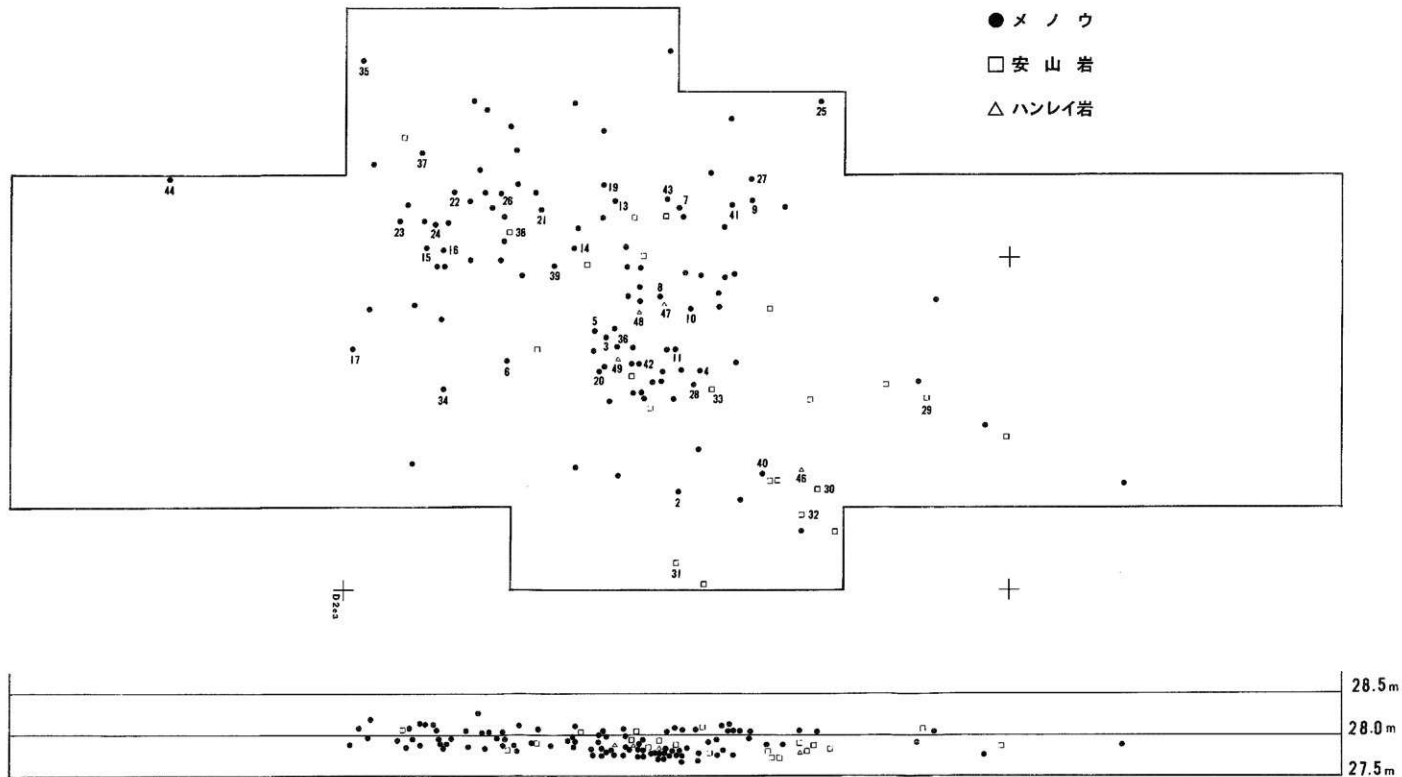
接合資料3(第90図18)は、A2区から出土したもので、残核と剥片の4点の接合資料で、自然面に対し直角に打面を調整し、20・21を剥離した後、打面を90°移動し剥片を数枚剥離した後、打面を90°下に移動させて、22の他数枚の剥片を剥離したものと考えられる。



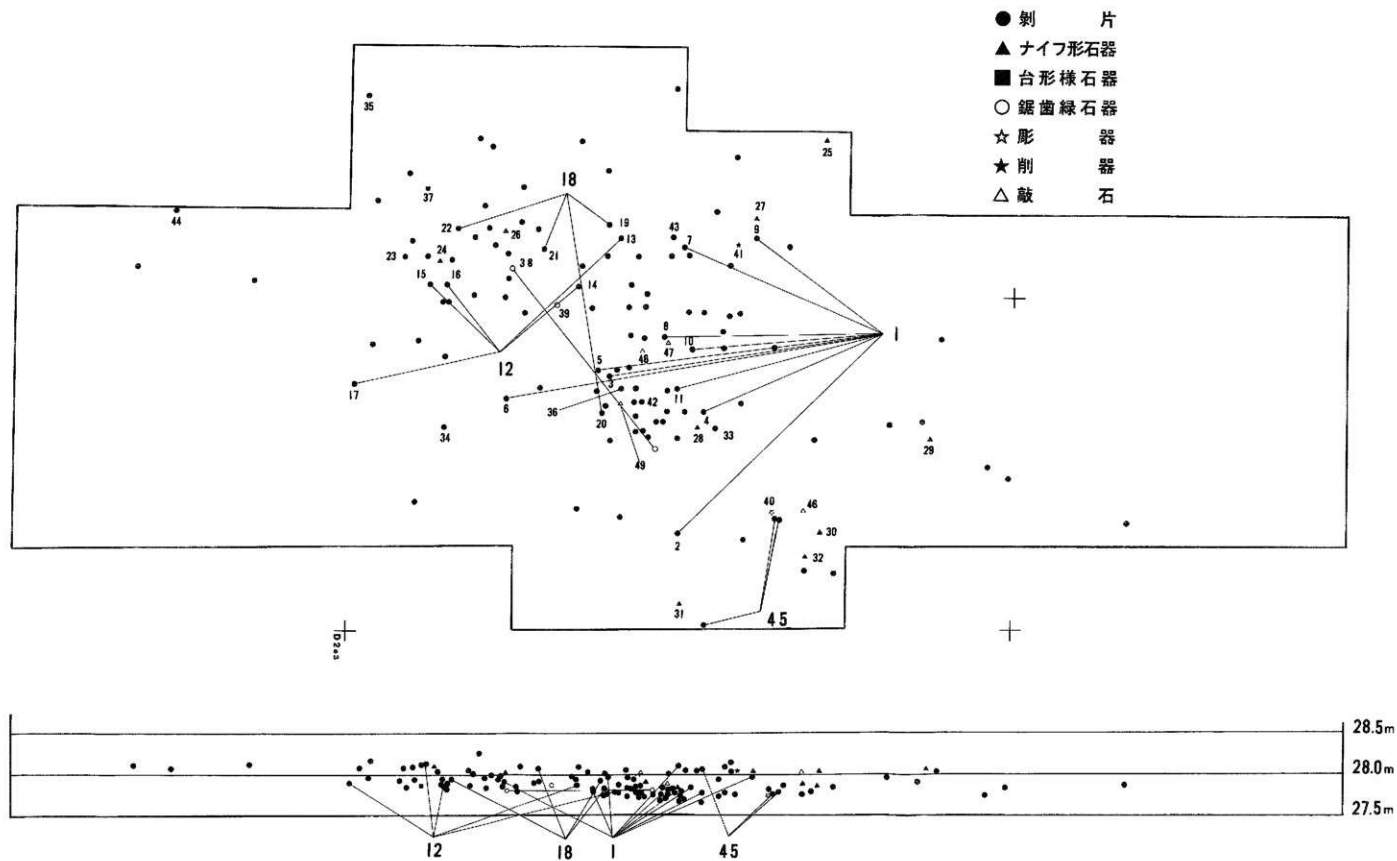
第91图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(5)



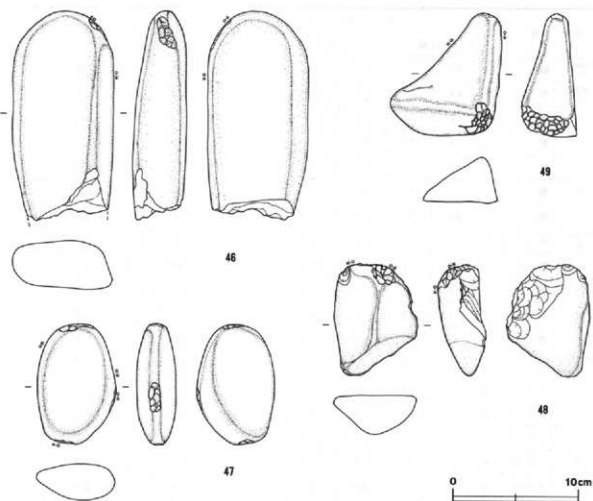
第92图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(6)



第93図 第1号石器集中地点平面図



第94図 第1号石器集中地点平面図



第95図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(7)

第1号石器集中地点出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第87図 1	接合資料	9.7	7.2	4.9	114.5	※ / ウ	Q38 接合資料1 P.L.28
2	割片	2.1	2.1	0.7	1.8	※ / ウ	Q38 (1) P.L.28
3	割片	3.1	1.2	0.8	1.8	※ / ウ	Q38 (2) P.L.28
4	割片	3.8	2.1	1.4	8.1	※ / ウ	Q38 (3) P.L.28
5	割片	5.2	2.7	1.6	21.9	※ / ウ	Q38 (4) P.L.28
第88図 6	割片	4.6	1.6	0.8	2.7	※ / ウ	Q38 (5) P.L.28
7	割片	6.2	3.2	2.4	27.3	※ / ウ	Q38 (6) P.L.28
8	割片	8.1	3.1	1.9	31.2	※ / ウ	Q38 (7) P.L.28
9	割片	1.6	1.8	0.5	1.0	※ / ウ	Q38 (8) P.L.28
10	割片	3.2	3.0	1.0	7.2	※ / ウ	Q38 (9) P.L.28

図版番号	種別	寸法(mm)				質量(g)	材質	備考
		長さ	幅	厚さ	質量			
第88図 11	割片	3.2	4.3	1.2	11.4	メノウウ	Q88 (10) P.L.28	
第89図 12	接合資料	8.5	5.4	3.4	113.3	メノウウ	Q89 接合資料2 P.L.28	
13	割片	6.7	3.2	3.2	60.5	メノウウ	Q89 (1) P.L.28	
14	割片	5.8	4.2	2.2	24.7	メノウウ	Q89 (2) P.L.28	
15	割片	5.4	2.5	1.7	11.3	メノウウ	Q89 (3) P.L.28	
16	割片	1.7	1.3	0.4	0.5	メノウウ	Q89 (4) P.L.28	
17	割片	3.8	2.3	2.8	16.3	メノウウ	Q89 (5) P.L.28	
第90図 18	接合資料	6.2	4.2	4.2	94.2	メノウウ	Q40 接合資料3 P.L.29	
19	割片	6.0	4.2	3.3	70.5	メノウウ	Q40 (1) P.L.29	
20	割片	3.9	1.7	1.0	3.6	メノウウ	Q40 (2) P.L.29	
21	割片	1.7	2.0	0.5	1.8	メノウウ	Q40 (3) P.L.29	
22	割片	4.2	3.7	1.5	18.8	メノウウ	Q40 (4) P.L.29	
第91図 23	割片	2.9	1.6	1.0	4.1	メノウウ	Q41 P.L.30	
24	ナイフ形石器	3.7	2.0	0.9	4.3	メノウウ	Q42 P.L.30	
25	ナイフ形石器	3.5	2.3	0.9	4.3	メノウウ	Q44 P.L.30	
26	ナイフ形石器	3.5	2.2	1.1	5.9	メノウウ	Q55 P.L.30	
27	ナイフ形石器	2.9	1.3	1.1	2.2	メノウウ	Q56 P.L.30	
28	ナイフ形石器	3.4	2.5	0.9	5.6	メノウウ	Q67 P.L.30	
29	ナイフ形石器	4.5	2.2	0.9	8.1	ガラス質黒色安山岩	Q58 P.L.30	
30	ナイフ形石器	4.0	2.0	0.8	5.14	ガラス質黒色安山岩	Q59 P.L.30	
31	ナイフ形石器	4.9	2.3	1.2	9.1	ガラス質黒色安山岩	Q60 P.L.30	
32	ナイフ形石器	4.6	3.1	1.3	13.1	ガラス質黒色安山岩	Q61 P.L.30	
33	割片	2.5	0.8	0.4	0.6	ガラス質黒色安山岩	Q62 磨削面有 P.L.30	
34	割片	4.1	1.6	1.0	2.9	メノウウ	Q63 磨削面有 P.L.30	
35	割片	3.0	2.0	0.7	2.6	メノウウ	Q64 磨削面有 P.L.30	
36	割片	5.8	4.3	2.7	43.9	メノウウ	Q43 磨削面有 P.L.30	
37	合形標石器	4.0	3.1	1.1	7.7	メノウウ	Q45 P.L.30	
第92図 38	鋸歯状石器	7.9	3.9	1.9	49.7	ガラス質黒色安山岩	Q46 P.L.30	
39	歯状石器	5.4	2.4	1.3	9.3	メノウウ	Q65 P.L.30	
40	形器	5.8	3.0	1.4	14.7	メノウウ	Q47 P.L.30	
41	削器	3.7	3.3	1.9	16.5	メノウウ	Q65 P.L.30	
42	割片	2.7	3.1	1.1	4.2	メノウウ	Q66 (1) P.L.30	

採取番号	種別	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(cm)		
第92区 43	割	3.3	2.6	0.8	3.7	メノウ	Q46 P.L.30
44	石板	4.0	4.6	1.9	35.2	ガラス質黒色火山岩	Q49 P.L.30
45	割片	5.5	9.5	1.2	43.5	ガラス質黒色火山岩	Q50 P.L.30
第95区 46	割	16.6	8.1	4.3	955.6	ハンレイ岩	Q51 P.L.29
47	割	9.5	6.4	3.2	301.5	ハンレイ岩	Q52 P.L.29
48	板	9.0	6.7	4.0	217.7	ハンレイ岩	Q53 P.L.29
49	割	9.8	8.9	4.4	316.2	ハンレイ岩	Q54 P.L.29

13 遺物包含層

第1号遺物包含層は、調査区北部の低位段丘の傾斜部A4区付近に位置し、幅2m、長さ約60mのトレンチを調査区沿いに「コ」の字型に設定し、掘り込んだ結果確認された。

堆積する層は、基本的に4層に分かれるが、第1層及び第3層は含有するロームの量の差異によりさらに2層に分けられる。

遺物は、第1・第2層から出土しており、第3層以下からは出土していない。縄文時代前期の上器片、弥生時代後期後半の上器片、土製器、土師質土器、陶器片で年代層があり、量的には非常に少ない。そのため、第1号遺物包含層の調査は、トレンチ調査で終了した。

第2号遺物包含層は、調査区北部の中位段丘上B4区付近に位置し、幅2m、長さ約40mのトレンチを調査区沿いに設定し、掘り込んだ結果確認された。

堆積する層は、4層からなり、第2層は含有物の差異によりさらに2層に分けられる。

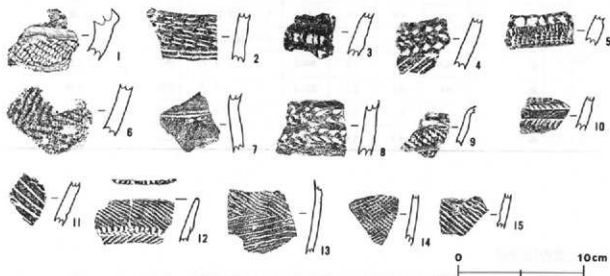
遺物は、第1層から弥生時代後期後半の上器片が主体をなし、第2層からは縄文土器片を主体に遺物が出土している。第3層以下は遺物がなく、第1号遺物包含層同様にトレンチ調査で終了した。

第2号遺物包含層の堆積状況は、谷状を呈しており、谷部に土砂が流入して形成されたものと考えられる。また、層序が第1号包含層と近似していることから、両号包含層は、ほぼ同時期に形成されたものと考えられ、その時期は、第2層から縄文土器片が出土していることから、それ以前の時期と推定される。

出土遺物

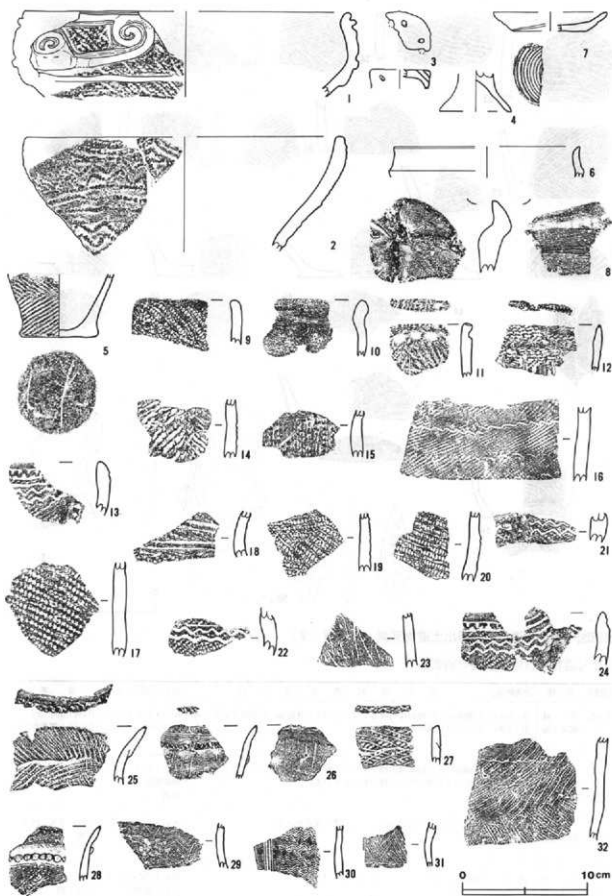
第96図1～15は第1号遺物包含層から出土した縄文土器片・弥生土器片の拓印図である。1～11は、縄文土器片である。1は胴部片で、耳筋縄文LR地文に横方向の太い沈線が施されている。2は胴部片で、半截竹管による短い平行沈線による文様が施されている。3は胴部片で、棒状工具による押圧がなされている。4・5は胴部片で、半截竹管により文様が構成されている。6は胴部片で、耳筋縄文LRにより羽状構成がなされている。7は口縁部直下で、横方向の半截竹管による文様が構成されている。9は胴部片で、耳筋縄文LRが施されている。10は胴部片で、磨消帯の上下に刻みが施されている。11は胴部片で、斜め方向の沈線が施されている。12～15は弥生土器片である。12は口縁部片で、複合口縁に附加突一種(附加2条)の縄文が施され、段

の下端には縄文原体による押圧がある。13は胴部片で、附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。14は胴部片で、附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。15は胴部片で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。

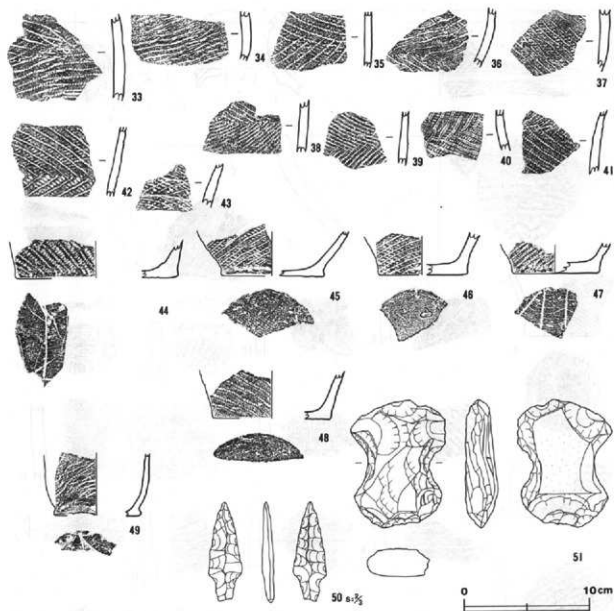


第96図 第1号遺物包含層出土遺物拓影図

第97図8～32は、第2号遺物包含層から出土した縄文土器片、弥生土器片の拓影図である。8～24は縄文土器片である。8～12は口縁部片で、8には扇状になると思われる突起が付く。9には無節の縄文が施されている。10・11には棒状工具による押圧がある。12には貝殻腹縁による文様が構成されている。13・24の文様帯は交互刻突文と鋸歯状文により構成されている。14～23は胴部片で、14には無節の状文が施されている。15には半截竹管による押圧がある。16には単節縄文LRの地文に縄文原体による押圧がある。17には単節縄文RLが施されている。18には半截竹管により横方向の文様が施されている。19には単節縄文RLが施されている。20には単節縄文RLが施されている。21・22には単節縄文LRの地文に鋸歯状文が施されている。23には荒い条線が施されている。25～49は弥生土器片で、25～28は口縁部片で、25は複合口縁で、附加条一種（附加2条）の縄文が施されている。28は口縁部が無文で、下端に隆帯が1条廻り、隆帯上には棒状工具による押圧がある。26の外面上には隆帯が1条廻り、内面には櫛歯状工具による波状文が施されている。27には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。29～31は頸部片で、30は縦区画に波状文が施されている。29には連弧文が施され、31には山形文が施されている。32・第98図33～43は胴部片で、32～37・42・43には附加条二種（附加1条）の縄文が施されている。38～41には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。44～49は底部片で、44～46・48には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、44には木葉痕が、45には布目痕がある。47には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、底部には木葉痕がある。49には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、底部には木葉痕がある。



第97图 第2号遺物包含層出土遺物実測・拓影图(1)



第98図 第2号遺物包含層出土遺物実測・拓影図(2)

第2号遺物包含層出土遺物観察表

図号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	深鉢 縄文土器	A〔26.1〕 B〔6.8〕	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。外面は、単距縄文LRと縷帯により文様が施されている。	長石・石英・雲母 にふい椀 普通	P108, 5% PL26 B4区上部黒色土層
2	深鉢 縄文土器	A〔25.4〕 B〔9.2〕	口縁部片。口縁部は内彎して立ち上がる。胴部外面には半載竹管により斜め及び横方向の文様が施されている。	長石・石英・砂粒 明赤褐色 普通	P100, 5% PL26 褐色土層
3	蓋 弥生土器	F〔4.6〕 G〔1.5〕	つまみ部片。上面は平坦で、4か所の穿孔がある。	長石・石英・砂粒 灰黄色 普通	P100, 5% PL26 上層
4	高坏 弥生土器	D〔5.8〕 B〔3.0〕	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	長石・石英・雲母・ 砂粒 灰黄褐色 普通	P161, 20% PL26 2区上層

品番	部 種	計測値(m)	面 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎上・色調・焼成	備 考
第97回 5	壺 弥生土器	B(5.0) C 5.8	底部から胴部が、可成り、胴部は外傾して立ち上がる。胴内外面には附如象・棒（附加2条）の線文が施され、羽状構成をとる。	長心・心実 褐色 普通	P165, 10% 土33黒色土器

品番	部 種	計測値(m)	面 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎上・色調・焼成	備 考
第97回 6	環 土 師 器	A(14.8) B(2.5)	口縁部平。体部と口縁部の境に線がある。口縁部はやや外反する。	体部内・外両面ナデ。	長石・スコリア・ にふい赤褐色 普通	P164, 10% 土層 P.L.26
7	口 土師質土器	A: 8.1 B 1.5 C(5.8)	底部から口縁部、半円で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外両面ナデ。底部同軸糸切り。	長石・石英・窒石 にふい赤褐色 普通	P163, 20% 褐色土層 P.L.26

品番	種 別	計 測 値 (cm)			重量 (g)	現存率(%)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第98回 30	有蓋尖底器	5.9	1.4	0.5	(1.9)	95	安山岩	Cba区	G31, 褐色土層 P.L.34
51	打製石片	10.2	7.6	2.6	232.9	100	砂 岩	南側トレンチ	G32, 土層 P.L.34

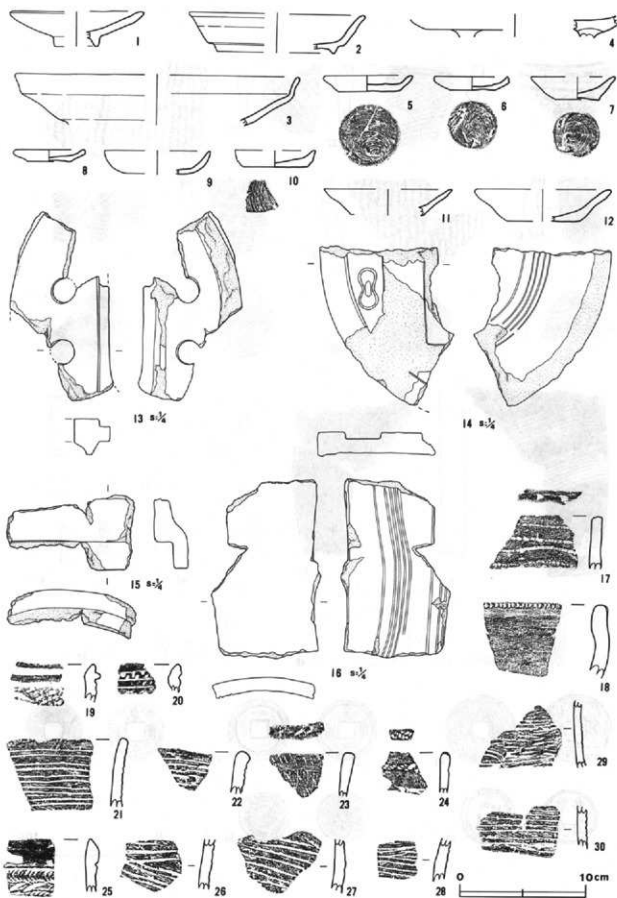
14 遺構外出土遺物

当遺跡の遺構外からは、縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは主な遺物を記載する。
(第99・100図)

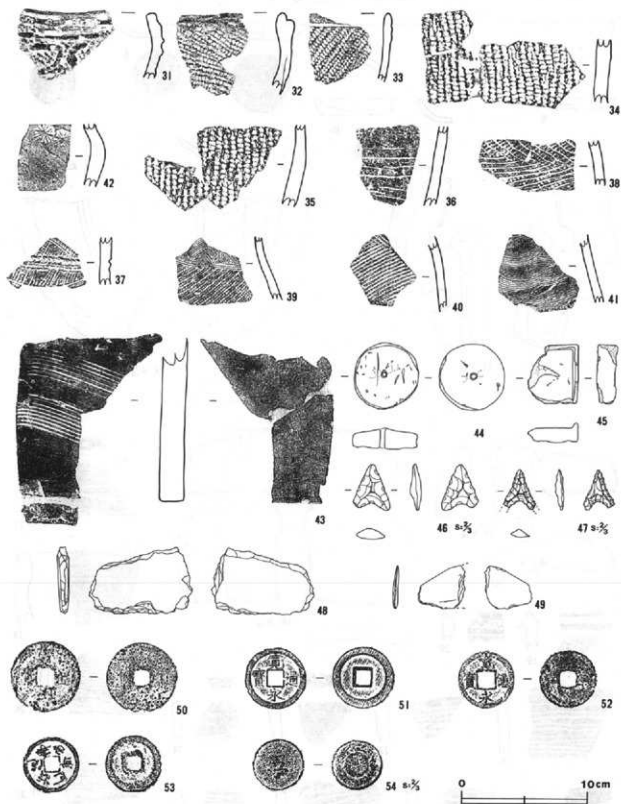
第99図区17～30・第100図区31～43は遺構外出土遺物の拓影区である。17～37は縄文土器片である。17～26・31～33は口縁部片で、17には無節の縄文が押圧され、18の口唇部には刻みがある。19は単節縄文LRと隆帯による文様が施され、20には刺突文と沈線による文様が施されている。21・22は平行沈線が施され、25には半載竹筥による刻みが施されている。31には単節縄文LRと隆帯による文様が施され、32・33には単節縄文LRが施されている。26～30・34～36は胴部片で、26～30には平行沈線が施され、34・35には単節縄文LRが施されている。36には平行沈線が施され、37には半載竹筥による刻みが施されている。38～41は弥生土器片で、38には附加条二種(附加1条)の縄文が施され、39には椎齒状工具による綾杉文及附加条一種(附加1条)の縄文が施されている。40には附加条一種(附加2条)の縄文が施され、41には連弧文が施されている。

遺構外出土遺物観察表

図録番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手広の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	高台付環 土器片	A: 10.61 B: 2.8 C: 3.4	底部から口縁部片。平底で、高台は裏下に伸びる。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラナデ。	長石・石英 明赤褐色 普通	P165, 10% 表採 P.L.26
2	高台付体 土器片	A: 14.01 B: 3.1 E: 0.6	底部から口縁部片。平底で、高台の断面形は三角形で、裏下に伸びる。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面横ナデ。底部ナデ調整後高台張り付け	長石 淡黄褐色 普通	P167, 20% A 4区表採 P.L.26
3	盤 須恵器	A: 12.8 B: 4.0	体部から口縁部片。体部は大きく外傾し、口縁部はく、の字状に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	長石、石英、針状 鉱物、黄灰色 普通	P169, 20% A 4区表採 P.L.26
4	香 灰 器	B: 1.3	底部片。平底で、底部は近台形で、裏下に伸びる。	体部内・外面ヘラナデ。	長石、石英 灰黄色 普通	P169, 10% 表採 P.L.26
5	皿 土器質土器	A: 7.1 B: 1.3 C: 4.5	平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底面凹形糸切り。	長石、石英、スロ リア、ぶい特色 普通	P170, 100% B 4区表採 P.L.26
6	二 土器質土器	A: 6.6 B: 1.1 C: 3.5	平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底面凹形糸切り。	長石 褐色 普通	P171, 95% B 4区表採 P.L.26
7	皿 土器質土器	A: 6.3 B: 1.8 C: 3.6	平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底面凹形糸切り。	長石、石英、当 土、ぶい特色 普通	P172, 80% A 4区表採 P.L.26
8	皿 土器質土器	A: 5.8 B: 0.9 C: 3.4	平底で、体部は大きく外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底面凹形糸切り。	長石 褐色 普通	P173, 50% B 4区表採 P.L.26
9	皿 土器質土器	A: 8.6 B: 1.8	底部から口縁部片。平底で、体部は内傾気味に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	砂粒、スロリア 褐色 普通	P174, 20% 表採 P.L.26
10	皿 土器質土器	A: 6.4 B: 1.3 C: 5.1	底部から口縁部片。平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底面凹形糸切り。	長石、スロリア 褐色 普通	P175, 20% D 2区表採 P.L.26



第99图 遺構外出土遺物実測・拓影图(1)



第100圖 遺構外出土遺物実測・拓影圖(2)

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徵	手法の特徵	胎土・色付・焼成	備考
第99図 11	皿 （舞臺土器）	A:10.2 H:2.0	体部から口縁部片。体部は外反して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。	砂粒・スクリップ 褐色 普通	P176, 5% C3区表採 P.L.26
12	二 十段土器	A:1.01 H:2.6 C:5.9	口部から口縁部片。平底で、体部は外反して立ち上がり。口縁部は外反する。	体部内・外面ナデ。底が凹形糸切り。	石灰・スクリップ 褐色 普通	P177, 15% C3区表採 P.L.26

図録番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大径	最大幅	最大厚					
第99図 13	不明土器	(20.2)	-	3.8	-	(463.2)	-	B4区表採	P184 表土部彩
14	不明土器	(16.7)	-	2.2	-	(477.7)	-	B4区表採	P185 輝砂・クハ付属
15	不明土器	(7.5)	(13.7)	3.5	-	(229.6)	-	B4区表採	P186
16	不明土器	(19.1)	(10.7)	1.5	-	(436.3)	-	B4区表採	P187

図録番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大径	最大幅	最大厚					
第100図 44	紡錘車	5.2	5.2	1.8	4.0	42.6	100	表採	D.P19 P.L.27
45	碇	(4.7)	(4.0)	(1.6)	-	27.9	5	表採	D.P20 P.L.27

図録番号	類別	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	石質	出土地点	備考
		最大径	最大幅	最大厚					
第100図 46	石 錘	1.8	1.5	0.4	(0.6)	100	安山岩	表採	Q33, 凹溝深縁 P.L.34
47	石 錘	(1.6)	(1.3)	0.3	(0.4)	95	チャート	表採	Q34, 凹溝深縁 P.L.34
48	石 槌	(8.2)	5.3	0.9	(51.3)	45	粘板岩	Mトレンチ, 2区	Q35 P.L.34
49	磨 擦 具	(3.5)	2.9	0.4	(6.1)	30	粘板岩	Aトレンチ	Q36 P.L.34

図録番号	器 別	計 測 値			現存率(%)	初 期 年		出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		時代	西暦		
第100図 50	寛永通宝	2.8	1.5	4.6	100	江戸	不 明	覆土中	M22 P.L.35
51	寛永通宝	2.4	1	2.6	100	江戸	1726年	覆土中	M23 P.L.35
52	寛永通宝	2.3	1	2.2	100	江戸	不 明	覆土中	M24 P.L.35
53	繪 銭	2.2	1	2.5	100	不 明	不 明	覆土中	M25「南無阿彌陀仏」 P.L.35
54	5銭付銅貨	2.0	2	4.2	100	明治	1890年	覆土中	M22 P.L.35

第4節 まとめ

大遺跡は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中・近世にわたる複合遺跡である。ここでは、特徴的な調査成果について時代ごとに整理してまとめたい。

1 旧石器時代

当遺跡からは、旧石器時代の石器集中地点を1か所確認している。径約5mの楕円形の範囲に、割片・敲石が散在して出している。割片からは接合資料を得ることができ、石器製作の場であったことが考えられ、石器製作の行程の一端をかいま見ることができる。接合資料の割片の分布をみると、3つのユニットが推察される。材質は、ほとんどがメノウで、一部人洗産と思われるガラス質黒色安山岩が含まれている。

剥離過程は、打面を傾斜に90°転移して剥離を行っている。また、剥離作業に使われたと思われる敲石の使用痕をみると平坦にならずに曲面である。また、打面の厚みが厚く、厚さにばらつきがあり、打面の傷が大きく縦割れをおこなっている割片があることから、ハンチを使わない直接打法で剥離を行っていたと思われる。ナイフ形石器が不定形であることや、基本土層や確認土層などからみても、第IX～VII文化層段階に相当すると考えられる。

2 縄文時代

遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡1軒及び、随し穴3基が検出されている。竪穴住居跡は、低位段丘上に位置し、耕作により壁が削平されており、壁溝がかろうじて検出されたのみであった。柱穴と思われるピットも確認されたが、対応関係は不明である。ピット内や確認区より上器片が出土している。また、炉跡は確認されていないが、重複している溝の覆土中から大量の焼土が検出されていることから、この焼土は住居跡の炉にあった可能性が推測される。

3 弥生時代

当遺跡の中心になる時期であり、竪穴住居跡10軒が検出されている。いずれも、弥生時代後期後半に比定される住居跡である。住居跡からは、十玉台式土器を中心に多量の遺物が出土した。出土した土器は、広口の壺形土器が主である。また、第2号住居跡からは、浅い鉢形土器が出土している。この鉢形土器は、片口で、2か所の穿孔をもち、蓋と器の兼用であった可能性も考えられる。他に、蓋のつまみとみられる破片も出土している。当遺跡から出土した十玉台式土器の特徴は次の6点である。

- (1) 口唇部には縄文による施文、又は、ヘラ状工具による刻みがある。
- (2) 口縁部は無文、又は、櫛歯状工具により波状文が施される。
- (3) 頸部文縁帯は横区画され、波状文が施される。櫛歯状工具の歯の数は3～4本のものが多い。
- (4) 口縁部と頸部の境には隆帯が走り、隆帯上に指頭による押圧がある。
- (5) 胴部には附加条二種（附加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。
- (6) 底部には布目痕がある。

他の遺跡の出土例と比較すると、大宮町「高上山遺跡」第1・2・3・4号住居跡や大洗町「団子内遺跡」第8号住居跡出土の上器と同型式と思われる。また、洞沼前川を挟んだ対岸に位置する矢倉遺跡からは、当遺跡よりも新しい段階の土器が出土している。このほかに、口縁部が無文で、隆帯を境に頸部から胴部には附加

矢二種（附加1条）の縄文が施され羽状構成をとるもの、複合口縁に附加条一種（附加2条）の縄文が施され、胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとるものが出土している。このような異型式の附加条一種（附加2条）の出土土器片（胴部片の重疊）の割合をみると、住居跡ごとに10%～20%の割合で含まれている様子が認められる。（第101図）

土器以外の出土遺物としては、紡錘車・土製勾玉・鉄製品がある。紡錘車は第1・3・4・5・6・7・10・11号住居跡から合計10点が出土している。頻りに製糸作業が行われていたことが窺われる。また、鉄鏃・鉄鏃・不明鉄製品の出土は、鉄器の普及を考える上で貴重な資料となることと思われ、さらに今後の種類の蓄積が待たれる。

住居跡の特徴の一つとして、各住居ともに壁柱穴を持つことが挙げられる。壁柱穴の配置を大きく類型化してみると、およそ以下のように分類できる。（第102図）

I 奥壁を中心に並ぶ（第10・11・12号住居跡）

II コーナー部の一部に並ぶ（第1・6・7号住居跡）

III 各コーナー部に並ぶ（第3・4・5号住居跡）

位置関係からみて、I類については、壁補強の機能が考えられる。II、III類については、上層構造の一部、壁補強、内部施設等の機能を持つことが推測される。また、II、III類の住居跡の跡跡については、中央部より奥壁寄りに設置され、炉の範囲が柱穴を結んだ線に達する位置にあり、I類の住居跡については、炉の範囲が柱穴を結んだ線に達しておらず、中心部に近い位置にある。

4 古墳時代

当該期の遺物は、壁穴住居跡1軒である。住居跡の大部分が調査区外になるため、住居跡の4分の1ほどの調査であった。出土遺物も少なく不明な点が多いが、古墳時代後期の住居跡と考えられ、この時期の集落の存在が認められた。

5 中・近世

当該期の遺物は、方形壁穴遺構4基、地下式竈2基、井戸1基、道路跡1条、近世の墓塚4基である。その他、時期や性格を特定できる遺物がなく骨片等の出土がなかったために、土坑として取り扱ったものの中に、中世の墓塚と思われるものが25基あることから、中・近世の集落であったと考えられる。

第1号井戸からは、ほぼ完形に接合できる内耳銅が16点という数で多数出土している。外面には大量のススが付着していること、内面に黒褐色のシミがあることなどから、ある程度使い込んだものと思われるが、内耳部分を観察すると、摩滅が少ないものが多いことが疑問点である。投棄された時期は、覆土の状況から短期間であると思われる、何らかの儀礼的行為が行われた跡であると考えられる。しかし、他の銅例が少ない現在、これ以上の究明は難しく、今後の興味ある課題の一つである。

道路跡は現在の道路から南東に約50m離れており、旧道があったと思われる場所に位置している。当遺跡の字名が「穴戸道」であり、穴戸氏の勢力範囲が当地まで広がっていたことや、那珂浜が海運の拠点として繁栄していたことを考えると、那珂浜→沼沼→沼沼前川とつながる海上交通による物資が内陸へと伝わる流通経路が、当遺跡の付近にあったのではないかと思われる。本跡も台地上から沼沼前川に向かって伸びていることから、中・近世には物資運搬のために使われていた可能性もあり、生活道路としても機能していた時期があったものと考えられる。

6 近代

該期の遺構としては、炭焼窯跡が4基検出されている。第1号炭焼窯には、敷石があるのに対し、他の3基にはなく、構築材も規格化された耐火煉瓦を使用している。また、他の3基と離れた場所にあり、現地説明会に来訪した地元の方の話から、戦後まで使用されていたことが確認できた。第2号炭焼窯には周壁に柱穴が確認され、上屋構造をもっていたことがわかる。

以上をまとめると、今回の調査で、旧石器時代の約2万7千年前～近代までの生活の痕跡を確認した。遺跡付近は旧石器時代に石器製作の場として利用され、縄文時代には狩猟の場として利用されると共に集落が形成された。弥生時代後期後半には、農耕や製糸を営んだと思われる人々が住み、古墳時代にも小集落が形成された。奈良・平安時代の遺構は確認できなかったが、中世には、墓域となったようであり、井戸に投げ込まれた大量の内耳鍋から、近くに集草があったものと考えられる。江戸時代になり再び墓域となった後には、炭の生産が近代まで続く。当遺跡は旧石器時代から近代まで人間生活の舞台となった複合遺跡であることが明らかになった。

註

- (1) 欠倉遺跡は、当遺跡から北東へ500mほど離れた潤沼前川を挟んだ対岸にある遺跡で、弥生時代後期後半(十王台式期)の住居跡が25軒検出されている。欠倉遺跡から出土した遺物を当遺跡の山土遺物と比較すると次にあげる相違点がある。

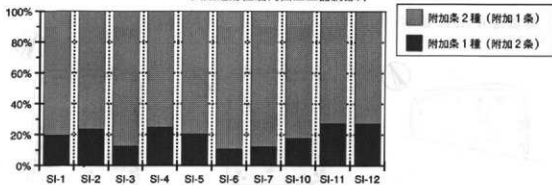
- ・中形土器において胴部最大径が比較的下位にある。
- ・口唇部に突起がみられる。
- ・頸部文様帯の文様構成が規格化されている。
- ・隆帯は比較的低く、指頭による押汗が不明瞭である。
- ・櫛歯状土具は多発化を示す。

以上のようなことから、大畑遺跡の十王台式土器は、欠倉遺跡の次の段階の型式の土器が多く、当遺跡の方が古い時期の遺跡であると考えられる。

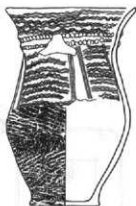
参考文献

- | | | |
|-----------------|----------------------------------|-------|
| ・茨城県教育財団 | 「原山口遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第94集』 | 1995年 |
| ・茨城県教育財団 | 「小山・八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第99集』 | 1995年 |
| ・日上市教育委員会 | 『岩本前遺跡発掘調査報告書』 | 1995年 |
| ・茨城村・陸平調査会 | 「根本遺跡」『陸平研究所報告2』 | 1996年 |
| ・勝田市文化・スポーツ振興公社 | 「武田IV」『勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第5集』 | 1991年 |
| ・板橋区遺跡調査会 | 「赤塚下寺家番匠免遺跡第1地点」 | 1997年 |
| ・大洗地区遺跡発掘調査会 | 「鮎笠 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」 | 1980年 |
| ・ひいがま遺跡発掘調査会 | 『ひいがまIV』 | 1977年 |
| ・大宮町教育委員会 | 『富士山遺跡調査報告書』 | 1979年 |
| ・大洗町団子内遺跡発掘調査会 | 『団子内』 | 1987年 |

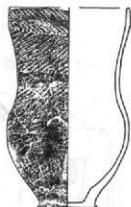
大畑遺跡住居内出土土器胴部片



SI 1-1



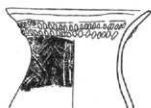
SI 6-2



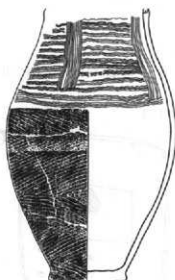
SI 6-2



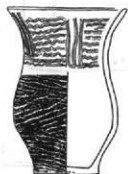
SI 2-7



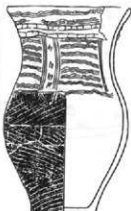
SI 12-1



SI 5-1



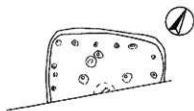
SI 3-1



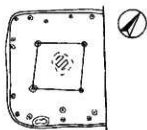
SI 5-2

第101图 大畑遺跡住居内出土弥生時代土器片分類・実測図

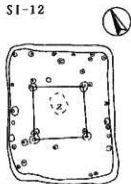
I 奥壁を中心に並ぶ
SI-10



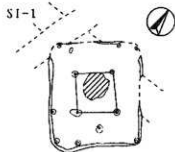
SI-11



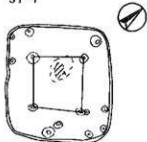
SI-12



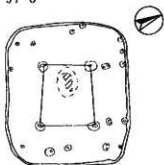
II コーナーの一部に並ぶ



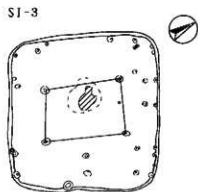
SI-7



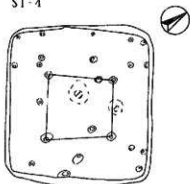
SI-6



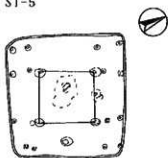
III 各コーナー部に並ぶ



SI-4



SI-5



0 4 m

付 章 大 畑 遺 跡 自 然 科 学 分 析

パリオ・サーヴィ株式会社

はじめに

大畑遺跡の発掘調査では、弥生時代の住居跡（S111）から器高約45cmの壺形土器が、横転した状態で検出された。この土器は磨形などから何らかの液体が入れられていたものと想定されており、内部を充填する土壌に内容物の痕跡が残留していることが期待された。

そこで、S111が廃絶され、土器が埋積されるまで内部に内容物が残存していたことを前提として、内容物に関する情報を得ることを試みることにした。ここで、液体として淡水、海水、醸造物（酒類など）を想定し、自然科学分析調査を実施する。その手法として、淡水か海水かの判別および液体の成分の検討に土壌理化学分析と珪藻分析を行う。また、弥生時代の木遺跡周辺における青龍生や栽培植物に関する情報を得るために花粉分析も行う。

1. 試料

試料は土器内から採取された土壌試料1点であり、同一試料で土壌理化学分析、珪藻分析、花粉分析を実施する。また、土壌理化学分析の対照試料としてS111覆土下層試料1点を選択した。

各分析項目の点数は、土壌理化学分析2点、珪藻分析1点、花粉分析1点である。

2. 分析方法

(1) 土壌理化学分析

分析項目は、海水の可能性を推定するためにpH、電気伝導度、交換性塩基、酸化第二鉄遊離、有機物などの供給を推定するためにリン酸含量（全量、可給態）、窒素含量（全量、可給態）を選択した。

pH（ H_2O ）はガラス電極法、電気伝導度（EC）はECメーター法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-パナドモリブデン酸比色法（土壌養分測定法委員会，1981）、可給態リン酸はトルオグ法（土壌養分測定法委員会，1981）、全窒素は硝酸分解-水蒸気蒸留法（土壌養分測定法委員会，1981）、可給態窒素はリン酸緩衝液抽出水蒸気蒸留法（小川ほか，1989）、交換性塩基はショーレンベルガー法（土壌養分測定法委員会，1981）、酸化第二鉄は塩酸洗浄-硝酸・塩酸・臭素水分解法（第四紀試料分析法，1993）でそれぞれ行った。

以下に、各項目の操作工程を示す。

a. 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mm篩で篩分し、通過した試料を風乾細土試料とする。また、105℃で4時間の乾燥後、分析試料の水分を求める。

風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、微粉砕試料とする。

b. pH（ H_2O ）

風乾細土10.0gを秤とり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間の放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーターで測定する。

c. 電気伝導度

風乾細土10.0gを秤とり、50mlの蒸留水を加えて振とうする（1時間）。振とう後、すみやかにECメーターの電極を懸濁液に挿入し、電気伝導度を測定する。

d. リン酸含量（全量）

風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤り、硝酸（ HNO_3 ）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（ $HClO_4$ ）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解の終了後に、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液（パナドモリブデン酸・硝酸液）を加えて、分光光度計によりリン

量 (P_2O_5) 濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5 mg/g) を求める。

e. リン酸含量 (可給態)

風乾細土試料 1.00g を 300ml 三角フラスコに秤りとり、0.002N 硫酸溶液 (pH3) 200ml を加え、振とうし (室温で 1 時間)、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採り、混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。この測定値から、試料中の有効リン酸量 (P_2O_5 mg/乾土 100g) を求める。

f. 窒素含量 (全量)

微粉砕試料 1.000g をケルダール分解フラスコに精秤し、これに分解促進剤 3g を加えた後、濃硫酸 10ml を加える。これを徐々に弱火で加熱し、次いで強熱する。分解の終了後、窒素蒸留装置により窒素巨収を行い、これを標準硫酸液で滴定して加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの全窒素量 (T-N%) を求める。

g. 窒素含量 (可給態)

風乾細土試料 10.00g を 100ml 三角フラスコに秤りとり、pH7.0 リン酸緩衝液 50ml を加えて振とうし (室温で 1 時間)、ろ過する。ろ液をケルダール分解し、水蒸気蒸留法によって窒素量を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの可給態窒素量 (Nmg/乾土 100g) を求める。

h. 交換性塩基

風乾細土試料 5.00g を浸透管に秤りとり。これを CEC 測定用の土壤浸出装置に装着し、1N 酢酸アンモニウム溶液 (pH7.0) 100ml を加え、4~20 時間で置換洗浄し、交換性塩基を浸出させる。交換浸出された液すべてを 200ml メスフラスコに入れ、水で定容する。定容液の一定量を採取し、適宜希釈した後、原子吸光度計によりカルシウム、マグネシウム、カリウムを定量する。この定量値から、試料の交換性塩基含量 (me/乾土 100g) を求める (me: mg 当量)。

i. 硫化第二鉄態硫黄 (FeS_2)

微粉砕試料をさらにメノウ乳鉢で粉砕し、235メッシュのふるいを全通させる。この試料約 10g に 1N の塩酸 (HCl) 100ml を加え、加熱 (80°C で 45 分間) した後、濾過・洗浄を行う。濾過残渣を乾燥させ (105°C で 4 時間)、再び粉砕した後、試料 5g を秤取る。硝酸 15ml、塩酸 5ml、臭素水 1ml、蒸留水 20ml を加え、80°C で 30 分間加熱分解し、濾過する。この濾液を用い、硫酸バリウム重量法により試料の硫化第二鉄含有量 (FeS_2 -S%) を求める。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理し、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリューラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上を同定・計数する。種の同定は、K. Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、K. Krammer (1992) などを用いる。

同定結果は一覧表で示し、その中では海水生種、海水〜汽水生種、淡水生種の順に並べ、各種類をアルファベット順に並べた。淡水生種については、塩分・水素イオン濃度 (pH) ・流水に対する適応能についても示し、環境指標種を略号で示す。また、産出した化石が現地性の化石か、他の場所から運搬され堆積した異地性の化石かを判断する目安として完形殻の出現率を求め、考察の際に考慮した。さらに、同定結果を元に珪藻化石の層位分布図を作成する。地積環境の解析にあたっては、水生珪藻は安藤 (1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内 (1991)、

汚濁耐性はAsai, K. & Watanabe, T. (1995) の環境指標種を参考とする。

(3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（炭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・科学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、出現個体数の一覧表に表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

3. 結果

(1) 理化学成分

結果を表1に示す。

表1 土器内土壌の土壌理化学分析結果(1)

試料名	pH (H2O)	EC ($\mu\text{S}/\text{cm}$)	リン酸		窒素	
			全量(mg/g)	可給態($\text{mg}/100\text{g}$)	全量(%)	可給態($\text{mg}/100\text{g}$)
水試料S11: 覆土(下層)	6.1	9.84	2.23	0.08	0.27	3.34
S11 土器内土壌	6.4	8.19	2.45	0.51	0.3	3.86

表1 土器内土壌の土壌理化学分析結果(2)

試料名	交換性塩基			Fe S2 %
	カルシウム($\text{me}/100\text{g}$)	マグネシウム($\text{me}/100\text{g}$)	カリウム($\text{me}/100\text{g}$)	
水試料S11覆土(下層)	12.7	3.8	0.1	0.0496
S11 土器内土壌	20.0	4.4	0.1	0.0179

(2) 珪藻化石の産状

結果を表2・図1に示す。

表2 土器内土壌の珪藻分析結果

種名	生態性			環境指標種	S11 土器内
	塩分	pH	淡水		
<i>Caloneis silicea</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	R A, U	24
<i>Navicula mutica</i> Krieger	Ogh-ind	al-il	ind	R A, S	70
<i>Navicula planibilis</i> Haszsdt	Ogh-ind	ind	ind		1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	R A	16
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>scutellus</i> (Ehr.) Raabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	R A	8
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Kramerz	Ogh-ind	ind	ind	R I	1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	R B, S	1
<i>Stauroneis obesa</i> Lagers	Ogh-ind	ind	ind	R B	2
海水生種合計					0
海水-汽水生種合計					0
汽水生種合計					0
淡水生種合計					124
					124

凡例 H.R. : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 C.R. : 淡水に対する適応性
Ogh-ind : 塩分不定性種 al-il : 好アルカリ性種 ind : 淡水不定性種
ind : pH不定性種 ac-il : 好酸性種

環境指標種

RI: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, 伊藤・堀内, 1991)

S: 好汚濁性種, U: 広適応性種 (Asai, K. & Watanabe, T. 1995)

完形殻の出現率は, 約50%である。算出分類群数は5属9種類であり, 非常に単調な組成を示す。

産出種の特徴は, 陸生珪藻の中でも耐乾性の強いA群の *Navicula mutica* が約55%と極占し, 同じくA群の *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia borealis* が10~20%と多産する。これらの陸生珪藻は, 土壌表層に特徴的に多産することから土壌珪藻とも言われている。

(3) 花粉化石の産状

結果を表3に示す。花粉・孢了化石の保存状態は不良であり, 検出数が非常に少ない。

本水ではコナラ属コナラ亜属, コナラ属アカガシ亜属, ニレ属-ケヤキ属, 単木ではヨモギ属と他のキク亜科がわずかに検出される程度である。

4. 考 察

土器内土壌のpH (H₂O) は6.4で, 対照試料と比べ若干アルカリ性を示す。一般的に海水のpHは7.8~8.3とアルカリ性である。海水の影響を受けているならば, 土器内に残留した海塩のため, アルカリ性に傾くと考えられる。しかし, 土壌中に富加された塩類濃度の指標である交換性塩基含量 (カルシウム, マグネシウム, カリウム) が低い値であり, かつ電気伝導度 (EC) も8.19mS/mと低く, 対照試料と有意な差が認められない。電気伝導度は土壌溶液中に陰イオン (硝酸

イオン, 硫酸イオンなど) や陽イオン (カルシウムイオン, マグネシウムイオンなど) の含有量の多いことを意味する。(三好ほか, 1983)。さらに, 海水の影響を受けた堆積物中に特に認められる硫化第二鉄 (FeS₂) も対照試料より低い値となっている。また, 珪藻化石でも海生種や汽水生種が全く認められなかった。次に, 淡水およびアルコールの可能性を検証するためにリン酸 (全量, 可給態量), 窒素 (全量, 可給態量) から有機物などの供給を推定した。全リン酸含量は土器内土壌で2.48mg/gと土壌中に含まれている平均的含量であり, 対照試料と有意な差が認められないが, 可給態リン酸含量が対照試料で0.08mg/100gであるのに対して, 土器内土壌で0.51mg/100gと有意な差が認められる。全窒素含量は0.31%と通常土壌中に含まれる全窒素含量としては高い値であるが, 対照試料と比べて, 全リン酸含量と同様に有意な差が認められない。微生物などによって容易に分解される易分解性有機物を構成する易分解性有機窒素含量の指標である可給態窒素含量は3.85mg/100gであり, 対照試料と比べると高い。しかし, 全体的に可給態窒素含量が低いこと, 可給態窒素含量は変動が大きいため行為な差があるとは判断しがたい。

以上から, 壺形土器内には塩類の富加が認められないために海水が入れられていた可能性は低い。また, 淡水中のリン酸は絶対量が低いことを考えると, リン酸の供給源として何らかの有機物の可能性が高いと推定される。しかし, 現時点では内容物の種類を特定するには至らず, 今後の発掘調査成果を含めて考えなければならない課題である。

表3 土器内土壌の花粉分析結果

種 類	SIH 土 器 内
木本花粉	
コナラ属コナラ亜属	2
コナラ属アカガシ亜属	1
ニレ属-ケヤキ属	1
草本花粉	
ヨモギ属	1
他のキク亜科	1
不明花粉	-
シダ類孢子	
シダ類孢子	9
合 計	
木本花粉	4
草本花粉	2
不明花粉	0
シダ類孢子	9
総 計 (不明を除く)	15

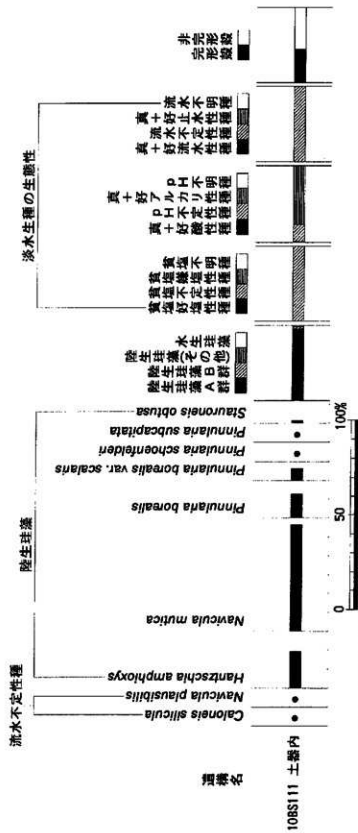


図 1 土器内土壌の珪藻化石群集
各種産出率・完形産出率は全体基数、淡水生種の生簾性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は 1% 未満の産出率を示す。

方、土器内土壌では水生珪藻が極わずかであり、陸生珪藻が優占することから、土器内に水が存在していたとは考えにくい。土器内を充填する土壌は、いわゆる黒ボク土であり、陸生珪藻を包含することが多い。そのため、土器内に珪酸化石を含む土壌が二次的に入り込んだと推定される。

また、花粉・胞子化石も少なく、わずかに検出した化石も非常に保存状態が悪かったことから、栽培植物の有無や古植生に関する検討は困難である。有機物で構成される花粉化石は、土壌微生物の活動が活発な酸化的環境下では分解・消失されやすい。今回、土器内はこのような土壌である黒ボク土で充填されていたことから、花粉化石が含まれていたとしても、現代までに分解・消失してしまった可能性が高い。

今回の調査では、土器内に液体の痕跡が残されていることを前提としているが、今回の結果を見る限り、埋蔵時には土器内に液体が残留していたとは考えにくい。土器が横転した状態で出土していることから、土器内に液体が入っていたとしても、外部へ流出したのかもしれない。

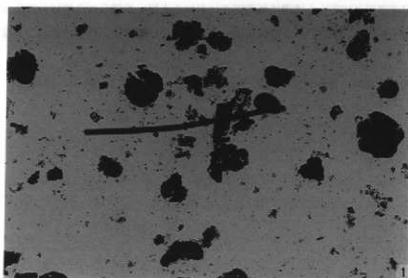
また、今後も今回と同様な形態の壺形土器の内容物について、フローネーション法や洗い出しによる有機物の調査、あるいは土器胎土に染め込んだ珪藻や脂肪酸の分析調査なども行うことで、用途について有効な情報が得られる可能性もある。

〈引用文献〉

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標群の設定と占域復元への応用, 東北地理, 42, p.73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47
- 土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法, 354p., 博友社.
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法, 140p., 葦賢堂.
- 伊藤良永・堀内誠之 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境分析への応用, 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lincolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353. BERLIN-STUTTGART.

- 三好 洋・嶋田永生・石川昌男・伊達 昇（1983）土壤肥料用語事典,250p.,農文協.
- 日本第四紀学会編（1993）イオウ分析法, 第四紀試料分析法, p119-124,東京大学出版.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色誌.
- 農林省農産園芸司農産課編（1979）土壌環境基礎調査における土壌・水質及び作物体分析法（昭和54年11月）.
- 小川吉延・加藤弘道・石川実（1989）リン酸浸出液抽出による可給態窒素の簡易測定法, 土壤肥科学会誌, 60, p160-163.
- ベドロジスト懇談会編（1964）野外土性の判定,「土壌調査ハンドブック」p.39-40, 博友社.

図版1 花粉化石プレパラート内状況写真・珪藻化石



100 μ m

(1)

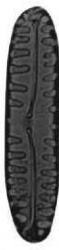


2



3

100 μ m
(2-5)



4



5

1. 状況写真 (SI11 土器内)
2. *Navicula mutica* Kuetzing (SI11 土器内)
3. *pinnularia borealis* Ehrenberg (SI11 土器内)
4. *pinnularia borealis* var. *scalaris* (Ehr.) Rabenhorst (SI11 土器内)
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SI11 土器内)

写 真 图 版

大 作 遺 跡

大 畑 遺 跡



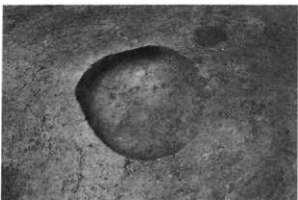
大畑遺跡出土弥生土器



大作遺跡調査終了全景



第1号土坑完掘



第9号土坑完掘



第1号集石遺構完掘



第1号住居跡完掘



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡・第1号竪穴遺構完掘

PL 2



大畑遺跡遠景

大畑遺跡



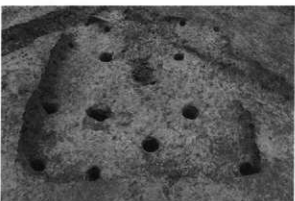
大畑遺跡調査終了風景



第9号住居跡完掘



第96号土坑完掘



第1号住居跡完掘



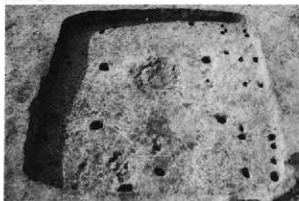
第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡完掘



第3号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡完掘



第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡完掘



第5号住居跡遺物出土状況

PL 4



第5号住居跡遺物出土状況

大畑遺跡



第6号住居跡完掘



第6号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡完掘



第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡完掘



第10号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡完掘



第11号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡完掘



第8号住居跡完掘



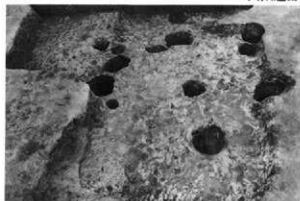
第1号方形竪穴遺構完掘



第2号方形竪穴遺構完掘



第3・4号方形竪穴遺構完掘



第4号方形竪穴遺構完掘



第1号地下式竈完掘



第1号井戸完掘



第9A・B土坑完掘



第1号井戸遺物出土状況



第9号土坑馬骨出土状況



第44号土坑完掘



第54・55号土坑完掘



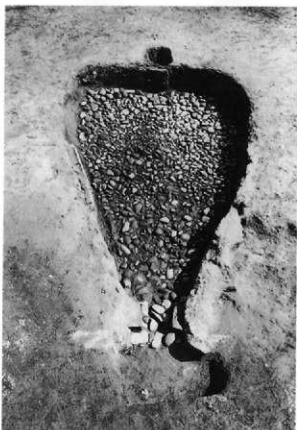
第1・2・3号墓塚完掘



第1号石器集中地点遺物出土状況



第2号炭焼窯跡完掘



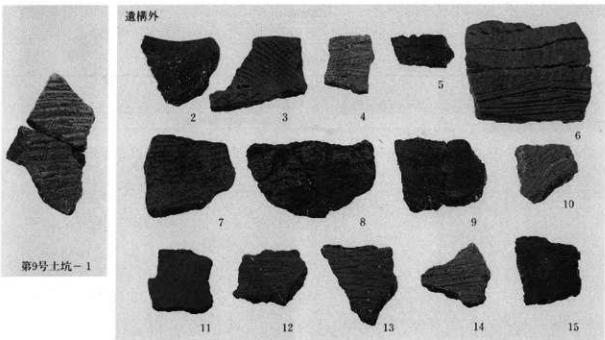
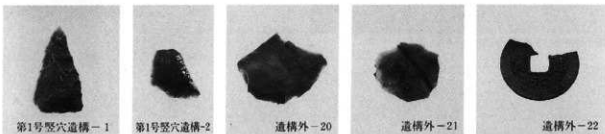
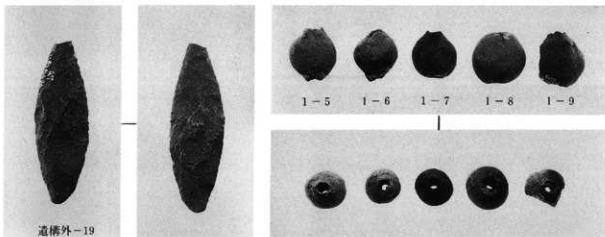
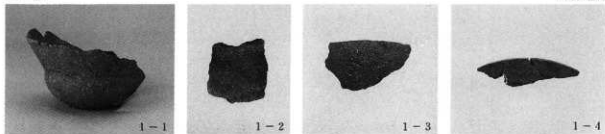
第1号炭焼窯跡完掘



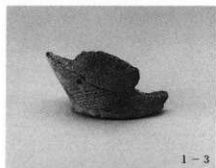
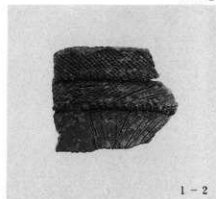
第3号炭焼窯跡完掘



第4号炭焼窯跡完掘

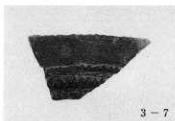
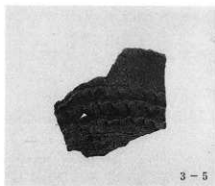


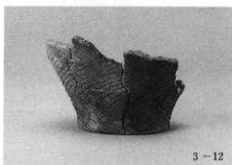
第1号住居跡・第1号竖穴遺構・第9号土坑・遺構外出土遺物

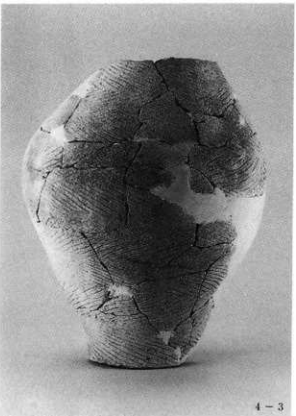


第1・2号住居跡出土遺物



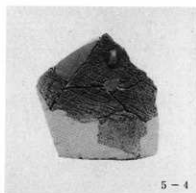




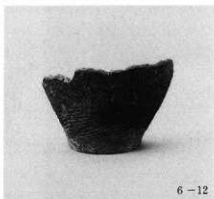


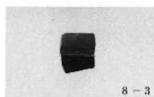
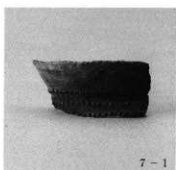
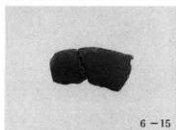
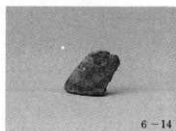
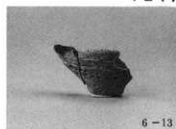
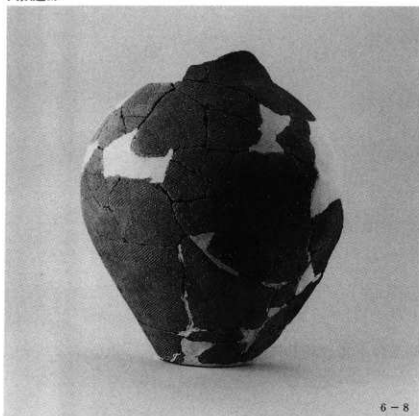
第4・5号住居跡出土遺物

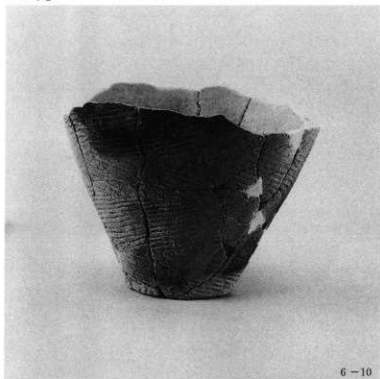




第5・6号住居跡出土遺物



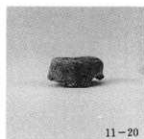






第11号住居跡出土遺物(1)







12-4



12-5



12-7



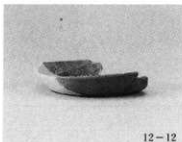
12-9



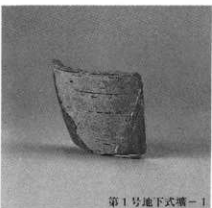
12-10



12-11



12-12



第1号地下式壺-1



第1号井戸-17



第1号井戸出土遺物





第1号溝-1



第7号溝-2



第9号溝-4



第9号溝-5



第9号溝-6



第10号溝-8



第9号溝-P146



第3号炭焼窯跡-1



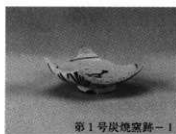
第3号炭焼窯跡-2



第11号溝-9



第2号炭焼窯跡-1



第1号炭焼窯跡-1



第1号不明遺構-1



第2号不明遺構-1



第2号不明遺構-2

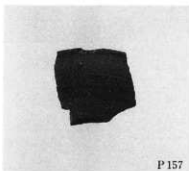
第1・7・9・10・11号溝，第1・2・3号炭焼窯跡，第1・2号不明遺構出土遺物



2-1



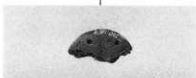
2-2



P157



2-3



P156



2-4



2-7



2-6



遺構外-1



遺構外-2



遺構外-3



遺構外-4



遺構外-5



遺構外-6



遺構外-7



遺構外-8



遺構外-9



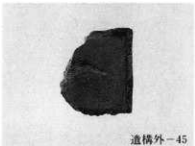
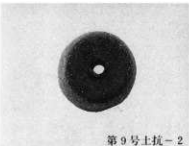
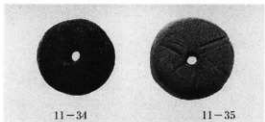
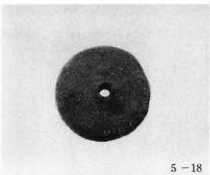
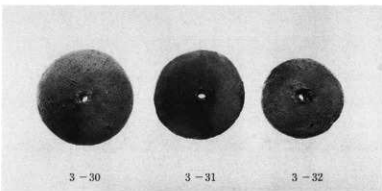
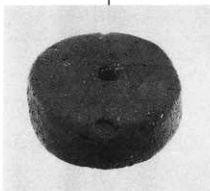
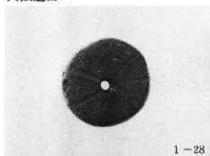
遺構外-10



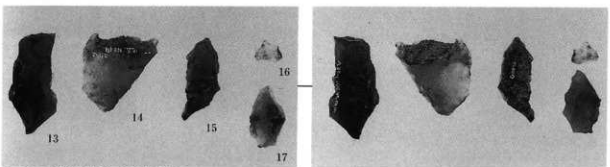
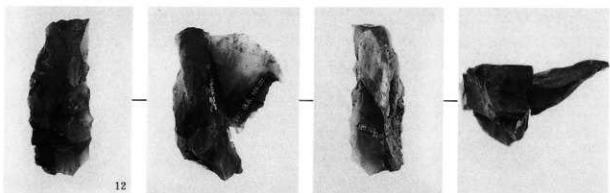
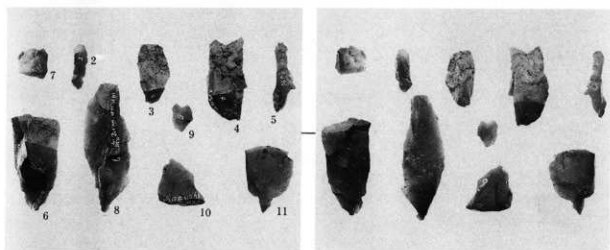
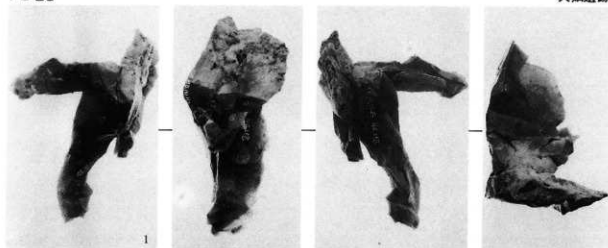
遺構外-11



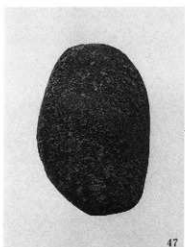
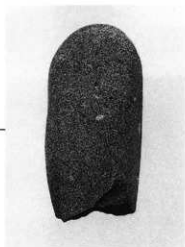
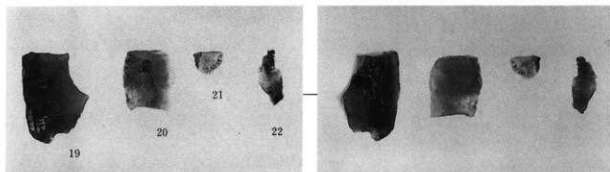
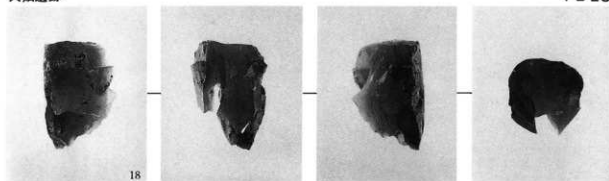
遺構外-12

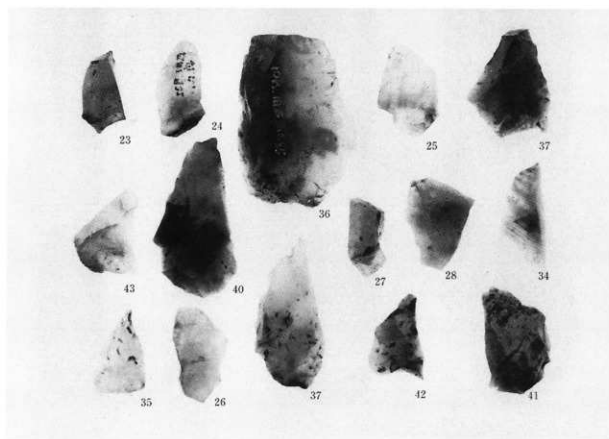
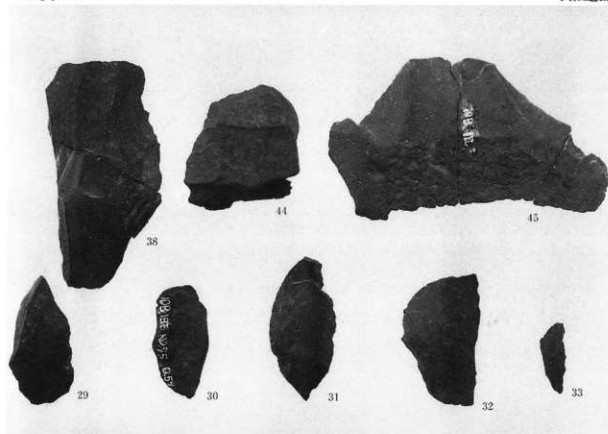


第1・3・5・6・7・8・11号住居跡，第9号土坑，遺構外出土遺物(土製品)

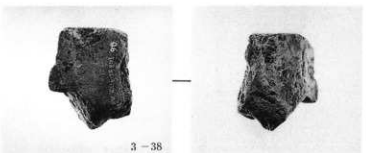
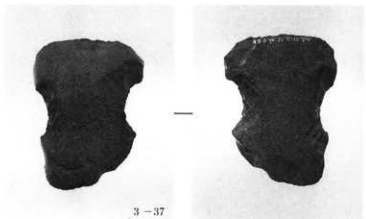
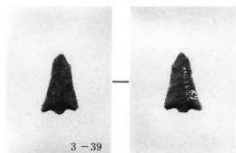
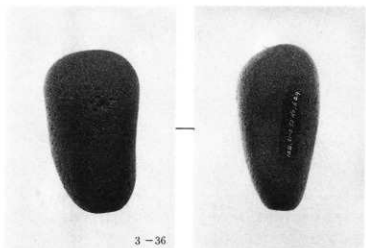
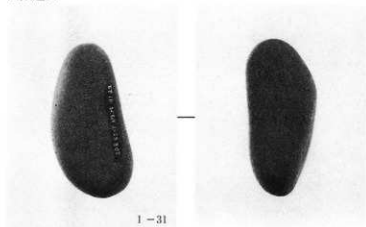


第1号石器集中地点出土遺物(1)





第1号石器集中地点出土遺物(3)



第1・3・4号住居跡出土遺物(石器)





12-19



第7号溝-3



11-36



11-39



12-20



第10号溝-10



遺構外-48



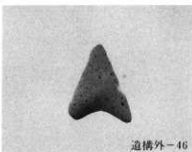
第2号遺物包含層-51



遺構外-49



第2号遺物包含層-50



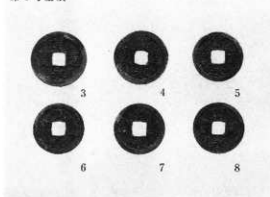
遺構外-46



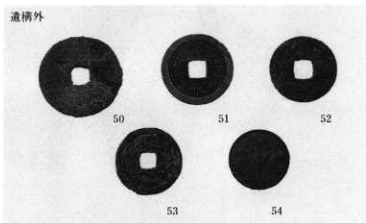
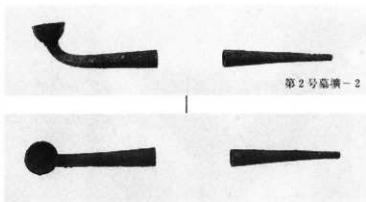
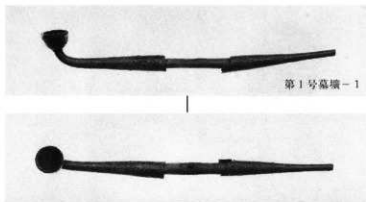
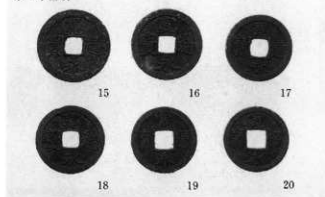
遺構外-47

第2号遺物包含層，遺構外出土遺物(石器)

第1号墓墳

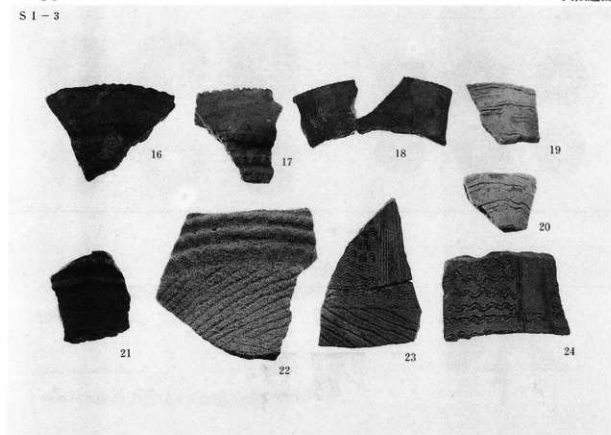


第4号墓墳

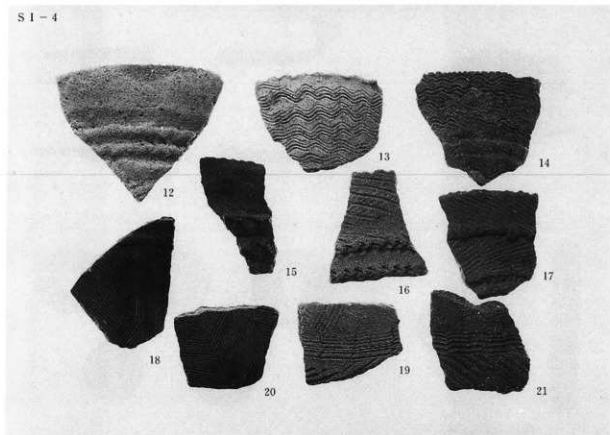


第6・11号住居跡，第1・2・4号墓墳，第9号溝，遺構外出土遺物(金屬製品)

S 1 - 3

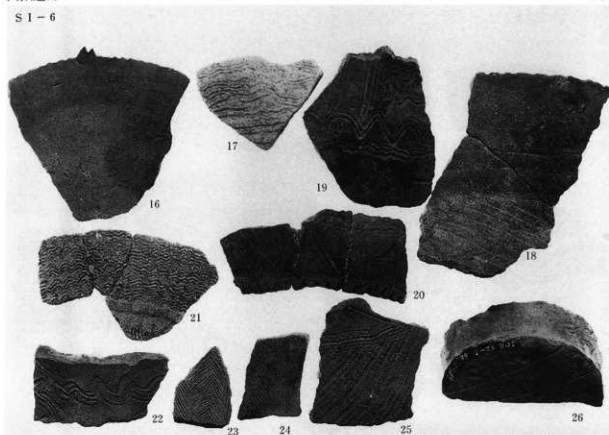


S 1 - 4

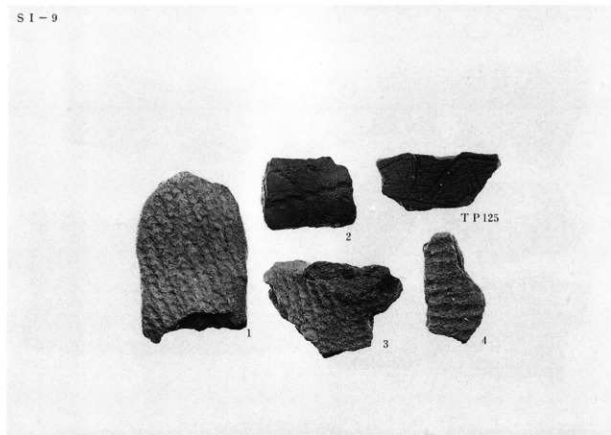


第3・4号住居跡出土土器片

S I - 6

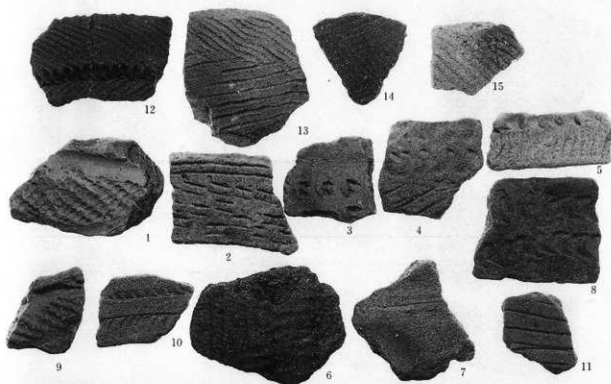


S I - 9

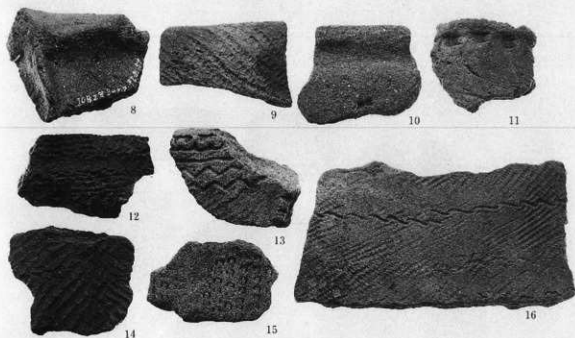


第6・9号住居跡出土土器片

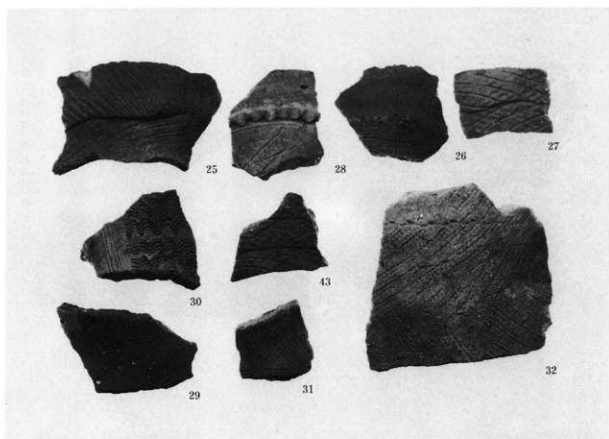
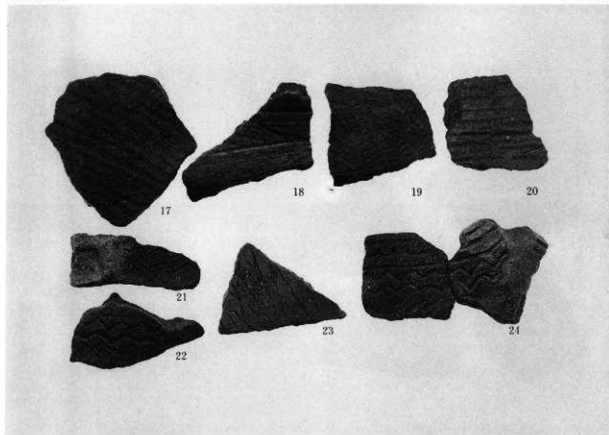
第1号遺物包含層



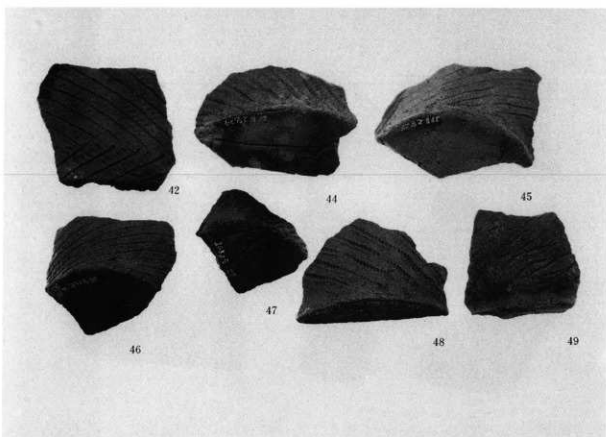
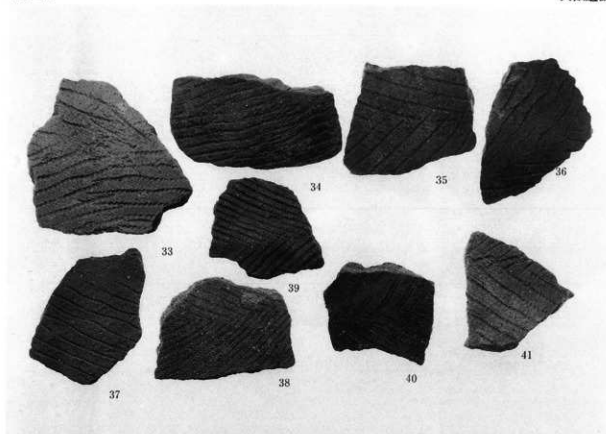
第2号遺物包含層



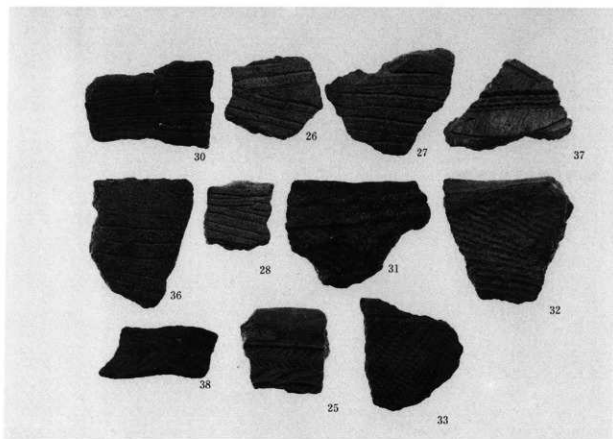
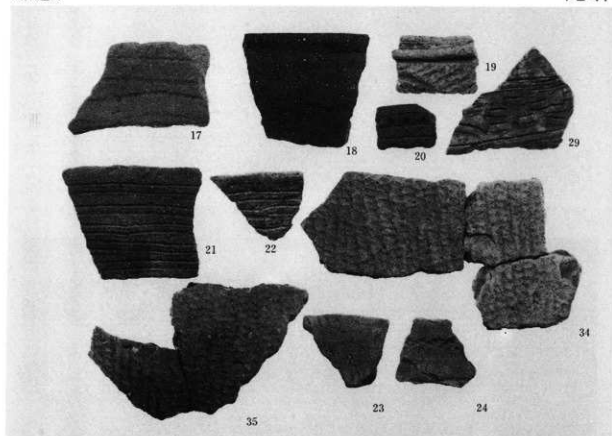
第1・2号遺物包含層出土土器片



第2号遺物包含層出土土器片



第2号遺物包含層出土土器片



遺構外出土器片



第1号井戸出土内耳鍋集合

茨城県教育財団文化財調査報告第136集

北関東自動車道(友部～水戸)建設
工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

大 作 遺 跡
大 畑 遺 跡

平成10(1998)年3月16日 印刷

平成10(1998)年3月20日 発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地2号
茨城県生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

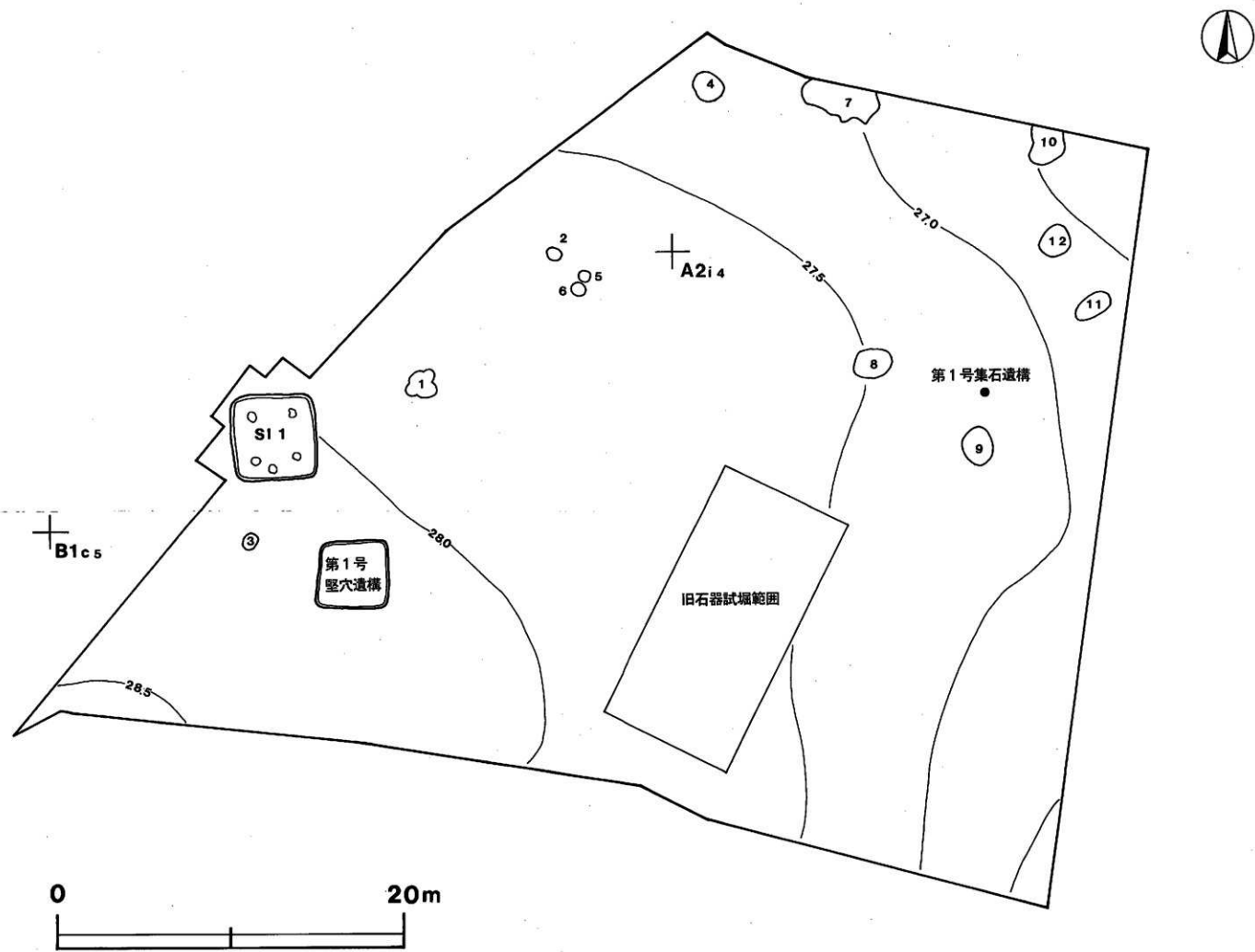
印 刷 野沢印刷株式会社
T E L 029-248-0117

付 図

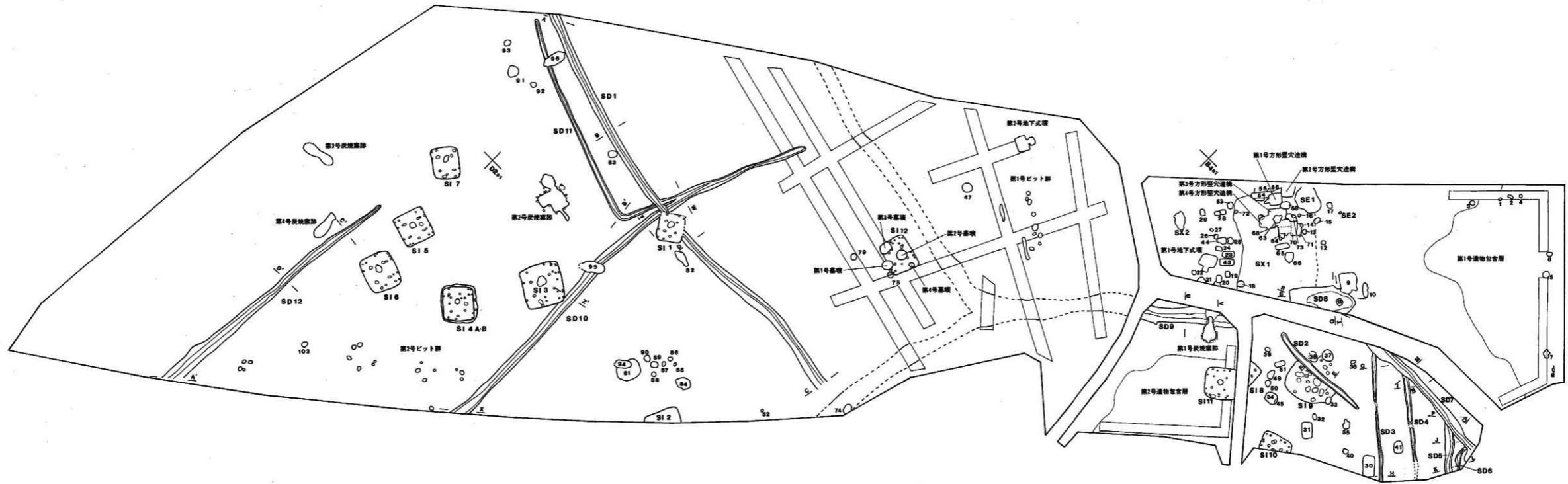
茨城県教育財団文化財調査報告第136集

大 作 遺 跡

大 畑 遺 跡



付図1 大作遺跡遺構全体図



付図2 大畑遺跡遺構全体図

2/0.23/ [11] 216